
魔法少女リリカルなのはStrikers ~ 未来を変えるスターロード ~

フレイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 未来を変えるスターロード

【Nコード】

N45080

【作者名】

フレイス

【あらすじ】

目を開けたら神様がいた

転生場所がなんとリリカルなのはの世界であった!!

ここで主人公ユウキは神様の力で遊戯王の力を入れた。

そしてユウキは遊戯王の力を使いデュエルディスクを出現させ

ユウキの相棒デバイス、イノセンスを持って

未来を変える為に冒険を始める

どんな物語をするのだろうか？

番外編 作者とテイアナの雑談 重大発表あり！！（前書き）

これからの予定について……

番外編 作者とティアナの雑談 重大発表あり！！

フレイス「というわけで始めました！！

作者とティアナの雑談コーナー！！」

ティアナ「雑談コーナーって…大丈夫なの？」

フレイス「気にするな、今私の小説は

リリカルなのはと東方をクロスしているのだが…
ここで重大発表があるのだ！！」

ティアナ「重大発表！？」

フレイス「そうだ、重大発表は………」

これからのことについてだ」

ティアナ「これからのこと？」

フレイス「そうだ、現在……私の小説では、幻想郷についてストーリーで

書いているのだが、少々問題があつてな」

ティアナ「問題って？」

フレイス「リリカルなのはの小説……かけないかもしれない……」

ティアナ「はあああああああ！？」

フレイス「というわけで、幻想郷編が終わったら

リリカルなのはの小説を復習しようと思うんだ」

ティアナ「まあ、復習は大切よね…」

フレイス「そこでだ!!」

現在作者フレイスは、東方小説をしばらく書いてみようかな〜と

考えているのだ!!」

ティアナ「リリカルなのはの復習はどうしたのよ!!」

フレイス「そんなものは後だ」

ティアナ「後って……大丈夫なの？」

フレイス「大丈夫だ、とまあこんなかんじになりましたが

今…こんなことを考えているんだ」

ティアナ「考えって？」

フレイス「過去ユウキは幻想郷で何をしてきたのだろうか…

いろいろと問題があるでしょ？」

ティアナ「確かにそうね……ユウキはどうやって

幻想郷の世界へ行ったのか謎ね……」

フレイス「その理由……教えてもいいよ」

ティアナ「教えていいの!？」

フレイス「何……簡単な理由だ、プロローグ前に

ユウキは幻想郷へ行っていたということだ」

ティアナ「えっ……じゃああの神様は……」

フレイス「映姫さんがなんとかしてくれたのでしょうか……多分」

ティアナ「考えていないの!？」

フレイス「とまあ、gdgdな話になってきましたが……

この小説できりがいいところになったら

ユウキの過去話を書こうと考えています」

ティアナ「ということは……リリカルなのところは

しばらく無いと」

フレイス「断言はできないな、復習できたら

話を進めるし」

ティアナ「まあいいけどね」

フレイス「というわけで、第1回 作者とティアナの雑談 でしたー!」

ティアナ「次回あるのかしら……」

番外編 作者とティアナの雑談 重大発表あり！！（後書き）

できれば感想とか…意見があればお願いします。

感想をもらえたらうれしくて更新スピードが上がると思います。

注意

注意

ティアナはあたしを使いますが、この小説では私を使います。
(スバルも同じです。ただしヴィータはあたしでいきます。)

注意その1

作者は遊戯王大好きです!!ですから遊戯王が大嫌いもしくは、こ
んなのりりなのじゃない!!

という方は戻るのクリックを押してください。

当然遊戯王のデュエルがありますので…

そのときは のマークをつけます!

注意その2

主人公は、遊戯王の海馬とクロウ(5D’Sより)の性格がごちゃ
混ぜになった性格ですので…

なるべく普通の人間になります

注意その3

特にキャラは壊れます…っていうか黒キャラです。いやだ!という
方はこの場面を消してください。

フリードは滅びのバーストストリームを使います。（ファースト・アラートは出ませんそれ以降）

ティアナとスバルの性格やいろいろとキャラが崩壊する可能性があるるので注意！

追伸

黒キャラはたまに出てくるだけで…

少ししか出ません

まあ社長がでますけどね（笑）

注意その4

ところどころか引用をしているところがあります

その作者様には許可をもらっておりますので

この小説はパクリだ！というかたは

今すぐ去ってください

注意その5

更新はかなり遅くなる予定です

ですので、遅いからといって

苦情のメールをしないこと

注意その6

作者は駄文ですが、

暖かく見守ってもらえればありがたいです。

注意その7

12月2日に全ての小説をリセットしました…

これからもよろしく願います!!

注意その8

感想を書いてくれたらとっても嬉しいです!!

もしよければ感想をかいてください!!

願います!!

プロローグ

「ここどこだ……。」

周りを、見ると白い空間があり知らないおじいさんがいた

「誰ですか？」

まずそのおじいさんの名前を聞いてみた。

「ふおおふおお、ワシは神様じゃよ。」

……神様という言葉聞いて……俺は手を握り締めそのおじいさん（神様）に向けて

リアルダイレクトアタックを殴りこんだ。

「神様だと……ふざけるな！そんなオカルト話に付き合う俺ではない
……」

ユウキは、どこかの社長のセリフを言っているのだが……

そこは気にしないでいただきたい。

ユウキはおじいさん（神様）に向けて殴っているとき

おじいさん（神様）がユウキに向けて……

「まって、痛いから……ああっ腰を殴らないで……」

っとそういったのでユウキはおじいさん（神様）に向けて
どンドン殴ったが、かわいそうなのでやめといた。

「で、その神様が俺を転生をしてくれるのか？
俺が死んだから。」

「……なぜ分かっているのに殴る必要があるじゃ？」

「むかつくからだ」

「…まあそういう理由でよからう。」

「で、どこの世界で転生をしてくれるんだ!!」

ユウキは、どんな世界に転生をするのかおじいさん（神様）に聞くと

極上の笑顔を返した

「リリカルなのはの世界じゃ。」

その言葉にユウキはおじいさん（神様）の肩を揺さぶった

「何!？それは本当ですか!？」

「本当じゃ!!って言うか揺さぶらないで!!」

おじいさん（神様）がそんなことを言うのでとりあえず

揺さぶるのをやめた。

次にユウキが聞きたいのはチートのことだ。

転生と言ったらやはりチートしか思い浮かばないだろう。

さっそくおじいさん（神様）にチートの話をすることだ…

「じゃあ、俺はチートももらえますか!？」

「当然じゃ」

おじいさん（神様）はユウキに向けて

再び極上の笑顔を浮かべ

どんな願いをかなえると云った。

さからユウキは……

「じゃあ、俺に遊戯王の力をください!」

とりあえず遊戯王のカードを使ってリリカルなのはの世界で遊んで見ようと考えた

それに対しておじいさん（神様）は…

「ふおふおふお、本当におもしろい…」

いいだろう遊戯王の力をあげようではないか

ついでじゃ、お前さんを14歳にしてやるぞう」

遊戯王の力を渡すとおじいさん（神様）に対してユウキは

お礼を言った。

「ありがとうございます」

お辞儀をした後おじいさん（神様）は杖を出現させユウキに向けていた。

「では、転生を開始じゃ!!」

「えっ?」

おじいさん（神様）は杖を使いユウキに電撃を与える!!

「うわあああああ!?!めちゃくちゃだろ!!」

とりあえず電撃が痛い……クッ……

どうしてこんなことに……

「あっそうそうPSPも渡しておくからがんばるんじゃよ!」

なぜかおじいさん（神様）はなぜかユウキに向けてPSP最新型3

000

を手渡した。

というか、どうやって手渡したんだ!?

杖はどうしたんだ!?

というか…

「なぜPSPを渡す必要があるんだよ!?!」

「原作ブレイクのためじゃ」

「……もういいよ」

こうしてユウキはリリカルなのはの世界へ転生をした。

* * * *

Sideユウキ

ああ、くそ、どうしてこうなったんだ…

ユウキはとりあえず起き上がると

目の前にオレンジの髪をツインテールにした十六歳の少女のを見て

気づいた

「……(な、なんでティアナがいるの——!?)」

こうしてユウキは転生をした物語が始まる

プロローグ（後書き）

ユウキ「……一体どういうことだ!？」

フレイス「どういうことって?」

ユウキ「今まで書いていた小説を消したの!？」

フレイス「まあ、しょうがないさ……だから次から

完全にオリジナル小説で行く」

ユウキ「……まあ作者が言うならいいけど……

次から絶対にやめろよ!」

フレイス「了解です!っというわけで

これからも小説を見ていただくありがとうございます
ではまた」

主人公設定（前書き）

前書き 先に進めば、設定が増えます

ご期待ください

主人公設定

名前・ユウキ・ルミナス

種族・人間

性別・男

年齢・ティアナと同じ

髪・TOGアスベル・ラントの髪型

目・両目が水色

性格

普段は明るく遊戯王のキャラクターでいえばクロウ・ホーガンの性格です

戦闘にの時は冷静でティアナの命令を聞く

知識はティアナと同じレベル、だが説明をするのが苦手
ティアナがユウキの代わりに説明する

一人で説明することは出来るのだが、少し時間がかかる

理解するのは、スバルと同じ。
難しい説明についていけない

一人称・俺

デバイス（武器）

イノセンス

分類：ストレンジデバイス

待機状態 腕時計

魔力光・水色

魔力変換資質・風

魔法（技）

蒼破一閃そうはいっせん

希少技能

遊戯王のデュエルディスクを使って色々なことをする
さらに自分自身に装備魔法を装備することができる

第1話 試験DA・！（前書き）

お待たせしました

では第1話をどうぞー！

指摘等よろしく願います

第1話 試験DAー！

新暦0075年 4月 ミッドチルダ

臨海第8空港近隣 廃棄都市街

ミッドチルダにある第8臨海空港から少し離れた廃棄都市群

そこには…

「ふっ！しっ……やっ！はあ！！」

シャドーボクシングを思わせるような素早い動きで空中に拳を叩きこむスバル

その側ではユウキ、ティアナがいた

「スバル、あんまり暴れてると試験中にそのオンボロローラーが逝っちゃうわよ」

「暴れまくって壊れるんじゃないのか？」

「うぐっ……ティアもユウキも嫌な事言わないでよ！……ちゃんと油を差さしてきたよ！！」

「ほう、オリーブオイルでか……。」

「違うよー！！」

「そうか、ならサラダ油か」

「だから、違うって言っているでしょ！！」

「っていつか……私は料理の調味料で油さしていないよ！！」

「何！？」

「どうして驚く必要があるの！？」

ユウキはスバルの言葉に驚いた！！

なぜならスバルがつっこんでくれたからだ。

そんな中ティアナはユウキとスバルを見て”はあ”とため息をついていた。

「あんた達、いいかげんにしなさい！！いつまでもコントをしてい

るのよ…」

「えっ…これコントなの？」

「ユウキの勘違いじゃ…」

「……いいから早く整列しなさい!!」

「は、はい!!」

その直後にブーツと云うブザーが鳴り、スバルとティアナとユウキの前に空間モニターが現れ、

リインフォース?が映った

『おはようございます!さて、魔導師試験の受験者さん3名、揃ってますかあ?』

「」「」「はい!!」

『確認しますね?時空管理局陸士386部隊所属のスバル・ナカジ
マ二等陸士と』

「はい!!」

『ティアナ・ランスター二等陸士!』

「はい!」

『最後にユウキ・ルミナス二等陸士!』

「はい!」

『所有している魔導師ランクは陸戦Cランク。』

『本日受験するのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で、間違い
ないですね?』

「はい!」

「間違いありません。」

「こちらと同じく間違いはないです、あなたが試験官ですか?」

『はい!本日の試験管を務めますのは、わたくしリインフォース?
空曹長です!よろしくですよ』

「」「」よろしくお願いします!」「」

『3人はここからスタートして、各地に設置されたポイントターゲ
ットを破壊!』

あつ！もちろん、破壊しちゃダメなダメージターゲットもありますからね？

妨害攻撃に気をつけて、全てのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指してくださいです。

何か質問は？』

「あつ、えーっと……」

「ありません」

「同じくこちらありません」

『では、スタートまであと少し！ゴール地点で会いましょう！ですよ』

リンが人差し指を立てながらウインクをすると通信画面は消え、代わりにレース場などでよく見る3つのランプが表示される

「レディ……」

最後の1つの色が変わり、ティアナがスタートの合図に入る

そして、全てのランプが消えモニターにスタートの文字が表示された

「「ゴーっ!!」」

「行くぜ!」

3人がスタートしたことにより

上空のへりにいるフェイトとはやての2人もモニターで確認していた

「おっ! 始まった始まった!」

「お手並み拝見っ」と

スタートしたスバルとティアナとユウキの3人はスタート地点から
一番近いターゲットの

ビルを目指していた

「ティア、スバル、こっちのターゲットは任せろ!」

「分かった」

「頼りにしているよ」

スバルはユウキに向けてウインクをした。

それを見たユウキは、スバルに向けて、

「貴様に言われる筋合いはないわ！」

なんと社長の言葉で言葉を返した。

もちろんスバルはユウキの言葉に

涙目になっていた。

「ひ、ひどいよユウキ……」

「…冗談だ、じゃあ行ってくるぜ!!」

ユウキは、スバルに謝り

先に奥にいるターゲットを潰しに先に進んで行った

S i d e ユウキ

「敵発見!!! さあ行くぜ、イノセンス!」

ユウキはターゲットを発見し、イノセンスを構えた

ユウキの右腕からデュエルディスクが出現し

LP4000と表示される

これはユウキの稀少技能^{レアスキル}デュエルディスク…

その名のとおり遊戯王で使うために必要なものだが、

デッキは40枚でLP4000ポイント、ダメージを受けるたびに

当然ライフが減るが、プロテクションを張ってくれる。

ライフが0になったときプロテクションは発動しなくなり、

ライフが4000になるのは10分必要だ。

その間イノセンスで抵抗するしかない。

初期手札は5枚、ドローするには1分必要、ドローすることができない。

最大手札は7枚エンドフェイズに手札を1枚墓地へ送る。

あとは遊戯王OCGで確認してほしい。

ちなみに手札は手に持っているのではなく、

ユウキのストレージデバイス、イノセンスに保存されているのだ
さらに手札から装備カードを使って、

自分自身に装備することができる

そして現在、装備カード《執念の剣》を装備している

《執念の剣》

装備魔法

装備モンスターの攻撃力・守備力は500ポイントアップする。
このカードが墓地へ送られた時、このカードをデッキの一番上に戻す。

「蒼破……一閃！」

ユウキは、《執念の剣》を使い衝撃派をターゲットに向けて放つ

そして、ユウキが放った衝撃波はターゲットを次々と破壊する。

さらにユウキはイノセンスから遊戯王カードを取り出し

デュエルディスクにモンスターを置き召喚する。

「さらに手札から、

《BF - 黒槍のブラスト》

《BF - 疾風のゲイル》を召喚だ！」

《BF - 黒槍のブラスト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

自分フィールド上に「BF - 黒槍のブラスト」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《BF - 疾風のゲイル》 ブラックフェザース

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守 400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にす
る事ができる。

「ブラスト、ゲイル、ターゲットを攻撃！」

ユウキの指示でブラストとゲイルはターゲットへと向かう

「ブラスト！ 『デス・スパイラル』」

ブラストは、槍を使って次々とターゲットを撃破していく

「ゲイル！ 『ブラック・スクラッチ』」

ゲイルもブラストに負けずにターゲットを破壊する

そしてブラストとゲイルの活躍でこのあたりのターゲットを全て破壊した

「ここらへんのターゲットは全て破壊したから大丈夫はず早く合流するか。」

現在ユウキのフィールド上

手札3

LP4000

ブラストATK1700

ゲイルATK1300

装備中《執念の剣》じっねんのけん

S i d eスバル

一方スバルはというと…中のターゲットを破壊していた

「ふっ……はぁ……！」

ターゲットの攻撃に対し、スバルはローラーブーツを巧みに操り、壁を使いながらオートスファイア2機を破壊していく

そして残りのオートスファイア1機はゆっくりと移動しながらスバルを狙撃するが、

スバルも落ち着いて回避行動をとりながら間合いを詰めていく

「ロードカートリッジ！リボルバー……！」

射程圏内に入り、スバルが右腕のリボルバーナックルのカートリッジをロードする

「シューッ！！」

リボルバーナックルから撃ちだされた魔力弾は高速でターゲットに向けて飛んで行き、

ターゲットを爆散させた

ターゲットの破壊を完了させたスバルはユウキ、ティアナと合流を目指す

S i d e ティアナ

その頃、外にいるティアナは……

「（落ち着いて……冷静に）」

屋上にいるティアナはビル内部にあるターゲットを撃ち抜くために
一度自分を落ちつけようと深呼吸をする

その直後にティアナは足元にオレンジ色のミッド式魔方阵を展開さ
せる

そしてオレンジ色の魔力弾が窓際にいたターゲットを全て撃ち抜く

「よし……」

それを即座に看破したティアナは
ビルとビルの間にある連絡通路にアンカーを撃ちこみ、地上へと降り立った

そしてその直後にはビルの内部から出てきたスバル、
さらに外側からユウキと合流した

「良いタイム！」

「当然！」

「だが油断するなよ！」

ユウキはデッキからカードをドロ―してイノセンスに保存する

Sideはやて

「うん、いいコンビだね」

フェイトちゃんという言葉で私は頷いた…

でも……

「そやけど、難関はまだまだ続くよ」

「特にこれが出てくると、受験者の半分以上が脱落することになる
最終関門

……大型オートスフィア」

「今の3人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい中距離攻撃
型の狙撃スフィア」

「どうやって切り抜けるか、知恵と勇気の見せどころや」

S i d e ユウキ

第2関門へと差し掛かっているスバルとティアナとユウキの3人

その3人を察知したスフィアは即座に迎撃態勢を整える

「いつくぞー!」

「スバルうるさい!!」

「うるさいのはティアナだと思うんだが…」

「なんか言った?」

「いや、何でもありません…」

ユウキはこれ以上ティアナに言うのをやめようと

心の中で思った。

* * * *

ビルの入り口にあつた十数機のオートスフィアとターゲットを破壊したティアナとスバルとユウキ

ティアナはその攻撃を瓦礫を利用しながら防御を行い、的確に狙撃し続け、

カートリッジの魔力が切れるとすぐに新たなカートリッジを補充して狙撃を続ける

ユウキはプラストとゲイルに指示をして次々とターゲットを破壊する

そして、スバルは…

「ウオオオオオー！！ふっ！はあ！！」

ローラーブーツの速度で狙撃をよけながら壁を使い、

オートスフィアの攻撃はリボルバーナックルで相殺する

そして柱をローラーブーツで壁を蹴ってスフィアを破壊した

スバルがティアナとユウキの元に合流し、ティアナはセンサーでタ

ーゲットがもういないか確認する

「よし、全部クリア！」

「この先はどうなっている？」

ユウキはティアナに聞くとティアナは次の作戦を

説明する。

「このまま上。上がったら最初に集中砲火が来る。

オプティックハイド使って、

クロスシフトでスフィアを俊殺……やるわよ！」

「了解！」

ユウキとスバルはティアナに向けて大きな声で返事をした

目指すは上の階……だが階段を使うよりも今現在自分たちの上にある穴を使えば

ショートカットできると踏んだティアナは

そこにアンカーを撃ちこみ、巻き上げを開始する

アンカーが巻き上がる音に反応したオートスフィアは狙撃の準備を

始め、

巻きあがりが終わると同時に嵐のごとく狙撃され続ける

だが、そこにあつたのはティアナのアンカーガンのみ

それをへりで見っていたフェイトとはやてはモニターに顔を近づけ、
なのははモニターを見て納得した

《5!》

《4!》

姿の見えない所にティアナの声が聞こえ、遠方から高速で来るロー
ラーブーツの音が聞こえる

そしていくつかのスフィアが後方から破壊された

《3!》

《2!》

カウントが残り少なくなり、スバルの姿がアンカーガンよりも後ろから現われたことにより、

オートスフィアの集中はスバルの方へ向く

そしてすかさず攻撃をするがスバルはそれを回避しながらカートリッジをロードさせる

《1!》

「ふっ!!」

スバルが空中に飛びながらも攻撃を続けるがスバルには当たらない…

《0!》

カウントがゼロになるとスバルとは別の方に姿を隠していたティアナが現れる

さらに別の方にはユウキがティアナと同じアンカーガンを構え
オートスフィアを狙いに定めた

「クロスファイヤー…！」

「リボルバー…！」

「スターウインド…！」

「『シューーーーッ！』」

ユウキとティアナとスバルが放った弾丸はオートスフィアを貫き
破壊された。

* * * *

「なるほど、これは確かに伸び甲斐がありそうだね」

フェイトはモニターを見て、ユウキ、ティアナ、スバルのチームワークは

抜群だと心の中で思った。

「ふふっ。そやる?」

はやてはフェイトに向けてウインクをする。

「残りは最終関門!」

* * * *

「イエーイ! ナイスだよ、ティア! ユウキ! 1発で決まったね!」
スバルはユウキの手を合わせハイタッチをした。

「ま、あんだけ時間があればね」

ティアナは作戦がうまくいってよかったとつぶやいたが…

それに対してユウキは、「はあ」とため息をついていた。

「だが、その衝撃でゲイルとブラストは巻き添えて破壊されたがな
おかげで俺のライフは1000削られた…」

ユウキLP4000 LP3000

ユウキはスバルのサポートを回そうと考える

ブラストとゲイルにスバルのサポートを回すように指示をした…
だが、ティアナの作戦によってターゲットを破壊できたのだが、
ターゲットの爆風にブラストとゲイルは破壊されユウキは
1000ポイントのダメージを受けたのだ。
そしてユウキはスバルに向けてこう話した。

「スバルにサポートをするのが失敗だったのかな？」

「ひ、酷いよユウキ!!」

スバルはユウキの言葉に涙目をする…

ゆっくり見たらスバルはとてもかわいいが…

今、こんなことをしている時間はない。

ユウキはまだある使命がある…

それは、ティアナがオートスフィアによって怪我をさせないことだ。

ユウキはSTS第1話のことを思い浮かべ

ティアナを狙うターゲットの場所に向けて銃を向けた。

「後は…」

そして、スバルの後ろにいるオートスフィアへと狙いを定めて狙撃をした。

「俺がこいつに気付かなかつたらスバル…
終わりだったな」

ユウキはオートスフィアを破壊するのを確認すると

スバルはユウキに近づき向けてお礼を言った。

「…あ、ありがとうユウキ」

「次から周りを見たほうがいいかも…」

スバルはユウキの言葉に”うん”と傾いた。

それと同時にティアナはユウキに話しかけた。

「でも、どうしてターゲットがいると分かったのよ？」

それはそうだろう…まだターゲットが出てきていないのに
なぜかユウキはターゲットに向けて狙撃をしたのだから

ティアナは、それが知りたかったのだ。

ユウキはティアナの質問に…こう答えた。

「……勘だ」

「ふーん」

ユウキはなんとかごまかすことに成功したようだ。

ティアナに返答を終えるとユウキは

スバルに向けて残り時間は何分か聞いてみた。

「スバル、残り時間は何分だ？」

「えーと、後5分30秒」

「（ティアの怪我を回避したから少し時間が余っているということか…）」

ユウキが考えていると、ティアナは

「ユウキ、もう時間が無いから作戦言っわよ」

「あっ、了解」

* * * *

ゴールへと続くハイウェイの出口

その上空ではフェイトとはやての乗るヘリがとどまっていた

そしてティアナの姿が見えた

「おっ！出てきた」

「うん。・・・あれ？だけど・・・」

そこに映っていたのはハイウェイを走るティアナの姿

そして中距離狙撃型オートスフィアから放たれた攻撃は

ティアナに命中して爆発する

「あっ！？直撃！？」

「うっん。違う」

そして先ほど狙撃されたはずのティアナは何事もなかったように走っており、

次々撃ってくる攻撃を左右によけることで回避いた

「高速回避……？いや、ちやうな……」

「あの子……ティアナは囹」

「という事は……」

Side ユウキ

ユウキはティアナの近くでこのカードを発動をしていた

《魔力儉約術》

永続魔法

魔法カードを発動するために払うライフポイントが必要なくなる

「（こいつで、ティアのフェイクシルエットに使用する魔力を最小限に抑えることが出来る……）」

「《スバル、一撃で決めなさいよ！？……でないと、3人で落第なんだから！！》」

ティアナとユウキとは離れたビルの上……その場所でスバルは水色のベルカ式魔方陣を展開していた

「私は空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない……ユウキみたいに遠くまで

届く攻撃もない……」

できるのは全力で走ることと、クロスレンジの1発だけ！
だけど、決めたんだ！あの人みたいにな、強くなるって！！
誰かを……何かを守る自分になるって！ウイング！ロー！

「……ッド！！」

ウイングロードは中距離狙撃オートスフィアの設置されているビル
へと突き刺さる

そのことを察知したオートスフィアはティアナから音がした方へと
狙いを変える

ウイングロードの用意も終え、スバルはスタートダッシュの構えを
とる

そしてスバルを狙撃しようとしたオートスフィアの元に…

ティアナの幻影が現れ、オートスフィアのロックがスバルから外れる

「……今だスバル！！」

ユウキからの合図を受け取り、スバルはリボルバーナックルのカー
トリッジをロードさせる

「……ぞお……！！」

スバルはスタートダッシュでウイングロードを突っ切る

そしてビルが近付くとスバルは拳を引いた

「うおおおおおお！！！！」

壁を壊したものよりも重い一撃をオートスフィアへと繰り出す

だがそれは障壁によって阻まれる

「うおおおおおおおあああああ！！！！」

障壁に阻まれながらもさらにカートリッジをロードさせ、
少しずつ……少しずつ障壁へと指を入れていく

「うりゃあああああ！！！！」

そしてついに障壁を掴み、引き剥がして突破した

だが障壁を剥がされたスフィアは距離のないスバルを狙撃するがスバルはそれを腕をクロスし、

バク転でよけていく

スバルは魔方陣を展開させ、カートリッジをロードさせる

「一撃必倒オ!!!」

「ディバイーン、バスターーーーー!!!」

撃ちだされる水色の砲撃

威力は、射程もないが十分な威力がありその砲撃で最終関門は粉々に吹き飛んだ

「っ……はぁ……!」

フェイクシルエットを消し、ティアナは大きく息を吐く

ユウキは、ティアナを心配した

「大丈夫か？」

「うん、ユウキのカードでなんとかかね…」

「無理するなよ」

「わ、分かっているわよ／＼」

「《スバル、残り時間は？》」

「《後、3分40秒》」

「《了解、とりあえず合流してゴールを目指すぞ！》」

* * * *

ゴール地点

ゴール地点ではタイマーと共に受験者三名が来るのを待っているリインの姿があった

「あっ！きたですね！」

リインの目線の先

そこにはティアナとスバルとユウキがハイウェイを走る姿があった

「残り時間は？」

「1分だよ！」

「そうか、ティアア!!」

「分かっているわ!」

ティアナはデバイスで最後のターゲットを狙撃する

「はい、ターゲットオールクリアです!」

「よし、後は走るだけだ!!」

ユウキ達はゴールに入り

無事クリアをした…

その後スバルはなのはさんと再会して涙が出て

抱きついたのであった…

おまけ1

ティアナ「はあ、疲れた」

ユウキ「まったく、スバルが油断をしていたらやばかったな」

スバル「えっ、それってどういう意味なの?」

ユウキ「俺がオートスフィアに気付かなかったら、

ゴールできなかつたかもしれないということ」

ティアナ「確かにそうね…」

スバル「…これって私のせいなの!?!」

ユウキ「…当然だ、よって今日アイスおごらないからな」

スバル「そ、そんなあ(泣)」

おまけ2

なのは「ねえ、私一度も出ていないけど…」

レイジングハート『……今回はあきらめてください』

なのは「そ、そんな!?!作者さん

どうして私を出さないの!?!

私が白い悪魔だから!?!」

レイジングハート『……(マスターは誰と話をしているのでしょうか?)』

おまけ3

スバル「ねえねえユウキ」

ユウキ「なんだスバル?」

スバル「あのさ私を助けるときに

ティアと同じ武器使ったよね?」

ユウキ「ああ、確かに使ったな」

スバル「どうしてタイヤと同じ武器持っているの？」

ユウキ「LPが0になったらモンスターと

俺の装備魔法が消えるんだ

対抗する手段として

俺はアンカーガンを持っているのさ」

スバル「そうなんだ…じゃあユウキは

2つデバイスを持っているんだね」

ユウキ「まあ、そういうことだな」

第1話 試験DA-！（後書き）

ユウキ「何、俺が装備カードを使って新しい技だと!？」

フレイス「そのとおり、前回の話とはかなりかわったからな」

ユウキ「そうなんだ、でもティアはここにいないの？」

フレイス「まあ、ティアナにはまた後でということだ」

ユウキ「そうなんだ、じゃあまたあとがきでティアと…」

フレイス「まあ、こんな作者ですがよろしく願いします！」

第2話 結果発表DA-！（前書き）

ごめんなさい

今回は短いです

それでもよろしいのでしたら

ぜひぜひご覧ください

第2話 結果発表DAー！

試験が終わった俺たちは、フェイト執務官と八神捜査官に呼ばれていた。

そこで聞かされたのは、ミッドチルダ臨海空港火災事件のこと

そしてその火災の後に八神捜査官が部隊を設立する決意をしたこと

そのためにこの4年間かけたという話だ

「……とまあ、そんな経緯がって八神二佐は新部隊設立の為に奔走」

「4年ほどかかってやっとスタートを切れた……というわけや」

「部隊名は時空管理局本局遺失物管理部“機動六課”！」

「登録は陸士部隊、フォワード人は陸戦魔導師が主体で特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

「遺失物……“ロストロギア”ですね？」

「でも広域捜査は一課から五課までが担当するから、ウチは対策専

門

「そうですか」

「《ティア、ユウキ……》」

「《なによ?》」

「《何だ?》」

「《ロストロギアってなんだっけ?》」

「《うっさい、話し中よ!後にして!》」

「《そうだな、とりあえずこの話が終わってからにしろ》」

「《…分かった》」

「で、スバル・ナカジマ二等陸士、それにティアナ・ランスター二等陸士

ユウキ・ルミナス二等陸士」

「「はい」」

「私は3人を機動六課のフォワードとして迎えたと思って考えてる。

厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は積めると思うし……

・
昇進機会も多くなる。どないやる?」

「「……あの……えっと……」」

「うーん……」

八神捜査官から云われたことにスバルとティアナは困惑している様子

ユウキは考えていた

「スバルはテストロッサ・ハラオウン特別教導官と高町特別教導官
補佐に

魔法戦を直接教われるし……」

「はい……」

「執務官志望のティアナとユウキには私でよければアドバイスとか
出来ると思うんだ」

「あ……いえ……とんでもない……と云いますか、恐
縮です、といたしますか……」

「……ごめんなさい、言葉が見つかりません」

「ははっ、別にええよ」

「返事はまた今度でいいから、ゆっくり考えればいいよ」

「あ、ありがとうございます」

ユウキは2人にお礼を言って機動六課の話は保留となった

そんな中なのはさんが試験結果を持ってやってきた。

「取り込み中、かな？」

「平気だよ」

確認をとってから、なのはさんが八神捜査官の隣に腰を下ろす。

「……とりあえず、試験の結果ね。三人とも技術はほぼ問題無し……制限時間に間に合っているし……文句なしで合格です」

「「や、やったああああ」

「よかった……（どうやらうまくいったみたいだな……）」

こうして俺たちは見事合格した

* * * *

「ああ……なんか色々緊張したあ……」

「まあね」

「合格できたからよかったな……」

「だね。……でさ、新部隊の話……ティア、ユウキ、どう

する？」

「……そうだな、スバルは行きたいんだろ。なのはさんはお前のあこがれなんだし、

同じ部隊なんて滅多にない、むしろラッキーじゃないか？」

「まあ……そうなんだけどさ……」

「私はどうしようかな……遺失物管理部の機動課っていったら、普通はエキスパートとか、特殊能力持ちが勢揃いの生抜き部隊でしよ？」

「そんなところに行つてさ……今の私が、ちゃんと働けるかどうか……」

ティアナがそういうと何やら隣からにやにやとした視線を感じ、

目を向けるとそこにはニヤニヤしているスバルがいた

「……何よ気持ち悪い」

「にひひ そんなことないよ！ティアちゃんとできるって……
……って、言つてほしいんだろ？」

それを見た瞬間……

ティアナの中で何かがキレた

「いひゃーい！痛い痛い痛いー！！」

「なによそれは！いい加減なこと言ってるんじゃないわよ！ばか言ってるじゃないわよ！」

「ギブギブギーブー！」

「ふんっ！！」

ティアナがスバルにつねくり攻撃をやった後、スバルは相当なダメージを受けていた

「大丈夫か…スバル」

「う、うんなんとか…」

ユウキはスバルを心配したがどうやら大丈夫そうだ

「……ねえ、ティア。私達は知ってるよ。」

ティアはいつも口ではふてくされたことを言うけど、
本当は違ってた……フェイト執務官にも、内心ではライブル心メラメラでしょう」

「ラ、ライバル心とか、そんな大それたもんじゃないけど……知ってるでしょう。」

執務官は私の夢なんだから……勉強できるならしたいって気持ちはあるわよ」

「だったらさ、やろつよティア、ユウキ。」

私はなのはさんに色々なことを教わって、もっともっと強くなりたい。

ティアとユウキは新しい部隊で経験を積んで、自分の夢を最短距

離で追いかける」

「うん」

「ああ」

「それに、当面まだまだ3人でやっと1人前扱いなんだしさ。
まとめて引き取ってくれるとうれしいじゃん」

「それを言うな！！メツチャクちゃム力つくのよ！！誰が悲しくて、
私は何処行ってもトリオ扱いなのよ！！」

「それに余計なことを言うな！！」

「いたいよおおおお、ティア、ユウキ！！」

ユウキとティアナはスバルを解放させた

「ふんっ！まあいいわ。うまくこなせれば、私の夢への短縮コース。
あなたのお守はごめんだけど、まあ我慢するわ」

「スバルの面倒を見るのがすごく大変だがな…」

「……ぷっ。あはははは」

「ちょっと、何笑ってんのよ」

「別に、あはははは」

「……スバル、今笑いを止めたらアイスをおごる」

ユウキの言葉にピタツとスバルの笑い声が消えた

「本当に!?!」

「ああ、合格祝いだからな、ティアも食べるか?」

「そうね、じゃあアイスを買に行きましょう

ユウキのおじりで

「やった〜!」

「…()お金、足りるかな?」

ユウキはお金はあるかどうか心配をしていた

第2話 結果発表DA-！（後書き）

フレイス「よし、なんとか書いた」

ユウキ「でも、大丈夫なのか？」

フレイス「何が？」

ユウキ「この調子で小説書けるのか？」

フレイス「…頑張ります」

ユウキ「はあ、こんな作者ですが

できれば感想をもらえるとありがたいです
ではまた更新する日まで」

第3話 集合DA - ! (前書き)

お待たせしました

後、感想どんどん送ってください!!

それだけでやる気ができるので…

後、誤字、指摘等がありましたら

連絡ください

ではどうぞ!

第3話 集合DA-!

機動六課の正式運営日の日がやってきた。

六課全員食堂に集められ八神部隊長の就任の挨拶を聞いていた。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです
平和と法の守護者、時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、
人々を守っていくことが私達の使命であり、為すべきことです
実績と実力に溢れた指揮官陣、
若く可能性に溢れたフォワード陣。

それぞれ、優れた専門技術の持ち主が、メカニックやバックヤード
ドスタッフ、

全員が一丸となって、事件に立ち向かっていけると信じています。
ま、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長および
部隊長、八神はやてでした！」

就任式が終わった後「隊舎のロビーに行くように」と

なのはさんにいわれたのでとりあえず行くことに

この後、八神部隊長とフェイト隊長は首都クラナガンにレリックの
ことを説明に行く予定である。

そこでフォワードメンバーが初顔合わせを行っていた。

そのフォワードの名前は、もちろんエリオとキャロだ。

エリオ・モンディアル 階級は三等陸士、術式は近代ベルカに、機動系にミッド式を修得している。

魔導師ランクはB

魔力変換資質『電気』を保有している。 使用デバイスはアームドデバイス、ストラーダ。

キャロ・ル・ルシエ。階級はエリオと同じく三等陸士。術式はミッド式。

魔導師ランクはC+

レアスキル稀少技能『竜召喚』を保有竜の子供、フリードリヒを引き連れている
使用デバイスはブーストデバイス、ケリュケイオン。

あとは、ティアナとスバルだ。

「ほら次、ユウキだよ。」

「ああ、了解した。」

ユウキは、自己紹介をした。

「俺の名前はユウキ・ルナミスだ、階級は二等陸士、魔力ランクはB、使用デバイスは、
ストレージデバイスのイノセンスだ。」

俺の稀少技能^{レアスキル}は、デュエルディスク、カードを使ってサポートするのが得意、

よろしく頼む。」

「えっ、カードを使ってサポートするんですか？」

「まあ、そつだ。」

「すごいです！どつやってカードでサポートをするんですか？」

「…とりあえず説明するぞ…」

ユウキはエリオとキャロに説明をした

場所が変わって、機動六課訓練スペース

「なのはさくん」

「シャーリー」

なのはが訓練場で新人たちを待っていると、

シャーリーがやってきた。今日来てもらったのは新人たちのデータを取る為だ。

しばらくしてフォワード5人がこっちにやってきた。新人たちがやってくるど、

事前に預かっていたデバイスを渡した。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているから、ちよつとだけ大切に」

扱ってね。それとメカニックのシャーリーから一言」

「え、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フイニーノ一等陸士です。

みんなはシャーリーと呼ぶのでよかつたらそう呼んでね。みんなのデバイスを改良したり、

調整したりもするので時々訓練を見せてもらったりします。

デバイスについての相談があつたら遠慮無く言つてね」

「「「「はい！」「」「」」

「じゃあ、早速訓練に入ろうか。」

「は、はい。」

「訓練、ここでやるんですか？」

「ふふ、シャーリー。」

「は、い」

シャーリーさんは端末を展開すると、何らかの準備をし始めた。

「機動六課自慢の訓練スペース。

なのはさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター……ステージセ

「ッ」

すると、海の上に浮かんでた、でかいプレートが光った途端に巨大なビル郡が姿を現した。

「「「わあ……」」」

「すごい……」

「ここで訓練をするのか……」

「じゃあ訓練スペースへ移動するよ。」

「「「「はい！」」」」

機動六課の隊舎の屋上では、ヴィータがその様子を見ていた。

そんなヴィータにシグナムが近付いていく。

「ヴィータ、ここにいたか」

「シグナム」

「新人たちは早速やっているようだな」

「ああ」

2人はフォワードメンバーを眺めながら言う。

「お前は参加しないのか？」

「5人ともまだよちよち歩きのひよっこだ。あたしが教導を手伝うのはもうちょっと先だな」

「そうか」

「それに自分の訓練をしたいしさ
同じ分隊だからな」

あたしは空でなのは守ってやらなきゃいけねえ。」

「頼むぞ。」

「ああ……………そういえば、シャマルは？」

「……………自分の城だ。」

機動六課医務室

「うふふ 良い設備 これなら検査も処置もかなりしっかりできるわね」

「本局医療施設の払い下げ品ですが、実用にはまだまだ十分ですよ」

「みんなの治療や検査、よろしく願いますね、シャマル先生」

「はい！」

シヤマルは医務室の設備を見てご機嫌になっていた。

* * * *

「よしつと。みんな聞こえる……」

「……はい……」

『じゃ、早速ターゲットを出していいこうか。まずは軽く8体から』

『動作レベルC、攻撃制度はDってところですかね』

『うん』

シャーリーは、端末でターゲットの設定をし、8体の訓練用のターゲットを出現させた。

『私達の仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理、その目的の為に私達が戦うことになる相手は………これ!!! 自立行動型の魔導機械。これは近づくと攻撃してくるタイプね 攻撃も結構鋭いよ』

「どんな攻撃をしてくるのが楽しみだな。」

ユウキはイノセンスを構える。

『では、第1回模擬戦訓練。』

ミッション目的：行動するターゲットの破壊、又は捕獲。 15分以内！』

「……はい！」「……」

『それでは、ミッション……スタート！』

なのはさんの開始の合図と同時に、

スバルとエリオとユウキは前衛として、ティアナとキャロがペアとなり

後方支援として左側のビルへと移動する

「……くっ！！ 何これ動き、早っ！！」

ガジェットに速度に驚き、スバルはその場で足を止めてしまう

逃走を続けるガジェットの前方にはストラダを構えるエリオがいた

そのエリオに対し、ガジェットは狙撃するがエリオは接近しながらビルの壁へと飛び、

そこから攻撃を仕掛ける

「でやあああああ!!でやっ!はっ!!」

ストラーダから斬撃を飛ばすがスバルの時同様にあっさりおよびられてしまった。

地上に降り、逃げたガジェットを見てエリオもその場で足を止める

「だめだ、ふわふわ避けられて当たらない……」

「チツ、だったらイノセンス!」

ユウキはイノセンスを構えてガジェットへと狙う

「蒼破……一閃!!」

イノセンスから斬撃を飛ばすが…ガジェットはすばやい動きでよけられてしまう。

「くそ、早すぎだろ!!」

「前衛3人!分散しすぎ!ちょっとは後ろのこと考えて!」

「《は、はい!》」

「《ごめん!》」

「《悪い!》」

ティアナは逃走するガジェットにアンカーガンを向ける

「チビツ子、威力強化お願い!」

「はい。ケリユケイオン!」

『Boost up, Barrett power.』

ティアナは後方支援型のキャロに魔力弾の威力強化を頼み、

キャロもブーストデバイスであるケリユケイオンで支援魔法を発動させる

するとティアナのアンカーガンの銃口にできていた魔力弾が大きくなる

「シューーッ!」

ティアナが放った魔力弾は、

ガジェット目掛けて4つの魔力弾は高速でガジェットへ向けて飛ん

でいく

だが…ガジェットに当たる直前で魔力弾はまるで壁に当たったように霧散してしまい消えてしまった

「バリア!？」

「違います……フィールド系!!」

「魔力が消された!？」

『そう、ガジェットドローンにはちょっとやっかいな性質があるの。攻撃魔力をかき消すアンチ・マギリングフィールド。通称AMF。普通の射撃は通用しないし……それに……』

「くっ、くそ!!」

スバルが焦りでウイングロードを作り出して追いかけてしようとした。

「待てスバル、なのはさんの話をよく聞け!」

ユウキの制止も聞かず追いかけてしまったが、次の瞬間……

「え、あっ、き、きやああああ」

ウイングロードをガジェットドローンにかき消られてしまい、
バランスを崩してビルにつっこんでしまった。

『飛翔や足場作りの、移動系魔法の発動も困難になる……スバル、
大丈夫……』

「な、何とか……」

スバルは、ダメージを受けているが大丈夫らしい。

『まあ、訓練中にはみんなのデバイスにちょっと工夫をして
擬似的に再現しているだけなんだけどね。でも現物からデータを
とってるし、かなり本物に近いよ
対抗する方法はいくつかあるよ。どうすればいいか、すばやく考
えて、すばやく動いてみて』

ティアナはモニターを見ながら対抗策を考えていた

「チビツ子、名前何てったっけ？」

「キャラロであります！」

「キャラロ、手持ちの魔法とそのチビ竜の技でなんとかできそうなの
ある？」

「……試してみたいのがいくつか」

「私もある《スバル！ユウキ！》」

「オツケー！エリオ、あいつら逃がさないように先行して足止めできる？」

「《あつ、えつと……》」

「ティアが何か考えてる…そのために時間稼ぎが必要だできるか？」

「《やってみます！》」

Side なのは

「へえ～みんなよく走りますね～」

「危なっかしくてドキドキだけどね～」

「デバイスのデータはとれそう？」

「良いのがとれてます。5機とも良い子に仕上げますよー！
レイジングハートさんも協力してくださいね」

『All right』

Sideフォワード

一方こちらはフォワードメンバー

ガジェットが逃走する先……

連絡通路の上にはエリオがストラダを構えていた

「行くよ、ストラダ！カートリッジロード！！」

『Explosion.』

ガジェットが接近してくるの確認したエリオはカートリッジをロードして

金色のベルカ式魔方陣を展開させた

そしてストラダを頭上で回し、魔力資質である雷撃をチャージする

「でやああああ！！でやっ！やっ！はあっ！！」

足元の連絡通路を高速で切り裂き、タイミングもちょうど良く逃走
そうしてきた

ガジェット4体の内、2体は瓦礫の下敷きに

もう2体は空中へと逃走をする中…

「潰れてろっ！！」

そこへジャンプしてきたスバルの魔力を纏った一撃がガジェット2体の内、1体へと繰り出される

だがガジェットはAMFでその威力を相殺してしまう

「やっぱ魔力が消されちゃうと、いまいち威力がでない……そんなら！うりゃあああああ！！」

スバルは後ろにいたガジェットを地面へ落とし

スバルが拳をガジェットの内部に押しこみ、ガジェットから飛び退くとガジェットは爆散した

残りのガジェット1体は逃走するが…

ユウキがデュエルディスクを構え

ガジェットを見つめていた

「そろそろ俺も本気を出しますか！」

《BF - 鉄鎖のフェーン》を召喚！」

ユウキの周りに忍者の姿をした鳥が出現した。

《BF - 鉄鎖のフェーン》

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 500 / 守 800

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。

「このカードはダイレクトアタックすることが出来る！」

つまり、AMFの影響を受けないということだ！

行けフェーン！」

フェーンはガジェットへと攻撃を仕掛ける

「さらに手札から《BF - 月影のカルート》

のカードを墓地に送る」

《BF - 月影のカルート》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1400 / 守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターが

戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る

事で、

そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで1400ポイントアップする。

「これにより、フェーンの攻撃力は1400ポイントアップするぜ
!!!」

ATK500 ATK1900

フェーンはガジェットを破壊した

「よし!!!!」

Sideキャラ

「連続行きます。フリード、ブラストフレア……」

「きゅ〜」

「ファイア!!」

フリードから放たれたブラストフレアはガジェット達をショートさせ、動きを止めることに成功した。

そしてキャラは錬鉄召喚の詠唱を唱えた。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、
鋼鉄の縛鎖……錬鉄召喚、アルケミックチェーン!!!!」

アルケミックチェーンは3体のガジェット達の動きをとらえ、活動を完全に停止させた。

S i d eなのは

「うわあ〜召喚ってあんなこともできるんですね〜」

「無機物操作と組み合わせてるね・・・なかなか器用だ」

S i d eティアナ

キヤロがガジェットを捕縛したビルの横をティアナは移動していた

「こちらら射撃型。無効化されて、“はいそうですか”って下がってたんじゃ、生き残れないのよ!!」

ティアナは足を止めてアンカーガンを構える

「《スバル！ユウキ！上から仕留めるから、そのまま追ってて!》」

「《おう!!!》」

「《了解!》」

S i d eなのは

魔力弾を生成し、ティアナはガジェットを標準に合わせる

「魔力弾？AMFがあるのに？」

『Yes, there is an available passing method. (いいえ、通用する方法があります)』

「うん」

Sideティアナ

「（攻撃用の弾体を……無効かフィールドで消される膜状フィールドで包む……）

フィールドを突き抜けるまでの間だけ、外殻がもてば……本命の弾がターゲットに届く！」

Sideなのは

「フィールド系防御を突き抜ける多重弾殻射撃技術……本来ならAAランクのスキルなだけけどね」

「AA!？」

Sideティアナ

「（固まれ……固まれ……固まれ……固まれ……固まれ!）」

ティアナは外殻を固まらせるのに全神経を使っていた。

「はあああああああ!！」

外殻が固まりティアナは引き金を引いた。

「ヴァリアブルシューーーット!」

撃ちだされた二重弾殻射撃は勢いよく撃ちだされ、

先行していたスバルを追い抜き、ガジェットを追尾していく

そしてガジェットとぶつかりあつた射撃は、

A M Fと拮抗していたがA M Fを突き抜けガジェットを粉碎し、

その奥を逃走していたガジェットも破壊した

「《ティア！ナイス！ナイスだよ、ティア！やったね、さすが！》」

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……スバル、うるさい……このくらい、当然よ……」

「《とりあえず、今は休んどけ疲れただろ?》」

「はあ……はあ……そうするわ……」

こうして俺たちの初めての訓練が終了した

第3話 集合DA - ! (後書き)

フレイス「よし！なんとかなったか…」

ユウキ「まあよく頑張ったほうだね。」

フレイス「まあな…さて皆様実はアンケートを答えてほしいのですが…」

よろしいでしょうか？」

ユウキ「アンケート？前回1名しか答えていなかったよな？」

フレイス「…アンケートの内容言います」

この小説は遊戯王をメインとしていますが

やはりデュエルもあつたほうがよろしいでしょうか？

どうか、アンケートにご協力してください！」

ユウキ「まあこんな作者だが、アンケートに答えてくれ頼む」

フレイス「よろしく願います、ではまた更新する日まで…！」

第4話 ファースト・アラート前編DA-!! (前書き)

アンケートのほうですが、デュエルをやることに決まりました!

ですが、デュエルはどの辺りにしようかな...と考えている作者ですが

...まあなんとかなるか!!!

では、話を見てください!

第4話 ファースト・アラート前編DA-!!

新暦075年 5月 AM5:45

時空管理局遺失物管理部 機動六課隊舎

同隊舎寮

父さんとギン姉へ

お元気ですか、スバルです

私とティアとユウキがここ、機動六課の所属になってからもう2週間になります

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよ……」

本出勤はまだなくて、同期の陸上フォワード5人は朝から晩までず

「と訓練漬け

しかも、まだ一番最初の第1段階です

「おはよう、フリード」

「フリード、おはよう」

「きゅくる〜」

部隊の戦技教官、なのはさんの訓練はかなり厳しいんですが、

しっかりついていけばもっともっと強くなれそうな気がします

当分の間は24時間勤務なので、

前みたいになやくちよく帰ったりはできないんですが母さんの命日には

…お休みを貰って帰ろうと思います

「今日もやるぞー!」

「「「おおー!」」」

「朝から何やっているのよ…」

「っていうかスバル、うるさいぜ少し黙ってる!」

「う、うめん」

じゃあ、またメールしますね。

スバルより

場所は移動して訓練フィールド

「はい、整列!」

「……はあ……はあ……はあ……」

「…ライフポイント、もう100しかない。」

LP100

手札2

リバースカード0

「じゃ、本日の早朝訓練。ラスト一本。みんなまだ頑張れる」

「……はい!」

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハート!」

《All、Light…: Axel Shooter》

なのはの周りにアクセルシューターが現れた

そして作り出された魔力弾なのはさんの周りを動き始める

「私の攻撃を5分間被弾無しで回避し続けるか、私にクリーンヒットを決めればクリア。

誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう」

「「「「はい!!」「」「」」

どこか楽しそうにシューティングのクリア内容と注意事項を告げていく

それにフォワード5人も気を引き締める

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を5分間、捌き切る自信ある?」

「ない!」

「同じくです」

「同感だ…。」

「じゃあ、なんとか1発いれよう」

「はい」

「よし！行くよ、エリオ！ユウキ！」

「はい、スバルさん！」

「まかせろ！俺のBFの力見せてやるぜ！！」

ユウキはデュエルディスクを構える。

スバルはリボリバーナックルを、エリオはストラダを構え、臨戦体勢になった。

「準備はオツケーだね。それじゃ、レディ……ゴー！！」

なのはの右腕が下ろされ、アクセルシューターの大群が俺たちに襲ってきた。

「全員撤退、回避！！ 2分以内に決めるわよ！！」

「……応っ！」「」

「了解！」

魔力弾が着弾する直前、各方向に散るフォワードたち

そして相手を見失った魔力弾はフィールドにあたり、土煙を起こす

その直後、なのはの後ろからスバルの魔力反応と声、ウイングロードが聞こえる

「うおおおおお!!」

そのスバルから少し離れたビルの中からは、ティアナがアンカーガ
ンで狙っているのも確認する。

「……っ、アクセル!!」

《Snipe・Shot》

なのはは、プラズマシューターをスバルとティアナへ向けて発射する
だがそのシューターはスバルとティアナの2人をすり抜け、
スバルとティアナの2人は最初からいなかったように消える

「……シルエット。やるね、ティアナ。」

そして上空からスバルが、本命の攻撃を仕掛けた。

「うりやあああああ」

なのははラウンドシールドを展開し、スバルの拳を防いだ。
スバルはなお突破を試みるが、強固な防御力を誇っていて突破でき

なかった。

さらに、アクセルシューターがスバルに襲いかかってきた。スバルはローラーでバツクし、何とか直撃は避けた。

「うん、良い反応……」

「う、う、うわああああ」

スバルはバランスを崩し、横向きになりながらも何とかバランスをとり、

追ってくるシューターから逃げる

「《スバル、バカ！危ないでしょ！？》」

「あう……ごめん！」

「《スバル、シューターは任せろ！》」

ユウキはスバルの前に移動しシューターの前に立つ

「手札から、このモンスターを守備表示で特殊召喚するぜ！

来い《BF - 熱風のギブリ》」

《BF - 熱風のギブリ》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 0 / 守1600

相手が直接攻撃を宣言した時、このカードを手札から特殊召喚する

事ができる。

1ターンに1度、このカードの元々の攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで入れ替える事ができる。

ユウキのフィールド上に《BF - 熱風のギブリ》が出現し

なのはさんの攻撃を耐えるが、《BF - 熱風のギブリ》は破壊されてしまった

「くそっ、どうすれば…」

ユウキはデッキからカードをドローして確認する

「!?(このカードは…よし)手札よりブラックフェザー《BF - 黒槍のブラスト》を召喚するぜ!！」

ブラックフェザー《BF - 黒槍のブラスト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

自分フィールド上に「BF - 黒槍のブラスト」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「さらに、このカードは自分フィールド上にブラックフェザーBFが存在する時

手札からのカードを特殊召喚する事ができる

ブラックフェザー《BF - 疾風のゲイル》特殊召喚!！」

《BF - 疾風のゲイル》

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にす
る事ができる。

「一気にモンスターが2体…」

「いくぜレベル4《BF - 黒槍のブラスト》に

レベル3《BF - 疾風のゲイル》をチューニング！」

「えっ…チューニング!？」

《BF - 疾風のゲイル》が3つ緑の輪となり

《BF - 黒槍のブラスト》がその中を通る。

すると、《BF - 黒槍のブラスト》が透き通り、4つの星となる。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！」

その星が1列となる

「シンクロ召喚! 《BF - アーマード・ウィング》！」

《BF - アーマード・ウィング》

シンクロ・効果モンスター

星7 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2500 / 守1500

「BF」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘では破壊されず、

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

このカードが攻撃したモンスターに

楔カウンターを1つ置く事ができる（最大1つまで）。

相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、

楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力を

このターンのエンドフェイズ時まで0にする。

「アーマード・ウイングでなのはさんに攻撃だ！」

アーマード・ウイングはなのはへと攻撃へ向かう。

「！？レイジングハート。」

なのはは、ラウンドシールドを展開する。

「ブラックハリケーン！」

アーマード・ウイングの攻撃は、なのはさんのラウンドシールドを攻撃するが

まったく手ごたえがない、だが…

「アーマード・ウイングの効果でこのカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0に

なる。」

LP100

「そしてこのカードが攻撃したモンスターに
楔カウンターを1つ置く事ができる！」

アーマード・ウイングはなのはさんから離れて楔カウンターを置く。

「!?!何これ。」

「(さてと、残りはキャラ、エリオ頼むぜ!)」

ユウキは後方から見ると

姿を隠していたエリオとキャラ、2人の姿があった

「我が乞うは疾風の翼、若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

『Boost up・Acceleration』

速度強化の補助魔法をエリオとストラダに付させる。

するとストラダはキャラの魔力を受けて、薄くピンク色に輝くと
ブーストダクトから

魔力が勢い良く噴き出す。

「あの、かなり加速がついちゃうから気をつけて！」

自重や推進力、ストラダの先端に凝縮した貫通性能の全てが合致し、

バリアやフィールド、物理防御を貫くことができる魔法だ。

そして向かって来ていた、なのはとエリオはぶつかり合い、爆発を起こした

その爆発にエリオは吹き飛ばされ、なんとか着地したが

「エリオ!!」

「外した？」

「いや、アーマード・ウイングの効果で守備力は0
あたっていれば必ずダメージは通るはず。」

フォワード5人は爆発した地点に目を向ける

黒煙が収まり、なのはさんの姿が見え始めた。

『Mission complete』

「お見事！ミッションコンプリート、でもちょっと痛かったかな…」

おそらくユウキのことだろう…」

「本当ですか!?!」

「ほら、ちゃんとバリアを抜いてジャケットまで通ったよ」

なのはが指差した部分、それはなのはのジャケットの左胸についている、

焦げた部分を指しエリオの攻撃が通ったことを言った。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

「……………はい!!」「……………」

なのはも地上に降りてきて、バリアジャケットを解いて俺たちの所に来てきた。

「さて、みんなも大分チーム戦に慣れてきたね」

「……………ありがとうございます!!」「……………」

「ティアナの指揮も筋が通っていたよ、指揮官訓練でも受けてみる?」

「い、いやあの戦闘訓練だけでいっぱいはいっばいです!」

「それよりユウキ、シンクロ召喚って何?

私あんなモンスター見たこと無いけど……」

「…また後で説明します

それでいいでしょうか?」

「まあユウキが言うなら……」

「きゅ〜？きゅくる〜」

「ん？フリード、どうしたの？」

「！おいスバル、ローラーが」

ユウキがいったのはスバルのローラーブーツ

全員が目を向けると火花と煙が立ち上がっていた

スバルは慌ててローラーブーツを脱いでいく

「しまったあ、無茶させちゃったあ……」

「オーバーヒートかな？後でメンテナンススタッフに見てもらおう」

「はい……」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい……」

「はい……騙し騙しです……」

「俺のアンカーガンも結構厳しいですね……」

「みんな訓練にも慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替え時かなあ」

「……新……デバイス……」

・六課隊舎前・

「じゃあいったん寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるっか」

「……………はい!」

「ん?あの車まさか?」

俺たちが寮へ向かう途中、黒いスポーツカーが俺たちの前で止まった。

中にはフェイトさんと八神部隊長が乗っていた。

「すごい、これフェイト隊長の車だったんですか」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

「みんな練習の方はどないや……………」

「あ……………ああ……………」

「……………まあ頑張っていますよ。」

戸惑っているスバルをフォローするユウキ

「エリオ、キャロ……………ごめんね?私は2人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて……………」

「あつ、いえそんな!」

「大丈夫です」

エリオとキャラコをあまり見てあげられないことに沈むフェイトだが…
エリオもキャラコも、フェイトに心配させないようにしているんだろ
うな。

「五人とも良い感じで慣れてきているよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「そうか、それは頼もしいな」

「二人はどこかにお出かけ……」

「ちょっと6番ポートまで……」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなと一緒に食べようか」

「」「」「」「」「」

「ほんならな」

* * * *

クラナガン 首都ハイウェイ

「聖王騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官。カリム・グラシア

さんか……

私はお会いしたことがないんだけど……」

「そやったね……」

「はやてはいつから……」

「私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、ラインが生まれた
ばっかのころのはずやから…… 8年くらい前かな」

「そっか……」

「カリムと私は信じてるものも、立場も、やるべき事も全然ちゃう
んやけど……今回は二人の目的が一致したから……」

「そもそも六課の立ち上げ、実質的などころをやってくれたんは、
ほとんどカリムなんよ」

「そうなんだ……」

「おかげで私は人材集めの方に集中できた」

「信頼できる上司って感じ……」

「うーん。仕事や能力は凄いやけど……あんまり上司って感じは
せえへんな。どっちかっていうと、お姉ちゃんって感じや」

「ふふ、そっか……」

「まあ、レリック事件が一段落したらちゃんと紹介するよ。きっと
気が合うよ。フェイトちゃんもなのはちゃんも……」

「うん、楽しみにしている……」

機動六課隊員寮 女子シャワールーム

「あの、スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃ってご自分で組まれたんですね？」

「うん、そうだよ」

女子のシャワールームではスバルとティアナ、キャロの3人が早朝訓練で書いた汗を流すため、シャワーを浴びながら体を洗っていた。

「訓練校でも前の部隊でも、支給品って杖しかなかったのよ」

「私は魔法がベルカ式な上に戦闘スタイルがあんなだし、ティアもカートリッジシステムを使いたいからって」

「で、そうなると自分で造るしかないのよ。訓練校じゃオリジナルデバイス持ちなんていなかったから、自立っちゃってね」

「あつ！それでももしかしてそれでスバルさんとティアさん、お友達になっただんですか？」

「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりって言っ……」

「そういえば、ユウキさんは訓練校ではどんな人だったんですか？」

「確か、教官を泣かせたことがあったわね」

「そうそう」

ティアナとスバルの言葉にキャロは考えた

「どうしてですか？」

「ユウキが使っている《疾風のゲイル》の効果を
たくさん使ったからよ」

「…なんかかわいそうですね」

「ははは…さてキャロ、頭洗おうか」

「お願いします」

S i d e ヌウキ

「みんな、まだかなあ」

「きゆう〜」

フリードと一緒に隊員寮のロビーにある階段に腰をおろして女性陣を待っていた…

「まあ女の子は色々大変だから…。」

「そうなんですか？」

「まあそんなところだ。」

軽くエリオとしゃべっている時にも

ユウキはデツキを調整をしていた。

「あの、ユウキさん」

「どうした？」

「あのお願いがあるんですけど……」

「お願い？」

「兄さんって呼んでもいいんでしょうか!？」

「兄さんだと……。」

ユウキは驚いた、なぜなら兄さんと呼ばれたことが1回も無かったからだ

「あの……いけなかったでしょうか？」

エリオは悲しい顔になるがユウキは慌ててエリオに話しかける

「……いいよ兄さんって呼んでも」

ユウキの言葉にエリオは顔が明るくなり笑顔を見せる。

「ありがとうございます、兄さん！」

「いきなり兄さんか…」

「はい！呼びたかったので。」

「そうか…」

* * * *

ミッドチルダ北部 ベルカ自治領『聖王教会』大聖堂

『騎士カリム、騎士はやてがいらっしやいました』

「早かったのね。私の部屋に来てもらって頂戴」

『はい』

「それから、お茶を2つ。ファーストリーフのいいところをミルクと砂糖付きでね」

『かしこまりました』

書類作業をしながらシャツハから、通信画面を見ずに話すカリム
シャツハは一礼して通信画面を閉じた。

「よじつと。」

そして羽ペンを専用のホルダーに入れて書類を退かせる…

同時に執務室のドアがノックされ、カリムは入室を促した

「どござ。」

扉が開けばそこにいたのは先ほど到着したはやてだ。

部屋に入るとはやてはフードを取る。

「カリム、久しぶりや」

「はやて、いらっしやい」

そしてカリムとはやての2人がテーブルに着く。

「ごめんな？すっかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで。部隊の方は順調みたいね」

「カリムのおかげや」

「ふふっ。そう言うことにしとくと、色々お願いもしやすいかな」

「あはは。なんや、今日会って話すんはお願い方面か？」

はやてがそう言うとカリムから笑みが消えて真剣な表情に変わる

その後すぐに空間パネルを操作してカーテンと電気を落としたので重要な話と理解したはやても真剣な表情へ変わる

そして映し出されたのはガジェット？型と初めて見るガジェットが2体

「これ、ガジェット……新型？」

「今までの？型以外に新しいのが2種類。戦闘性能はまだ不明だけど、これ」

カリムが見せたのは、新型ガジェットの内の1体……丸いタイプのガジェットのモニターを前に引き出す

「？型は割と大型ね。本局にはまだ正式報告はしてないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけお伝えしたんだけど……」

「これは……！」

「それが、今日の本題……一昨日付けでミッドチルダに運び込まれた不審貨物」

「レリック、やね……」

はやてが目がいったのはガジェットと一緒に映っている銀色のケース。

それはどう見てもレリックの入っているケースであった。

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし」

「ガジェットたちがレリックを見つけるまでの予想時間は？」

「調査では早ければ今日明日……」

「せやけど、おかしいな？レリックが出てくるのがちょう早いよう
な……」

「だから、会って話したかったの！これをどう判断すべきか、どう
動くべきか……！」

レリック事件を、その後に起こる事件を対処を失敗するわけには
いかないもの……！」

はやてはモニターを操作をしてカーテンを開ける。

「あ……はやて？」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。カリムが力を貸してくれたお
かげで部隊はもう何時でも動かせる！」

即戦力の隊長たちはもちろん、

新人フォワードたちも実戦可能！予想外の緊急事態にもちゃんと
対応できる下地ができてる！

そやから、大丈夫！」

* * * *

機動六課 デバイスルーム

「うわあ〜これが……」

「私たちの、新デバイス……ですか？」

「そうですね。設計主任は私。

協力者は、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんと
ライン曹長」

スバルとティアナの後ろで手を挙げて協力してくれたメンバーの名
前を口にしていくシャーリー

「ストラーダとケリユケイオンは変化なしかな？」

「うん、そうなのかな……？」

「違います！」

するとそこに上からラインが降ってきた。

「違います！！ 変化無しは外見だけですよ」

「ラインさん……」

「はいです、2人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったで
すから、

感触に慣れてもらうために基礎フレーム
と最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで最低限！？」

「本当に……？」

「はいです」

一方ユウキはというと…イノセンスを見ていた

「俺のイノセンスは変化なしなのか…」

「ですが、ユウキにはもう一つ新しいデバイスがあるんですよ」

「それは本当ですか？」

「はい！ですが今調整中なんですよ

だから今はイノセンスで我慢できませんか？」

「分かりました（そんなこといっても…ライフが0になったら何も出来なくなるんだぞ…」

まあ、ライフが0にならないように気をつけるしかないな…」

「みんなが扱うことになる5機は、六課の前線メンバーとメカニックススタッフが、

技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的に併せて、そして、エリオやキャロ、

スバルにティア、ユウキ、個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体です」

ラインがそう言うのでデスクの上にある5機のデバイスがラインの周りに集まり始める

「この子供達はみんなまだ生まれたばかりですが、色々な人の思いや

願いが込められて、
いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

そしてリイン曹長はティアナ達に、それぞれデバイスを渡してくれた。

「だから唯の道具や武器と思わないで、大切に。
だけど性能の限界までおもいつきり、全開まで使ってあげて欲しいです」

「この子たちもね、きっとそれを望んでるから」

「ごめん、ごめん。おまたせ……」

「なのはさん!!」

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから機能説明をしようかと……」

「そう、すぐに使える状態なんだよね」

「はいです!!」

なのはの問いにリインが元気よく答える。

「まず、その子たちみんな何段階かに分けて出力リミッターを掛けるのね。」

一番最初の段階だと、そんなにびっくりするようなパワーが出る

わけじゃないから

まずはそれで扱いを覚えて行って」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、

私やフェイト隊長、ラインやシャーリーの判断で解除していくから……」

「ちょうど、一緒にレベルアップしていくような感じですね」

「あつ、出力リミッターって言うと、なのはさんたちにも掛かってますよね？」

「ああ……私達はデバイスだけでなく、本人にもかかっているんだけどね」

「「「えっ!?!」「」」

「リミッターが、ですか？」

「能力限定って言って、うちの隊長と副隊長はみんなだよ。私とフェイト隊長

シグナム副隊長にヴィータ副隊長」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

「え〜と……」

なのはが出力リミッターのかかっているメンバーの名前を言っていない、ティアナは

すぐにその理由を理解したのだが、その隣のスバル、ユウキ、エリオ、キャラの4名はまだ頭を捻っていた……

「ほら、部隊ごとに保有できる、魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない」

「あ……え……そうですね……」

「一つの部隊で優秀な魔導師をたくさん保有したい場合は、そこに上手く収まるように魔力の出力リミッターをかけるんですよ」

「まあ……裏技っちゃあ……裏技なんだけどね」

「うちの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウン、隊長達は大体2ランクダウンかな」

「4つ!! 八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としてるんですか」

「はやてちゃんも色々苦労しているです……」

「なのはさんは……」

「私は元々S+だったから、2.5ランクダウンでAA。だからも

うすぐ、

一人でみんなの相手をするのは辛くなってくるかな」

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司の力りムさんが、

部隊の監査役のクロノ提督の許可がないとリミッター解除が出来ないですし………

許可は滅多なことでは出せないそうです」

「……そうだったんですね」

「まあ、隊長たちのことは心の片隅くらいで良いよ。今はみんなのデバイスのことなんだから」

何とか話を戻すが実際に聞いてしまっってはなんとも言えない気持ちになる

「新型もみんなの訓練データを基準にしてるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかからないと思いますよ」

「ふう、便利だよね最近は……」

「便利です」

「あっ、スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能もつま

く設定できてるからね」

「本当ですか!?!」

「持ち運びが楽になるように収納と瞬間装着の機能も付けといた」

「ありがとうございます!」

これまでは専用のバックに入れて運んでいたので手間がかかると

言えばかかっていたリボルバーナックル、

それを新デバイスと一緒に収納と瞬間装着機能をつけてもらったことでシャーリーにお礼を言う。

Sideフェイト

なのはたちが新デバイスについて説明をしている頃

6番ポートで、はやてを下ろした後、フェイトはハイウェイを使い、目的地を目指して車を走らせていた。

車に標準装備で付いているモニターで六課にいるグリフィスと通信をしながら

「うん、はやてはもう向こうについているころだと思っよ」

『はい、お疲れ様です』

「私はこの後、公安地区の捜査部に寄つていこうと思つんだけど、そつちは何か急ぎの用事とかあるかな」

『いえ、こちらは大丈夫です。副隊長お二人は交替部隊と一緒に出勤中ですが、

なのはさんが隊舎にいらっしやいますので……』

「そつ……つ、えつ!!」

車線変更をしながらグリフィスとの通信をしている時だった

グリフィスとの通信画面の横に現れる紅いモニター

そこに書かれていたのは“Alert”の文字

フェイトの車にこの表示が出たということはもちろん六課隊舎でも出ている。

「このアラートって……」

「一級警戒態勢!!」

「グリフィスくん!!」

『はい!教会本部から出動要請です!!』

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらははやて!!」

デバイスルームにあるモニターでグリフィスとは反対側に聖王教会にいるはやてから連絡が入る

そこに空間モニターでフェイトの顔も映し出された

「状況は……」

「教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった。

場所は、エイリム山岳丘陵地帯。対象は山岳リニアレールで移動中」

「移動中って!!」

「まさか!!」

「……そのまさかや。内部に進入したガジェットで、車両の制御が奪われている……」

リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。

大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしれない

いきなりハードな初出動や……なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか……」

「私はいつでも!!」

「私も!!」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ユウキ!みんなもオツケーか?』

「……はい!!」

『よし、良いお返事や、シフトはA-3。グリフィス君は隊舎で

の指揮。リインは現場管制』

「はい！！」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮！」

「うん！！」

『ほんなら……機動六課フォワード部隊、出勤！』

「……はい！」「……」

『……了解、みんなは先行して。私もすぐに追いかける！！』

「うん」

フェイトは、はやてとの通信を切ると、車を緊急車両モードにし、全速で向かった。

―聖王教会、大聖堂―

「シャツハ、はやてを送ってあげて。機動六課の隊舎まで、最速で！」

『かしこまりました、騎士カリム！』

はやては六課へ戻るため、来た時と同じようにマントとフードをかぶる

「聖堂の裏に出て。シャツハが待ってる……」

「おおきにな、カリム。今日のお茶おいしかったよ……」

「ふふ……」

「ほんなら、行ってきます!!」

そしてはやては急いで聖堂の裏に向かう

機動六課での隊舎から指揮をするために……

「機動六課へリポート」

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「がんばります」

「まかせてください!(俺のデッキで…全て破壊をしてやる!)(」

「エリオとキャラ、それにフリードもしっかりですよ!」

「はい!」

「はい!」

「きゅー!」

「危ない時は私やフェイト隊長、
ラインがちゃんとフォローするから、
おっかなびつくりじゃなくて、思いっきりやってみよう」

「……はい!!」「……」

そんなフォワード4人の内、1人と1匹は不安そうな表情をしていた

「大丈夫か？」

「お兄ちゃん…、はい大丈夫です。」

一方でエリオとキャラコの隣ではスバルとティアナが新たな相棒を見
つめ、集中していた…

「初めましてで、いきなりになっちゃったけど、一緒に頑張ろうね。
相棒」

おまけ1

エリオが兄さんといっているのをキャラコは

キャラコ「あのユウキさん…」

ユウキ「どうした？キヤロ」

キヤロ「私ユウキさんのことお兄ちゃんって呼んでもいいですか！？」

ユウキ「（どうしてお兄ちゃんって言われるんだ…まあいいや）
いいよキヤロ。」

キヤロ「あ、ありがとうございます！お兄ちゃん！」

ユウキ「…（まあ悪くはないな）」

おまけ2

ユウキ「ふう」

エリオ「あれ、兄さんさっき何を飲んだんですか？」

ユウキ「薬だよ、まあこいつを飲まないといけないんだ」

エリオ「なにか病気なんですか？」

ユウキ「病気じゃないんだが…まあ薬を飲まないと俺はやばいんだよ」

エリオ「そうですか…」

ユウキ「（まじめにこいつを飲まないと…
俺はみんなに迷惑がかかる）」

おまけ3

NGシーンその1

リイン「ちょうど、一緒にレベルアップしていくような感じですね」
一緒にレベルアップしていく感じというリインの言葉にユウキは反応する。

ユウキ「レベルアップならこのカードか？」

ユウキが見せたのは《レベルアップ!》のカード。

《レベルアップ!》

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在する「LV」を持つ
モンスター1体を墓地へ送り発動する。

そのカードに記されているモンスターを、
召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。

ユウキ「こいつを使えばレベルアップに…」

リイン「違います!!」

ユウキ「何!？」

おまけ4

NGシーンその2

リイン「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、

部隊の監査役のクロノ提督の許可がないとリミッター解除が出来ないですし……

許可は滅多なことでは出せないそうです」

ユウキ「ならリミッターを解除をするならこれか？」

ユウキが見せたカードは名前のとおり機械族のサポートカード《リミッター解除》

《リミッター解除》

速攻魔法（制限カード）

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

ユウキ「これで解除できますかね？」

リイン「できません！」

ユウキ「そ、そんな馬鹿な!!」

スバル「ユウキ、そんなことよりなのはさんの話を聞こう」

ユウキ「……………はい」

第4話 ファースト・アラート前編DA-!! (後書き)

ユウキ「まさかアンケートを答える人がいるなんて」

フレイス「本当にありがとうございます！（嬉涙）」

ユウキ「でも、今回も1人だったよな？」

フレイス「……………もういいよ」

ユウキ「わ、悪かったって」

フレイス「とりあえず、デュエルをやるのはかなり先ですが、

頑張りたいと思います！」

ユウキ「ではまた、更新する日まで!!」

お知らせ

遊戯王のデュエルをすることは決定しました

ですが、ゆりかご編でデュエルをしてもよろしいのでしょうか……

すごく心配です。設定は考えていますが、かなり無茶になりそうです

まあ、頑張ろうと思います!!

BYフレイス

第5話 ファースト・アラート後編DA-！（前書き）

お待たせしました

では、どうぞー！

第5話 ファースト・アラート後編DA-!

新暦71年 4月

『アルザスの竜召喚部族……ルシエの末裔、キャロよ』

『僅か6歳にして白銀の飛竜を従え、黒き火竜の加護を受けた……
・お前は真素晴らしき竜召喚師よ』

キャロの住んでいた故郷……アルザスの長老の元に呼ばれたキャロ

そこで長老とオババに言われたことを思い出す。

『じゃが、強すぎる力は災いと争いしか産生まぬ……』

『すまぬな……お前をこれ以上、この里に置くわけにはいかぬのじゃ』

キャロがこのままアルザスの里に置いておけば何れ戦いが起きる

それを防ぐために長老もオババも…僅か6歳のキャロを追いだすと
言う悲しい決断をしたのだった…

「（竜召喚は危険な力……人を傷つける、怖い力……）」

― 現在 ―

「問題の貨物車両速度70を維持、已然進行中です」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……………」

「時間の問題か……………」

「!!! アルト、ルキノ、広域スキャン。サーチャーを空へ!!!」

サーチャーを空にかけてみると、大量のガジェット反応があり、その数に驚いた。

「ガジェット反応!!! 空から!!!」

「航空型、現地観測隊を補足!!!」

その頃、サイレンを鳴らしてハイウェイを猛スピードで走行していたフェイトの乗る車は
パーキングエリアに到着していた

「こちらフェイト、グリフィス。

こちらは現在パーキングの到着。車を止めて現場に向かうから、
飛行許可をお願い……………」

『了解、市街地都市飛行。承認します』

パーキングに止め、車から降りたフェイトは、バルディッシュを取り出し、セットアップの準備をした。

* * * *

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる！」

「ウツス、なのはさんお願いします!!」

へりの後部、ハッチを開いた

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張ってズバツとやっつけちゃおう」

「……はい!!」「……」

「はい……」

スバルとティアナ、エリオ、ユウキに遅れて返事をするキャラ

「キャラ、大丈夫だよ。そんなに緊張しないで」

「あ……」

「……大丈夫。離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合える。」

キャラの魔法は、皆を助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから」

両頬に手を添えて優しくキャロに向かってそう伝える

Sideフェイト

《Get、set》

「うん…………バルディッシュ・アサルト…………セットアップ!!」

《Set up…………Berrier Jacket、Impulse
Form》

「ライトニング1、フェイト・テストロツサ・ハラウン。行きま
す!!」

バリアジャケットを装着したフェイトは、飛行魔法で全速力で現場
に向かった。

Sideなのは

《Standby、Ready》

「レイジングハート・エクセリオン…………セットアップ!!」

《Berrier Jacket、Aggressive mode》

「スターズ1、高町なのは。行きます!!」

バリアジャケットを装着したのは、アクセルフィンを展開し高
速飛行をしガジェット達を殲滅に向かった。

なのはが出陣した後、ヘリ内でリイン曹長が今回のミッションの説明をしていた。

「任務は2つ、ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そしてレリックを安全に確保すること」

ヘリに残ったリインはフォワード5人に作戦の説明をしていた

空間モニターを表示し、確保対象であるレリックのある重要貨物室を映し出す

「スターズ分隊、ライトニング分隊で、ガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです」

レリックはここ。7両目の重要貨物室。スターズがライトニングのどちらか先に付いた方が、レリックを確保するですよ」

「……………はいつ!!」「……………」

「で……………私も現場に降りて、管制を担当するです」

* * * * *

『スターズ1、ライトニング1、エンゲージ!』

「こちらの空域は私たち2人が押さえる。ロングアーチは新人たちのフォローを!」

『了解!』

「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん……」

「うん、なのは……」

こっちの動きに気付いたのか、ガジェットの大群がこっちに向かってきていた。

《Axel Shootar》

《Haken Saber》

私達はそれぞれ迎撃し、空域静圧を行っていた。しかし、ガジェットはいくら倒してもなかなか減らず、完全制圧には時間がかかりそうだ。

Side フォワード

『さあて新人ども。隊長さんたちが空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いか!?』

「……はい!」「……」

なのはたちが出撃した後、ガジェットの追撃を受けることなく無事に降下ポイントまで到着したフォワード5名を乗せたヘリ

そこではすでに後部ハッチが開いており、スターズのスバルとティアナ、ユウキが控えていた

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「スターズ5、ユウキ・エルナス！」

「「行きます！」」

「行くぞ！」

一度お互いの顔を見て物怖じせずへりから飛び降りるスバルとティアナとユウキの3人

「……………いくよ、マツハキヤリバー」

「……………お願いね、クロスミラージュ」

「……………頼んだぜイノセンス」

「「「セットアップ！」」」

《《Stand by、Ready》》

バリアジャケットを装着したティアナ達は、浮遊魔法を使ってリアールの最前車両に着地した。

『次、ライトニング！チビども、気いつけてな！』

「はい！」

スバル達3人が降下したことで今度はライトニングであるエリオとキャロ

2人の番がやってきたのだが、後部ハッチにたどり着いたキャロの顔からは

先ほどよりも不安そうな表情が現れていた

「あ……一緒に降りようか？」

「え……うん！」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「きゅく〜」

「行きます！！」

手をつないで降下するエリオとキャロ、そしてフリード

「ストラータ」

「ケリユケイオン」

「セットアップ！」

同じようにバリアジャケットを装着し、リニアレールの最後尾に着地した

「あ、あれ……？ねえ、このジャケットって……！」

「もしかして……」

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんたちのを参考にしてるですよ
よちよつと少し癖はありますが、

高性能です」

「だったらこのデザインはまるつきりTOGも主人公だが……」

ユウキのバリアジャケットはアベニラの服である。

特にスターズでは憧れのなのはお揃いということスバルがとても嬉しそうな顔をしていた。

「うわあ〜」

「はあ……あ！スバル、ユウキ、感激は後！」

「感激してないんだがな……」

今にもはしゃぎだしかねないスバルと落ち込んでいるユウキをテイアナが伝えると

リニアレールの天井を押し破ろうとしているガジェットがいた

そしてその直後、ガジェットの攻撃で屋根は吹き飛んだ

『『Drive Ignition』』

『Variable Barret』

「シューッ！」

「くらいな！」

出てきたガジェットにすかさず攻撃を加えるティアナとユウキ

一番最初の訓練の時に使った二重弾殻射撃技術を使った

ユウキはアンカーガンを使って応戦する

ヴァリアブル・バレットでAMFを張ろうとしているガジェットは
爆散した

「うおおおおおー！」

ガジェットが開けた穴から車両内部に侵入したスバル

侵入と同時にすぐ真下にいたガジェット？型をリボルバーナックル
の一撃で沈める

その車両にもう1体いたガジェットがスバルをとらえようとアーム
を伸ばすがあっさりによけられた

「たあああああー！」

アームを伸ばしたガジェットをそこら辺に落ちていた瓦礫を蹴飛ばし破壊する

そこへ他のガジェットからの攻撃が入る

『Absorb grip』

マツハキヤリバーがグリップを利かせながら壁を走るスバル

その目線の先には残る1体のガジェット

「リボルバー……シューーッ！！」

攻撃してくるガジェットめがけて使い慣れた射撃を放つスバル

だがガジェットを破壊できたのは良いもの……

「うわああ！？ たったたた！？」

『Wing lord』

勢い余って天井ごとぶち抜いてしまったスバル、

空中に投げだされ、手足をジタバタさせるがそこにマツハキヤリバーから声が聞こえた

そして自分では使っていないのにマツハキヤリバーから、自分の先
天魔法であるウインググロードが

作られ、なんとか無事に車両の上に降りられたスバルだった

「うわぁ・・・マツハキヤリバー、お前ってかなり凄い？加速とか、グリップコントロールとか・・・それに、ウインググロードまで」

『Because I was made to make you
run stronger and faster.（私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから）』

「・・・うん。でも、マツハキヤリバーはAIとはいえ心がある
んでしょ？だったら、ちょっと言い換えよう」

マツハキヤリバーの言った言葉にスバルは訂正があると伝える…

「お前はね・・・私と一緒に走るために、生まれてきたんだよ」

『I feel it the same way.（同じ意味に

感じます()」

「違うんだよ、色々」

『I'll think about it. (考えておきます)』

「うん！」

Sideユウキ

その頃、内部に突入していたティアナとユウキは、

ケーブルを破壊してレールを止めようとしたが……

『ティアナ、ユウキはどうです』

「駄目です。ケーブルの破壊、効果なし」

「こちらも同じです!!」

『了解、車両の停止は私は引き受けるです。ティアナとユウキはスバルと合流してください』

「了解!!」

「了解した。」

《One Hand Mode》

リンとの通信を終え、ティアナとユウキはスバルと合流を目指す

そしてクロスミラージを二丁拳銃のツーハンドモードからワンハンドモードへと切り替え、

奥を目指して走り出す、

「しっかし、さすが最新型。いろいろ便利だし、弾丸生成もサポートしてくれるのね」

『Yes . Was it unnecessary? (はい。不要でしたか?)』

「あんたみたいに優秀な子に頼り過ぎると、私的にはよくないんだけど、でも実戦では助かるよ」

『Thank you .』

「お似合いじゃないか、ティア。」

「う、うっさいわね!!--」

「はいはい。」

通路の丁字に隠れてガジェットの気配を探りながらクロスミラージ
ユと会話をする

確かに優秀なデバイスは頼りになる

だがそれに溺れずにいようとティアナは心に刻み込む

* * * *

『スターズF、4両目で合流。ライトニングFとスターズ5、10両目で戦闘中』

「スターズ1、ライトニング1、制空権獲得」

「ガジェット?型、散開開始。追撃サポートに回ります」

「ごめんな、おまたせ」

聖王教会から八神部隊長が戻ってきて、ロングアーチスタッフが全員そろった。

「八神部隊長!」

「おかえりなさい」

「ここまででは、比較的順調です」

「うん……」

「ライトニングF、8両目に突入………エンカウント、新型です
!」

* * * *

8両目に突入したエリオとキャラ、そしてフリード

2人と1匹の目の前にはガジェット?型がその巨体で完全に道を塞いでいた

そしてエリオとキャラを捕まえようとアームを伸ばすがそれを2人はバックジャンプでよけ、

キャラが自分の魔方陣を展開させる

「フリード、ブラストフレア!」

「ぎゅー!」

「ファイヤ！」

フリードの火炎に自分の魔力を合わせてガジエットのアームを破壊しようとして撃ちこむが、触手に跳ね返されてしまい、崖に命中した。

「おりゃあああああ！！でやっ！！！」

魔力資質である電気をストラダに纏わせ、スピア・シュナイデンで攻撃するエリオ

だがガジエットの装甲がかなり固く、高い切断能力を持つスピア・シュナイデンでも破れない…

「か、堅っ……！！？」

ガジエットがAMFを発動させ、スピア・シュナイデンを解除させる

それだけでなく、離れているキャラのところまでAMFが届いていた

「AMF!？」

「こんな、遠くまで!？」

これまで訓練で相手にしてきた?型よりも広い範囲のAMFに隙ができてしまったエリオをガジェットがアームで押しつぶそうとする
がエリオもストラダーダを盾に何とか持ちこたえている

「ぐっ……うう……くう……!？」

「あ、あの……!」

「大丈夫……任せて……!」

何とか持ちこたえている間にガジェット?型はエリオの映像のある
場所へと送る

その直後、エリオは攻撃に気付きジャンプでガジェットの後方へ飛
んで避ける。

だがガジェットも反転して追撃をする

「うわっ!?!?」

床を転がり、回避を続けるエリオだが片腕に敵の攻撃を受けてしま
った

その隙をガジェットは見逃さず、アームで叩きつける

「うわあああ!?!?ぐう……っ」

「あ……ああ……」

―新暦72年2月 時空管理局本局保護施設―

『たしかに、凄まじい能力を持つてはいるんですが…制御がろくに
できないんですよ。』

竜召喚だつてこの子を守るうとする竜が、勝手に暴れまわるだけ
で……とてもじゃないけど、

まともな部隊じゃ働けませんよ。せいぜい、単独で殲滅戦に放り
込むしか……』

「ああ、もう結構です………ありがとうございました」

「では……」

「いえ、予定通り私が預かります……」

施設を出てみるとあたりは一面雪景色だった。
寒さに震える中私は、引き取られた女性にマフラーを掛けてもらっ
た。

「……………私は今度はどこへ行けば良いんでしょう」

「それは君がどこに行きたくて、何がしたいかによるよ……………キャラ
はどこに行つて、何がしたい」

「……………」

考えたこともなかった。私の前にはいつも、私が行つちゃ行けない
場所があつて、

私がいちやいけなことがあるだけだったから……………

「うああああああ！？」

「あつ！？」

キャラが気がつけばエリオがガジェット？型に捕まっ……………

その体がりニアールの外に出ていたから

「エリオくん……エリオくーん!!」

キャロはそのままリニアレールから飛び降りてエリオの元へと向かっていく

『ライトニング4、飛び降り!?!』

『ちょ、あの2人まさかあんな高高度でのリカバリーなんて!?!』

『いや、あれでええ』

『あつ、そっか!』

機動六課隊舎にいるアルトとルキノの2人はよくわかっていないがシャーリーがどういうことかすぐに理解する

「そう。AMFの発生源から離れればAMFも弱くする。使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が!」

「(守りたい……優しい人を……私に笑いかけてくれる人たちを……自分の力で、守りたい!)」

『Drive Ignition』

キャロの想いが届いたのか、今までうんともすんとも云わなかったケリュケイオンから声が聞こえ、

2人を優しい光が包み込む

それによってエリオとキャロが落下する速度が急激に落ちた

そこへフリードが飛来する

「フリード……不自由な想いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから！」

キャロに抱き締められていたエリオが目覚めます

目を覚ましたエリオの目に入ってきたのはさっきまでの不安そうな表情のキャロではなく、しっかりと決意を持った表情のキャロがいた

「いくよ、竜魂召喚!!」

キャロがそう叫ぶと光は強さを増し、エリオとキャロ、2人の足元には巨大な召喚用の魔方陣が広がる

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を翔けよ！来よ、我が竜フ

リードリヒ！竜魂召喚！！」

「グオオオオオオオ！！」

光がはじけ飛び、そこから現われたのは白銀の翼をもつ巨大な火竜・
・・・真の姿となったフリード

その背には手綱を握るエリオとキャロ

『召喚成功！！』

『フリードの意識レベルブルー！完全制御状態です！』

『これが・・・』

『そう、キャロの竜召喚。その力の一端や』

六課隊舎にいるグリフィスは初めて見る竜召喚に唖然としていた

いや、司令部にいるはやてを除くメンバーとスバルとティアナ、ユ
ウキの3人も唖然としていた

「あれが、チビ竜の本当の姿……」

「はあくかつこいい！」

「バカな…ブルーアイズだと…」

どうやらユウキがフリードのことをブルーアイズと間違えてしまったらしい…

ちなみにブルーアイズの説明はこれだ

《青眼の白龍》
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン

通常モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

「ユウキ、ブルーアイズは、目が青でしょ、フリードの目は赤！
ぜんぜん違う！」

「何！？どうしてティアがブルーアイズのこと知っているの!？」

「…あなたね、いつも私にブルーアイズのカードを見せているから
でしょ!！」

「何!？」 2回目

「いいかげんにしろ!!」

ユウキは驚くが関係ない…一方エリオとキャラロは…

「……はあ／＼／」

「あ、ご、ごめんなさい!／＼／」

「あ、う、うん!こっちこそ……／＼／」

途惑っていた…

「まあ、あの様子だと救援はいらなみみたいですね。さて、リリースを回収するですよ」

「……了解。」

8 両目から屋根を突き破り姿を現したガジェット?型

それに対し、キャラロが先制攻撃を仕掛ける…

「フリード、ブラストレイ!」

フリードから放たれる魔力を帯びた火炎

だがガジェットの張ったシールドで本体にダメージはなく、アームを壊しただけだった

「やっぱり、堅い」

「あの装甲形状は砲撃じゃ抜きづらいよ！僕とストラーダがやる！」

「うん！」

旧型の身体をしているので射撃系は効果が薄いと判断したエリオは自分たちがやると言う

それにはキャラも同意した

「我が乞うは聖銀の剣、若き槍騎士の刃に祝福の光を」

『Enchanter field invalid』

「長きその身に力を与える祈りの光を！」

『Boost up, strike power』

2重の補助魔法の詠唱を終え、準備を完了させる

そしてエリオの名前をキャラが叫んだ

「行くよ、エリオくん！」

「了解、キャロ！だあああああ！！！」

「ツインブースト！スラッシュ&ストライク！！！」

『Empfang.（受諾）』

2つの補助魔法はストラーダへと掛かり、その刀身をキャロの魔力光であるピンク色で包む

「はあああああ！！！」

『Stahlmesser.』

残りのアームとケーブル伸ばしてきたガジェットのアームをスタールメツサーで切り裂き、エリオは再び車両の上へと舞い戻る

そしてカートリッジを2発ロードする

『Explosion.』

「一閃必中!!」

キャロのブーストを受けたエリオは魔力刃と作り、

カートリッジを二発ロードさせ、ストラダーのバーニアを最大戦速にまで上げ、

一気にAMFを貫いた。

「でえりやあああああ!!!!」

全力でストラダーを持ち上げ、ガジェット?型の中心から少し下の方から一気に切り裂く、

そして内部のコードに火花を散らせながら爆散した

機動六課隊舎

「車両、及び空中のガジェット反応全て消滅!」

『スターズF、レリックを無事確保!』

『車両のコントロールも取り戻したですよ。今止めます』

「ほんならちようどええ、スターズの3人とリインはヘリで回収してもらって、」

そのままヘリで中央のラボまで護送お願いしようかな」

『はいですー!』

はやてからの指示にリインが上機嫌にはいです!と答える

「ライティング達はとうします」

「現場待機、現地の局員に事後処理の引き継ぎ………よろしくな」

ミッドチルダ 某所

『刻印ナンバー?、護送体制に入りました』

「ふむ………」

ミッドチルダのどこか

そのくらい場所では大型モニターを見つめながらレリックの回収

作業を見つめる白衣を着た男

広域次元犯罪者、ジエイル・スカリエッティ

『追撃戦力を送りますか？』

「いや、辞めておこう。レリックは惜しいが、彼らのデータがとれただけでも十分さ。それにしても、この案件はやはり素晴らしい」

スカリエッティの前のモニターに映し出されるのは、スバル、キャロの3名と

ガジェットが送ってきた映像で映っているフェイト、エリオの2名。

「この子達を……生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだから……」

そう言うとフフツツと不敵に笑い始めるスカリエッティ

そして次に映し出されたのはユウキの姿

「ユウキ・エルナス……か……」

今のところ目立ってはいないが、何か隠された物が感じる……
もしかしたら……プロジェクトFの残滓よりも、貴重なサンプルになるかも知れないな……」

『そうでしょうかドクター？』

「ああ、そう感じるよウーノ……調べる価値がありそうだな」

おまけ

ティアナ「ユウキちよつといいかしら？」

ユウキ「なんだ？」

ティアナ「どうして今回デュエルディスク使わなかったのよ」

ユウキ「ああ…今日は出したくない気分だったからだ」

ティアナ「そうなの？」

ユウキ「まあ明日からちゃんと使うからさ」

ティアナ「変なユウキ…」

ユウキ「（まあ、本当の理由はスカリエツティに手札を明かすのが嫌だから…」

今回はあえて使わなかった。でもデュエルディスクがないときついな

仕方が無い、次からデュエルディスクを使うことにするか」

色々と考えているユウキであった……

第5話 ファースト・アライト後編DA-！（後書き）

フレイス「はあ」

ユウキ「どうしたんだ作者？」

フレイス「今、ドラマCD編を書いていて、頭が痛いんだよ」

ユウキ「何！？ドラマCD編だと！？」

フレイス「ああ、だからどうすればいいのか考えているの」

ユウキ「そうなんだ…」

フレイス「さて、次のあとがきからティアナが追加する予定だ」

ユウキ「やつとティアアが…」

フレイス「さらに、もう一人追加しようと考えている」

ユウキ「えっ、誰？」

フレイス「それは後のお楽しみだよ」

ユウキ「…まあいいや」

フレイス「では、また更新する日まで！…！」

第6話 発展D A - ! (前書き)

なんとかできました…

どござー！

第6話 発展DA-!

5月13日

部隊の正式稼働後、初の緊急出動がありました

密輸ルートで運び込まれたロストログア“レリック”をガジェットが発見、

輸送中のリニアレールを襲撃、それを阻止。レリックを回収するという任務でしたが……

六課前線メンバー一同の活躍もあって、無事に解決

確保した刻印ナンバー？のレリックは現在、中央のラボにて保管・検査中

初任務としてはまず問題ないだと部隊長のはやてちゃん、六課の後見人騎士カリムやクロノ提督も

満足されているようですと

「リイン曹長」

機動六課の隊舎の通路にあるイスにちよこんと座ってポチポチと報

告書兼勤務日誌をつけているリイン

ほぼ書き終えたところでリインを呼ぶ声が聞こえたのでリインが顔を上げればそこにいたのはシャーリー

「あっ！シャーリー！」

「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分 個人的な勤務日誌をつけてたですよ」

「ああ、なるほど」

機動六課が始まってから何度かリインが個人的な勤務日誌をつけているのを見たことがあるシャーリーは“なるほど”と納得する

空間パネルを閉じるとリインはシャーリーの方へと飛んできた

「シャーリーは？」

「新しいデバイスたちの調子を見に訓練場の方に行ってきたんですよ」

「そうですか、みんな元気でした？」

「はい！フワード陣もデバイスたちも、もう絶好調！」

S i d eスバル

訓練場に立体映像で映し出される森林地帯…

そこからは、ぶつかり合う音や炸裂音が聞こえていた。

「オラア！じっくりぞおおおおお！！！」

「！」

「たあああああ！！！」

スバルと訓練しているヴィータ

長年に渡る相棒であるアイゼンを構え、スバルへと思い切り突っ込んで行く

「マツハキヤリバー！」

『Protection』

「でえやあああ！！！」

「ぐっ……く……う……」

ヴィータの強烈な一撃をリボルバーナックルを装備した右手に張っ

たプロテクションで受け止める

それでもヴィータの重い一撃により、スバルはどんどん後ろに押し始められる

「でえりやあああああ！！！！」

「うあああああああ！？ぐう！？」

「スバル！」

もう一度振りかぶったヴィータの全力の一撃でスバルは勢いよくぶっ飛ばされる

そして真後ろにあった木に思い切り背中からぶつかった

「ふん」

「いったったあ……」

スバルの頑丈さを確かめたヴィータはアイゼンを構えたままなるほど、と1人納得する

「やっぱりバリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「えへ……ありがとうございます」

「あたしやお前のポジション……フロントアタッカーはな、単身敵陣に飛び込んだり

最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高いほど、

攻撃時間を長く取れるしサポート陣に頼らねえで済む……ってこれはなのはから教わったな？」

「はい、ヴェータ副隊長！」

「受け止めるバリア系、弾いて反らすシールド系、

身にまもって自分を守るフィールド系。この3種を使いこなしつ

つ、ポンポンふっ飛ばされねえ様に下半身の踏ん張りとマツハキヤリバーの使いこなしを身につける」

「頑張ります！」

『I'll learn.（学習します）』

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だから……」

グラーファイゼンにぶっ叩かれたくなかったらしっかり守れよ」

「はい！！」

Sideフェイト

「エリオとキャロはスバルやヴェータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避が最重要。例えば……」

自分の位置からすぐ近くに居る狙撃スフィアから低速で撃たれる攻

撃を

ステップを踏むように避けていくフェイト

「まずは動き回って狙わせない。」

フィールド内を動きまわるフェイトはスフィアに狙わせないように縦横無尽に走り回る

「攻撃が当たる位置に長居しない……ねっ……」

「はい!」

エリオとキャラも理解して返事を返す

「これを低速で確実に出来るようになったら……スピードを上げていく……」

スフィアの動きは、先ほどとは違い、弾速の速度が魔導師試験並みに鋭くなり、

フェイトはそれをより早く、舞を踊るかのようによけていく

1度足を止め、スフィアを見るとスフィアもそれを感知して全てが一斉に攻撃をする

「あっ!」

「こんな感じだね……」

エリオとキャラの後方から聞こえた声

振り返れば2人の後ろに立っていたのは無傷でほほ笑んでいるフェイト

それを見たエリオとキャラはフィールドへと目を向けると、

先ほどまでフェイトがいた場所には、今の位置まで地面が抉れていた。

「……す、凄い……」

「今のもゆつくりやれば、誰でも出来るような基礎アクションを、早回しにしているだけなんだよ」

「は、はい」

「スピードが上がれば上がるほど、感やセンスに頼って動くのは危ないの……」

ガードウイングのエリオはどの位置からでも攻撃やサポートを出るように、

フルバックのキャラは素早く動いて、仲間の支援をしてあげられるように、

確実に有効な回避アクションの基礎をしつかり覚えていこう」

「はい……」

「いい返事だねじゃあまずキャラやってみようか？」

「はい」

S i d e ティアナ

今現在、ティアナが行っている訓練は“インターセプトトレーニング”

訓練用魔力弾による迎撃訓練で、色違いの弾丸にはそれぞれ異なる特性を持ち飛行機動や

速度・命中時の効果が異なる仕様になっており、

自身に向かい来るモノもあれば仲間目掛けて飛んでいくものもあるそれらに対して対応する弾丸を選び生成、確実に命中させてゆくというなかなか過酷な訓練だ…

しかも現在の第一段階では効果ごとに色分けされている弾丸がレベルアップすることに

徐々に色分けが無くなり、最終的には全て同色か色と性質が噛み合わない…

つまり、発射の瞬間に弾丸動作を瞬時に見抜かなければならないということだ

実際に動体視力や判断力が必要になるのだが…

「ティアナみたいな精密射撃型はいちいち避けたり受けたりしてたんじゃない、仕事ができないからね」

「ッ!? バレット! レフトV、ライトRF!」

『Alert.』

なのはが近くに遭った魔力弾を動かしたのでティアナはすぐに対応させようとするが、

ティアナは横に飛んでさらに地面を転がってよけていく

「ほら! そうやって避けちゃうと後が続かない!」

「クッ… だったら」

ティアナはツーハンドのクロスミラージユがバレットを交換したことを告げると

すぐに追撃の魔力弾を撃ち落とす

「そう、それ! 足は止めて視野を広く! 射撃型の真髄は?」

「あらゆる相手に弾丸をセレクトして命中させる! 判断速度と命中精度!」

『Reload.』

「チームの中央に立って誰より早く中・長距離を制す。それが私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ」

「はい！」

S i d e ユウキ

「……なぜ、俺の教導はシグナム副隊長なのでしょうか？
ポジションは違いますよね！！」

「確かに私はフロントアタッカーで、お前はセンターガードだ。
しかしお前はフロントアタッカーでも対応できるのだろうか？
私だからこそ、教えられることがある」

シグナム副隊長がレヴァンティンを構える。

「ユウキ、私は、人に物を教えるという柄ではない。
戦法など、届く距離に近づいて斬れくらいしか言えん……
だから私と戦ってもらおう！！」

「……ああもう、分かりました
戦って勝てばいいんですよ！！」

ユウキはデュエルディスクを展開してデッキからカードを5枚ドロ
ーする

「言うておくが、お前はモンスターを召喚することは禁止

使用できるのは、自分自身に装備できる装備魔法カードだけだ」

「……手札から魔法カード《アームズ・ホール》を発動」

《アームズ・ホール》

通常魔法

自分のデッキの一番上のカード1枚を墓地へ送って発動する。
自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を手札に加える。
このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

ユウキはデッキの一番上のカード1枚を墓地へ送り

デッキから《稲妻の剣》いなすま けんを手札に加えて

自分に装備した。

《稲妻の剣》いなすま けん

装備魔法

戦士族のみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力を800ポイントアップさせ、
フィールド上の水属性モンスター全ての攻撃力を500ポイントダウンさせる。

「……じゃあ行きますよシグナム副隊長！」

「来い！ユウキ……！」

こうしてシグナム副隊長と戦うことになった…

* * * * *

なのはの笛が鳴り、午前の訓練が終了した

「はい、じゃあ午前の訓練終了!」

「「「「「はあ……はあ……はあ……はあ……」」」」」

「はい、お疲れ……個別スキルに入ると、ちょっときついでしょう
……」

「……ちょっと……というか……はあ……はあ……」

「……はあ……はあ……かなり……」

「フェイト隊長は忙しいから、
そっしょっちゅっつきあえないけど、
あたしは当分お前らにつきあってやるからな。」

「私もだ」

「「あ、ありがとうございます……」」

「それから、ライトニングの2人は特にだけど……
スターズの3人もまだまだ体が成長している最中なんだから、
くれぐれも無茶はしないように」

「「「「はい」「」「」

「じゃ、お昼にしようか。」

「今日は何のメニューかな？」

午前の訓練を終え、隊舎の方へと向かって歩いていく

そして隊舎の前に差し掛かった時、

なのはたちの目の前にジープに乗り込もうとするはやてとリイン、
そしてシャーリーの姿があった

「あつ、みんなお疲れさんや」

「「「「はい」「」「」

「はやてとリインは外回り？」

「はいです、ヴィータちゃん」

「うん。ちょうナカジマ三佐とお話してくるよ」

「ナガシマ三佐って、確かスバルのお父さんだっけ？」

「そうやよ、スバル、お父さんやお姉ちゃんになんか伝言とかある
か？」

「いえ、大丈夫です……」

「じゃあ、はやてちゃん、リイン、行ってらっしゃい」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね……」

「うん」

「行ってきます」

そう言うてはやての運転するジープは陸士108部隊へと向けて発進していく

Sideフォワード

「……なるほど、スバルさんのお父さんとお姉さんも陸士部隊の方なんですね」

「うん、八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって」

「へえ……」

「しかし、うちの部隊って関係者繋がり多いですよ。隊長たちも幼馴染同士なんでしたっけ」

「そうですね、なのはさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも子供の頃、確かその世界で暮らしてたとか……」

「えーっと確か……管理外世界の97番でしたっけ……」

「そう」

「97番ってうちの父さんのご先祖様のいた世界なんだよね」

「そうなんですか？」

空になった皿にパスタを自分の皿と同じく空になったエリオの皿に大盛りで入れていくスバル

「そういえば、名前の響きとか何となく似ていますよね、なのはさん達と……」

「そつちの世界には、私も父さんも行ったことがないし、よくわかんないんだけどね……」

「それよりもみんな、前から思ったことがあるんだが……」

「何、ユウキ？」

「スバルとエリオは、たくさん食べるが……
いくらなんでも食糧が大丈夫かとても心配で……」

「ユウキ、そんなこと考えていたの？」

「ああ、スバルとエリオのせいで
食糧がなくなると今日の夕食が食べれなくなるかもしれない」

ユウキの言葉にエリオとスバルは反応する

「えっ夕食が！」

「私達のせいで……今日の……」

エリオとスバルは食べるスピードが遅くなる

「まあたくさん食べなければいいんだが…」

「ユウキ、フォローになってない」

「お兄ちゃん最低です。」

「えっ…俺が悪いの!？」

いくらなんでも思っていることを話をしないほうがいいと私は思う。

BY作者フレイス

「まあ、まあ食品のほうは、毎日補充をしているから大丈夫!たくさん食べてもいいよ」

「本当ですか!」

「よし、たくさん食べて訓練頑張るぞー!」

エリオとスバルは元気が出てきてパスタを食べる

「だが、もしエリオとスバルのせいで補充したはずの食糧がなくなるとどうする?さらに補充するはずの食糧は届かなくなる可能性があるか?」

「あるかもしれない、それでもたくさん食べるとでも言うのか?」

ユウキの言っではならないことを言ってしまい二人は食べるのをやめて

「……やっぱり私達食べすぎかな……」

「そうですね……」

「いや、例えばの話だから気にしなくても……」

「だから、いつも余計なこと言うな!」

ティアナはユウキの頭にチョップをする

「痛っ!」

「お兄ちゃん、もう一度いいいます…最低です!」

「俺のことを最低といいやがって…キャ口話したいことが1つあるぞ」

「なんですか?」

「いつも好き嫌いをしているからにんじんをエリオに渡すなんて、子供はそんなことをしてあげたら駄目だ、しっかり食べるんだ!」

「だって、にんじん嫌いですから……」

「ほう、今日の夕食はカレーライスのはずだまさか、カレーライスに入っているにんじんを

「エリオに渡すんじゃないよね？」

「うっ、分かりましたしっかり、にんじん食べます！」

「約束だよ。」

「（今回まともに言ったわね…）」

「あれ？…エリオとスバルがいないんだが」

「いつの間にかいなくなっていた」

「さっき食べ終えてどこかへ行ったけど…」

「どこに行ったんだろう？」

「たぶんユウキのせいね。」

「何!？」

Side はやて

陸士108部隊 隊舎 同隊長室

「新部隊、なかなか調子いいみたいじゃねえか」

「そうですね、今のところは」

「しかし、今日はどうした？古巣の様子を見に来るほど暇な身でもねえだろうに」

「えへへ……愛弟子から師匠へのちょっとしたお願いです」

呼び鈴のブザーが鳴ると、一人の女性とラインが一緒に入ってきた。

「はいよ」

「失礼します……」

ナカジマ三佐は入室を促すとドアが開く

そこにいたのはスバルと同じ青い髪の陸士隊の制服を着た女の子

ギンガとラインがお茶を持って立っていた

「ギンガ！！」

「八神二佐、お久しぶりです」

「ギンガ……積もる話もあるだろうが、後にしてくれや」

「す、すみません、八神二佐失礼します……」

「またな、ギンガ。後でゆっくり話そうな……」

「はい」

ギンガとは一旦分かれ、はやては本題をナカジマ三佐に願う

ことにした。

「お願いしたいんは、密輸物のルート捜査なんです」

「お前のところで扱っているロストロギアか……」

「それが通る可能性が高いルートがいくつかあるんです。詳しくはラインがデータを持ってきていますので、後でお渡ししますが……」

「まっ……うちの捜査部を使ってもらうのはかまわないし、密輸調査はうちの本業っちゃ本業だ。頼まれねえことはないんだが……」

「お願いします……」

「八神よ……他の機動部隊や本局捜査部でなくて、わざわざうちにくるのは、何か訳があるのか」

「密輸ルートの捜査自体は彼らにも依頼しているんですが、地上のことはやっぱり、地上部隊の方がよく知っていますから」

「まっ、筋は通っているな……いいだろう。引き受けた」

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスで、ギンガはその副官だ。二人とも知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろう」

「はい、六課の方は、テストロッサ・ハラウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと……」

S i d e リイン& a m p ・ギンガ

一方、部隊長室を後にしたギンガとリインはオフィスの方で話していた

「そうですか……フエイトさんが……」

「そうです。六課の捜査主任ですから、一緒に捜査を当たってもらうこともあるかもですよ」

「これは凄く頑張らないといけませんね」

「はい。あつ、そつだ。捜査協力に当たって、六課からギンガにデバイスを一機プレゼントするですよ」

「デバイスを……」

「スバル用に作ったのと同型機で、ちゃんとギンガ用に作り直してるんですよ」

「それはあの……嬉しいんですけど……良いんでしょうか？」

「大丈夫です！スバルさんと一緒に走り回れるように立派な機体にするですよ」

「ありがとうございます、リイン曹長」

S i d e はやて

「スバルに続いてギンガまでお借りする形になってしもって、ちょっと心苦しくあるんですが……」

「なに、スバルは自分で選んだことだし、ギンガもハラオウンのお嬢と一緒に仕事は嬉しいだろうよ……しかし、まあ気がつけばお前も俺の上官なんだよな。魔導師キャリア組の出世は早いな」

「魔導師の階級なんて唯の飾りですよ。中央や本局に行ったら、一般士官からも小娘扱いです」

「……だろうな。っとすまん、俺まで小娘扱いしてるな」

「ナカジマ三佐は、今も昔も尊敬する上官ですから……」

「……そうかい」

『失礼します。ラッド・カルタス二等陸尉です』

「おう。八神二佐から外部協力の依頼だ。ギンガ連れて、会議室でちよいと打ち合わせしてくれや」

『はっ。了解しました』

そう言うとカルタスさんの通信モニターは消える

「つつつた」

「はい、ありがとうございます」

「打ち合わせがすんだら、メシでも食うか」

「はい、一緒にします」

Side フェイト

時空管理局 首都中央地上本部

「レリック自体のデータは以上です」

「封印はちゃんとしているんだよね」

「はい、それはもう嚴重に。それにしても良く判らないんですよね。レリックの存在意義って？」

「うん……」

「エネルギー結晶体にしては良く判らない機構がたくさんあるし、動力機関にしてもなんか変だし」

「まあ、すぐに使い方が判るものなら、ロストログア指定はされないもの。……ん、こっちはガジェットの残骸データ」

シャーリーがパネルを操作すると今度はモニターにガジェットの残骸データが映し出される

「はい、こっちはシグナムさんやヴィータさんが捕獲してくれたものと変わりありませんね。」

新型も内部機構はそう大差ないし……」

「……ん、ちょっと待って。さっきの？型の残骸の写真。気になるのが写っているの」

「は、はい」

パネルを叩いて映し出したのはガジェットの内部分にあった青い結晶があつた。

「これ……宝石？ エネルギー結晶かなんかですかね」

「……ジュエルシード」

「えっ？」

「随分昔に私となのはが探し集めていて、今は局の保管庫に管理されているはずのロストログア」

「ほあ、なるほど……って、何でそんなものが！！」

「シャーリー、ここ、この部分を拡大して。何か書かれている」

シャーリーに拡大してもらったプレートには名前見たいのが書かれていた。

「これ、名前ですか？ジェイ……」

「ジェイル・スカリエツィ」

「えっ？」

「……ドクター・ジェイル・スカリエツィ。」

ロストログア関連事件を初めとして、数え切れない位の罪状で、超広域指名手配されている一級搜索指定の次元犯罪者だよ」

「次元犯罪者……」

「ちょっと事情があつてね。この男の事は何年か前からずっと追っているんだ」

「何でそんな犯罪者が、こんな分かりやすく自分の手がかりを……」

「本人なら挑発、他人だとしたらミスリードねらい。」

どっちにしても、私やなのはがこの事件に関わっているって知っているんだ」

「ただ、もし本人ならロストログア技術を使つて、

ガジェットを制作出来るのも納得出来るし、レリックを集めているのも想像出来る。」

「シャーリー、急いでこのデータをまとめて隊舎に戻ろう。隊長達を集めて、緊急会議をしたいんだ」

「はい、今すぐに……」

S i d e はやて

「ん、了解や。すぐ戻るから対策会議しよう。丁度捜査の手も借りれた所やしな」

ナカジマ三佐とギンガと夕食を食べていた所に、フェイトからの通信が入った。

内容は事件が進展をしたと言うことで会議をしたいと言うことだった

「何か進展ですか？」

「ああ、事件の犯人の手掛かりがちょっとな……
と言うわけで、すみませんナカジマ三佐。私はこれで失礼させていただきます」

「おっ」

はやてはせめてここの勘定を払おうと伝票を取ろうとしたら、先にナカジマ三佐が奪い取った。

「そんな」

「さっさと行ってやんな。部下が待ってるんだろ」

「はい、ギンガはまた私かフェイトちゃんから連絡するな」

「はい、お待ちしています」

S i d e フェイト

データをまとめた私達は車で急いで六課に向かっていた。

「ドクター・スカリエッティでしたっけ。あの広域指名手配犯」

「うん」

「その人がレリックを集めている理由って例えばどんな？」

「あの男はドクターの通り名の通り、生命操作とか生体改造に関して異常な情熱と技術を持っている。」

そんな男が、ガジェットみたいな道具を大量に作り出してまで探し求めるからには……………」

S i d e ジェイル

その頃、ミッドチルダ某所

そこでは人型の何かが入ったカプセルの通路を歩くジェイル・スカリエッティ

回廊の最奥にたどり着くとそこに、スカリエッティの補佐をしているウーノが空間モニターに映る

『ゼストとルーテシアが活動を再開しました』

「ふむ……クライアントからの指示は？」

『彼らに無断での支援や協力はなるべく控えるように、とメッセージが届いています』

「自律行動を開始させたガジェットドローンは私の完全制御下と云うわけじゃないが

……勝手にレリックの元に集まってしまうのは大目に見てほしいね」

『お伝えしておきます』

「彼らが動くならゆっくり観察させてもらおうとするよ。

彼らもまた、貴重で大切な“レリックウエポンの実験体”だからね」

Sideフォワード

「機動六課、訓練場」

日も落ちた六課の訓練場

そこからはなのはがホイッスルを吹く音が聞こえてきた

「はあい、それじゃあ夜の訓練おしまい！」

「「「「「ありがとうございました……」「」「」「」

フォワードメンバーはこの日もボロボロのへとへと状態になるまで
訓練漬けだ

「「「「「お疲れ様でしたあ……」「」「」

「は〜い」

「ちゃんと寝ろよ」

訓練場を後にするフォワード5人を見ながらちゃんと寝るんだぞと
念を押すヴィータ

フォワード5人は部屋に帰ったらすぐにダウンしてしまうのは確実

かもしれない……

「はぁ……」

ヴィータはため息をつきながらモニターでデータをまとめているなのはの方を向く

そしてなのはの方へと歩いて行き、話しかけた

「しかし本当に朝から晩まで……疲れんだろ」

「私は機動六課の戦技教官だもの。当然だよヴィータちゃん」

「後あれだ。なんつうか。もっと厳しくしないで良いのか。」

あたしらが昔受けた新任教育なんて、歩き方から挨拶まで、もう何でもかんでも厳しく言われてたんじゃなか

「戦技教導隊のコーチングって、どこもこんな感じだよ。」

細かいことで叱ったり、怒鳴りつけている暇があったら、模擬戦できつちり打ちのめしてあげる方が、教えられる側は学ぶことが多いって、

教導隊では良く言われているしね」

「おつかねえな……おい……」

「私達がするのは真つ新たな新人を教えて育てる教育じゃなくて、強くなりたいうって意志を持った魔導師達に、

今よりハイレベルの戦闘技術を教えて導いていく戦技教導だから……」

「ふう、何にしても大変だよ……教官つてのも」

「でも、ヴィータちゃんもちゃんと出来ているよ。立派立派」

「撫でるな!!」

あたしはスターズの副隊長だからな。お前のことはあたしが護つてやる。

おまけ

スバルとエリオがいなくなった時……より

スバル「なのはさん、本当に私達食べすぎでしょうか?」

なのは「そ、そんなこと急にいわれても……」

エリオ「ですが、僕達がたくさん食べ過ぎると夕食なくなるかもしれませんし……」

その言葉にヴィータは反応した

ヴィータ「ごめんシグナム後は食べてくれ」

シグナム「珍しいな…たくさん食べるんじゃないかなかったのか？」

ヴィータ「エリオとスバルの話を聞いていると本当に

ありえるんじゃないかと思って…先に失礼するぜ」

シグナム「（一体誰がこんな話をしたというのだ…）」

余談だが

今日の夕食は

スバル、エリオ、ヴィータ副隊長はカレーライス2杯でやめた

キャロはにんじんを食べて

キャロ「私が大人になるためには好き嫌いしないこと…」

とユウキが言ったことを肝に免じて好き嫌い克服したのであった…

第6話 発展DA - ! (後書き)

フレイス「更新完了!!」

ユウキ「まさか今日更新するとは…」

ティアナ「ほんとよね…」

フレイス「悪いのか!？」

ティアナ「いいや、別に」

フレイス「……ティアナのキャラ壊れているのか?」

ユウキ「そんなことより、今日新しいメンバー来るんじゃない…」

フレイス「ああ、今日は休みだ」

ユウキ「えっ、どうして!？」

フレイス「理由があつてな…また今度くる予定だ」

ユウキ「まあ、作者さんが言うならいいけど…」

ティアナ「確か…次はドラマCD編ね」

フレイス「そう、次回主人公の弱点が明らかになる!!」

ユウキ「えっ、どういっ」

フレイス「では、また更新する日まで!」

ユウキ「ちょっと!作者!」

ティアナ「はあ、リメイク編とはいえ、いつもと変わらない雰囲気
ね…」

第7話 出張任務D A - 1 (前書き)

今回は短いです…

ではでは…

第7話 出張任務DA-1

「えっ、派遣任務……ですか？」

「しかも異世界に？」

「うん、決定事項。緊急出勤がなければ、2時間後に出発だそうだから、

スバル、ティアナ、ユウキ」

「「「はい！」「」」

「今の作業片付けたら、出勤準備をしておいてね」

「はい、なのはさん！」

「了解です」

「了解」

S i d e ユウキ

一方ユウキは自分の部屋で出勤準備の支度をしていた

「派遣任務か、一体どこに行くんだろっな……」

ユウキは未来を知っているのだが、ドラマCDの事は知らない

知っているのはアニメの方だけだからだ

「とりあえず、これとか色々持っていこう

あつ、念のためこいつも…」

ユウキが荷物の整理をしていたら、

”コンコン”

「はい」

ドアのノックの音が聞こえたのでドアを開けることに

そこにいたのはティアナだった

「ティアか、何か用か？」

「集合時間までまだ時間があるから、

あなたの部屋でくつろいでもいい？」

「まあいいけど…」

ユウキはティアナを部屋に入れて

再び荷物の整理をすることに

「ユウキ、お菓子持っていくんだ」

「ああ、八神部隊長に聞いてみたら

お菓子は500円までいって言われたから」

「…そ、そうなんだ（八神部隊長、何考えているのか分からないわ…）」

* * * *

Sideライトニング

ライトニングのフェイトはエリオ、キャラに派遣任務の説明をしていた

「レリックか、ガジェットの出現なんでしょうか？」

「まだ分からないけど、ロストロギア関連ではあるみたいだね」

「はい」

「まあ、前線メンバー全員出動だしいつもの任務とあんまり変わらないよ。

エリオもキャラも、平常心だね」

「「はい！」「」

「じゃあ準備して、屋上ヘリポートに集合ね」

「「はい、フェイトさん」「」

* * * *

ヘリポート

「あつ！エリオー！キャロー！」

「スバルさん、ティアさん、兄さん！」

「すみません、お待たせしました」

「まだ時間あるわよ。隊長たちも来てないしね」

「まあ確かにな……」

「おゝみんなお揃いやね」

「あれ？八神部隊長にヴィータ副隊長」

「おっ」

「シグナム副隊長にシャマル先生も」

「ああ」

「はあい」

「私もいるですよ」

「リイン曹長も……」

「まさか、この全員で出動ですか？」

「部隊はグリフィスくんが指揮を取って、ザフィーラがしっかり留

守を守ってくれる」

「詳細不明とはいえロストロギア相手だし、主要メンバーは全員で出撃することで」

「あとは行き先もちょっとね」

フェイトがそう言うとなのはをはじめとする隊長陣と副隊長陣たち全員が顔を合わせて笑顔を見せる

「行き先……何処なんですか？」

「第97管理外世界……現地惑星名称“地球”」

「……あ……！」

「！？（地球だと……）」

派遣先の世界をはやてが伝えたとフォワード4人から声が上がった
もっともユウキは驚いているが……

「その星の小さな島にある小さな街“日本・海鳴市”……ロス
トロギアはそこに出現したそうや」

「地球ってフェイトさんが昔住んでた……」

「うん」

「私とはやて隊長はその生まれ」

「そつちや」

「私たちは6年ほど過ごしたな」

「うん。向こうに帰るの、久しぶり」

「まあある程度の広域捜査になるから、司令部も必要やしな」

「つつことて出発だ。準備はいいか？」

「」「」「はい！」「」「」

「では、出発！」

そう言うと全員がへりへと乗り込んで行く

「（地球か、なつかしい言葉だな…）」

* * * * *

* へりの中 *

「ちょうどこの間みんなの故郷の話をしたばかりで、なんか不思議なタイミングですね」

「うふふ。本当！」

そんなスバルの横ではエリオとキャロとユウキがモニターで第97

管理外世界について調べていた

「えっと、第97管理外世界：文化レベルB」

「魔法文化なし、次元移動手段なし……って、魔法文化ないの！？」

「ないよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

「スバルさん、お母さん似なんですよね！」

「うん」

「いや、なんでそんな世界からなのはさんや八神部隊長みたいなオーダーSランク魔導師が……」

「突然変異と言うか、たまたまな感じかな」

「うえ！？あつ、すみません！」

「ええよ、別に」

「私もはやて隊長も魔法とであつたのは偶然だしね」

「……へえ」

フォワード4人は感心する中ユウキはシャルとリインの方へ向いていた

「はい、リインちゃんのお洋服」

「わあ〜シャマルありがとです」

「…リイン曹長の服ですよね？」

「はいです、はやてちゃんのちっちゃい頃のお下がりです」

「いえ、そうじゃなくて…」

「なんか、普通の人のサイズなんですが」

ユウキにそう言われて少しだけ考え始めるリイン

「う〜ん……あはっ！そう言えば、フォワードのみんなには見せたこと無かったですね」

「……………？」

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ！」

リインの足元のベルカ式魔方陣が現れて一瞬だけヘリ内部を光が包む

そして光が消えた頃、そこには子供サイズのリインが立っていた

身長は、エリオやキャロと変わらないほどの大きさだ

「っと、一応このくらいのサイズにもなれるですよ」

「デカッ!？」

「いや、それでもちっちゃいけど……」

「普通の女の子のサイズですね」

「向こうの世界には、リインサイズの人間もふわふわ飛んでる人間もいねえからな」

「あの、一応ミッドにも居ないと思います・・・」

「はい・・・」

「うーん、大体エリオやキャロとおんなじくらいですかね？」

「ですね」

「リインさん、可愛いです」

「あはは」

「リイン曹長、そのサイズでいた方が便利じゃないんですか？」

「こっちの姿は、燃費と魔力効率があんまりよくないんですよ
コンパクトサイズで飛んでた方が楽チンなんです」

「なるほど…あれ、お兄ちゃんどうしたんですか？」

ユウキはへりの壁にもたれていた

「……ごめん、少し酔ったみたい」

「だ、大丈夫ですか？」

「…………たぶん大丈夫だと思う」

「初出勤の時に酔っていませんよね」

「ああ、あの時は酔い止めの薬を飲んだからな…
今、酔い止めの薬が無くて…」

ユウキはこう見えて乗り物に弱いのだ

だが、バイクは大丈夫らしい

理由はおそらく遊戯王のD・ホイールに乗れるように克服したに違いない…

「なのはさんどうします」

「うーんもう少しで着くから頑張れる？」

「……………だ、大丈夫です」

「（どこからみても大丈夫じゃない気がするんだけど…）」

ティアナは心の中でそう思った

「八神部隊長、そろそろ」

「うん。ほんならなのは隊長、フェイト隊長。私と副隊長達はちよ
う寄り所があるから」

「わかった。先に現地入りしておくよ」

「「「おつかれさまです」「」「」

「はい」

「お、おつかれ…さま…です…」

「…なのは隊長、現地に着いたらまず
酔い止めの薬を買っておいてな」

「うん、そうだね…」

へりは転送ポートに着き、機動六課フォワード陣は第97管理外世
界へと向かうのだった。

第7話 出張任務DA-11（後書き）

ユウキ「……………」

ティアナ「ユウキ、気絶しているわ」

フレイス「まあ、乗り物に弱いから、しょうがないか。」

ティアナ「そういえば、今日新メンバーは……」

フレイス「ああ、今日くる予定だぞ」

”ガチャ”

スバル「えつと、ここだよね……」

ティアナ「スバル!？」

スバル「あつ、ティア!どうしてここにいるの?」

ティアナ「作者さんと話していたのよ、それよりどうしてあんたが……」

フレイス「出番が少なくなるから、あとがきで働くことになった」

スバル「えつ、それはどういう……」

フレイス「では、また更新する日まで!」

スバル「ちょっと!?!?私の話が……」

ユウキ「……………」

ティアナ「ユウキ、いつまで気絶しているのよ(汗)」

第8話 出張任務D A - ! 2 (前書き)

毎日更新しているが…

そろそろストックが無くなる、どうする!?

まあ、明日更新できるか分かりませんが…

ぜひぜひご覧ください!

誤字、指摘もよろしくお願いします

第8話 出張任務DA-12

「はい、到着です！」

「わあ〜」

「ここが……」

「なのはさんたちの……故郷」

「そうだよ。」

「ミッドとほとんど変わらないでしょ」

目の前に広がったのは一面に広がる綺麗な青の湖…

その先にはコテージらしき物も見えた。

「空は青いし、太陽も1つだし」

「山と水と、自然の匂いもそっくりです」

「きゅくる〜」

「湖、きれいです」

「はっ」

「というか、ここは具体的にはどこなんでしょう？なんか、湖畔の

「ページって感じですが」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を快く許諾していただけですよ」

「現地の方ですか？」

「そうだよ」

「……兄さん大丈夫ですか？」

「ああ、なんとか大丈夫だ……まだ酔っているけど」

「……後で酔い止めの薬買ってあげるからね。」

「はい、ありがとうございますのはさん。」

ユウキがなのはさんにお礼を言っていると、

1台の車がやってきた

「あつ自動車？ こっちの世界にもあるんだ」

「ということは、バイクもあるかもしれないな……」

そして車が止まり、1人のショートカットの女性が運転席から出てきた

「なのはっ！ フェイトっ！」

「アリサちゃん」

「アリサ」

「なにももうご無沙汰だったじゃない」

「にやはは。ごめんごめん」

「いろいろ、忙しくって」

「あたしだって忙しいわよ。大学生なんだから」

「アリサさくんっ。こんにちわですっ！」

「リン！久しぶりっ！」

「はいですうっっ」

随分と久しぶりに見た親友たちの家族にも挨拶をかわしていくアリサ
そんな状態を見ながらフォワード5人は置いてけぼりをくらっていた

「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

「アリサ・バニングスです。よろしくね」

「「「「よろしくお願ひしますっ！」「「「「」

「よろしくお願ひ……します……」

「何、なんか元気がないけど」

「にはやは、実はさっきまで乗り物で移動をしていたら酔っていて」

「つまり乗り物酔いです……」

「そうなんだ…大丈夫？」

「はい、なんとか大丈夫です」

「ならいいけど……心配だわ」

「アリサちゃん、何か薬とかあるかな？」

「うーん、コテージに確か、薬あつたはずよ…。」

「本当ですか？」

「探してみるけど、見つからないと思うわ」

「じゃあ、アリサちゃん、私の生徒を連れて

薬を見つけたら飲ませてほしいんだけど…いいかな？」

「わかったわ、じゃあ行きましょ」

「は、はい…」

ユウキはアリサさんと一緒にコテージへと向かう

「お兄ちゃん、大丈夫でしょうか…」

「大丈夫よ、あいつはスバルよりマシだから」

「ひどいよ〜ティア」

「兄さん…。」

* * * *

Sideユウキ

一方ユウキはというと…アリスさんと一緒に薬を探しており

酔いに効く薬を発見した！！

パッケージを見てみると「乗り物酔いに効く薬」と書いていた

ユウキは”本当にこの薬大丈夫なのか…”と心配していた

ユウキはアリスさんから薬を貰って

それを飲んでいた（もちろん水も一緒に…）

しばらくすると、ユウキは状態が良くなり

アリスさんにお礼を言っていた

「ありがとうございます、アリスさん」

「別にいいわよ、あっそういえば聞きたいことがあるのよ」

「はい、何でしょうか？」

「なのはのことなんだけど、最近無理とかしてない？」

「いえ、普通に元気ですよ」

「そうなんだ、無茶をしていると思ったけど」

「…なのはさん、小さい頃無茶ばかりしていたんですか？」

「そうよ、確か小さい頃に無茶とかたくさんしていたわ」

「そうですか…あっ、そろそろ行きますね」

任務の内容を確認したいので…」

「分かったわ、じゃあまた後で」

「はい」

ユウキはコテージのリビングに向かった…

Sideなのは

「さて、じゃあ改めて今回の任務の内容を簡単に説明するよ」

「「「「「はい」」」」」」

ユウキは乗り物酔いから回復して任務を聞いていた

「搜索地域はここ、海鳴市の市内全域でロストロギアの反応があったのは……こことここと、ここ」

「移動してますね？」

「そう。誰かが持って移動してるか、独立して動いているのかは分からないけど……」

「対象ロストロギアの危険性は今の所確認されてない」

「仮にレリックだったとしてもこの世界は魔力保有者が滅多にいないから、

暴走の危険はかなり薄いね」

「とは言え、相手はやっぱりロストロギア……何が起こるかもわからないし、

場所も市街地……油断せずにしっかりと搜索していこう。」

「では、副隊長達には後で合流してもらおうので」

「先行して出発しちゃおう！」

「「「「はい……」」」」

* * * *

「じゃあ中距離探査はライン、お願いね」

「お任せです！」

「クロスミラージユにも簡易版の探索魔法をセットしてあるから、そっちとこっちで2人ずつで少し離れて探していこう」

「はい！」

「あの、俺はどこに行けば？」

「そうだね、ユウキはティアナ達と一緒に行ってくれるかな？」

「了解です」

「あとは、市内の各所にサーチャードとセンサーを設置、作業としてはそんな感じかな」

「はい！」

「隊長、すまん。遅くなった」

「シグナム。ちよつと始めるところですよ」

シグナムが合流すると空間モニターにはやとヴィータが映った

『ロングアーチも準備万端や！』

『あたしもこれから探索と設置をしながらスターズに合流する』

「了解」

『ほんなら、機動六課出張任務・ロストロギア探索。任務開始や！』

『了解！』

* * * *

Sideユウキ

「つーか、本当にミッドのちょっと田舎あたりと大差ないわね、街並みも人の服装も」

「んー私は好きだなあ、こつ言つ感じ」

「まあね、なんかのんびりしてるみたい」

「あつ！ティア！アレ、アイス屋さんかな！？」

「あつ、そうかも・・・って、やめなさいよ！？任務中に買い食いなんで。恥ずかしい！」

「づうづ・・・」

「つたく、あれユウキは？」

「悪い、遅くなった」

ユウキが持っているのは、アイスクリームだ

「あつ、アイスだ!？」

「あんたねえ、いなくなつたと思えば
アイス買っていたなんて…」

「別にいいだろ、八神部隊長にアイス買ってもいいですか？
と聞いたらさ、別に買ってもいいって」

「（八神部隊長、本当に何考えているのかしら…）」

ティアナは頭を抱えていた

「ほい、スバルお前の分だ」

「ありがとう」

スバルはアイスを受け取り食べ始める

「これは、ティアの分だ」

「…私は、いらないわ」

「ええ、せっかくユウキが買ってきたのに?」

「うるさいわね、任務中に買い食いは…」

「はいはい、そんなことはどうでもいいからさ、食べなよ。」

「……………しょうがないわね」

ティアナはアイスを受け取り食べてみる

「……………おいしい」

「だろ、地球のアイスは俺たちが食べているアイスとは違うんだからな…」

（もつとも、俺は懐かしい味だったな…）」

「そうね、さあアイスを食べ終わったら
サーチャーを設置するわよ」

「了解した、スバルもいいな？」

「うん、それにしてもこのアイスおいしいな」

* * * *

Side アリサ

なのはたちと別れたアリサとすずかは待ち合わせ場所で合流し

アリサの運転する車で海鳴市内を走っていた

「なのはたち、相変わらず頑張ってるみたいね」

「晩御飯は私たちで用意してあげよう？せっかくコテージなんだし、バーベキューとかいいよね」

「あつ、良いわね！なのはの生徒たちたくさん食べそうだったし！たっぷり買い出し行っところか！」

「うん！」

* * * *

「《ロングアーチからスターズとライトニングへ

さつき、教会本部から新情報が来ました。

問題のロストログアの所有者が判明、運搬中に紛失したのことで、事件性はないそうです》」

「《本体の性質も逃走のみで攻撃性は無し、

ただし、たいへん高価なものなので

できれば無傷で捕えてほしいとのこと。

まあ気い抜かずにしっかりやる》」

『了解』

センサーの設置と散布を終えてからロングアーチから来た情報に了解と伝えた

「ちよつと、肩の力は抜けたかな？」

「はいです」

「ホッとしましたあ」

「うん」

「確かにな」

「と言うか、そろそろ日も落ちてきましたし……晩御飯の時間ですね」

『《ライトニング、そっちはどう？》」

「《こちらライトニング。こっちも一段落ついたから、待機所に戻るよ。ロングアーチ、何か買って帰ろうか？》」

「《こちらロングアーチ。ありがたいことに夕食は民間協力者のみなさんが用意してくれるそうや》」

「《了解。じゃあ、スターズのみんなを車で拾って帰るね》」

「《ありがと、フェイト隊長》」

なのはは、フェイトとの念話が終わった時
少し考えていた

「うん、でも手ぶらで戻るのも何かなあ？」

そう言うとなのはは自分の携帯電話を取り出してある番号にかける

「あっ、お母さん？なのはです」

「えっ!？」

「にははは。お仕事で近くまで来てて

・・・そうなの・・・うん、ホントすぐ近く。

でね、現場のみんなにうちのケーキ、差し入れでもって行ってあげたいから・・・」

ティアナとユウキは念話で話していたなどと電話をしているのはから少しだけ離れた場所でポカンとしていたスバルと

ティアナとユウキは念話で話していた

「《なのはさんの・・・お母さん》」

「《それは・・・存在はしてて当たり前なんだけど・・・》」

「《なんか・・・お母さんがいるとな・・・》」

3人でやりとりをしていると、なのはさんの電話が終わる。

なのははスバルとティアナとユウキの方を向いた

「さて、ちょっと寄り道」

「はいです」

「あの、今お店って……」

「そうだよ。うち、喫茶店なの」

「喫茶翠屋！お洒落で美味しいお店ですよ」

「「「ええ!?!」」」

* * *

「お母さん、ただいまーっ」

「なのは、おかえり」

「《お母さん若っ!?!》」

「《ホントだ……》」

「《なのはさん確か19歳だったな、それなのに
お母さんが若いなんておかしくないか?》」

「《…確かに》」

「《私も同感……》」

「あつ、この子たち、私たちの生徒！」

「おつ、こんにちは。いらっしやい」

「あつ、はい！」

「こんにちは」

「おじゃまします」

「ケーキは、今箱詰めしてるから」

「うん。フェイトちゃんと待ち合わせなんだけど、いても平気？」

「もちろん！」

「うん」

「ああ、コーヒーと紅茶もポットに入れといたからな。持って行ってあげてな」

「ありがとうございます」

「お茶でも飲んで、ゆっくりして行ってね。えつと……」

「あつ……スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

「ユウキ・ルナミスです」

「スバルちゃんに、ティアナちゃん、ユウキくん！」

「3人とも、コーヒーとか紅茶とか、いけるかい？」

「あつ、はい」

「どっちも好きです」

「できればコーヒーにしてほしいんですけど…」

ユウキは紅茶よりもコーヒーのほうが好みなのだ。

「分かった、じゃあユウキくんには

特別に新作のコーヒーを飲ませてあげるよ」

「本当ですか!？」

「新作だからね

後、このコーヒーには

名前が決めていなくてね…

よかったら名前を決めてくれないか？」

「えっ、いいんですか？」

「ああ、名前が思いつかなくてね…

どうだ？」

「…分かりました、じゃあ、ありがたく新作のコーヒーを頂きます」

「リンちゃんはアーモンドココアよね」

「はいです」

「あつ、スバル、ティアナ、ユウキ、おいで」

「「「はい！」「」」

スバルとティアナとユウキを呼んでテーブルに座らせる

「スバルちゃんとティアナちゃんには、お仕事
大変だろうから元気が出るミルクティーね」

「はい」

「ありがとうございます」

「そして、ユウキくんには、新作のコーヒーだ」

「ありがとうございます」

「しかし3人とも……うちのなのは先生としてはどうだい？
お父さん、向こうの仕事のことはどうもよく分からなくてなあ」

「あつ、その、凄くいい先生で」

「局でも有名で、若い子たちの憧れです」

「後、優しいところとか」

「ううっっ……／＼／」

あまりに恥ずかしくてなのは俯いてしまった

「そういえば、お兄ちゃんと忍さんは元気？」

「うん、この間1度帰ってきたよ。またドイツに戻っちゃったけど」

「そっかぁ……2人とも、お仕事忙しいもんね」

「メールとかしてるんだろ？」

「うん」

「《……なのはさんが普通の女の子に見える……》」

「《うん……》」

「《確かにな……》」

「おっ、そっだ！みんな、クッキー食べるか？これが自慢の新作で
なあ」

「あっ、ど、ど、どおかまいなく……」

「あ、はい……」

「あくでも、美味しそうです」

「じゃあ、ラインに一個」

「えっへへ、いただきます」

その後ユウキは新作のコーヒーを飲んでみると

凄くおいしくて、感動した…

名前はブルーアイズマウンテンに決めたのだった

なのはさんのお父さんはこの名前が気に入ってくれて

お礼に、新作コーヒーのコーヒー豆をたくさん貰いました。

帰ったらもう一度飲もうと考えています

第8話 出張任務DA-12（後書き）

ユウキ「うーん、さすがブルーアイズマウンテン。」

フレイス「まさか、遊戯王のネタがここで使用するとは…」

ティアナ「確かにね…」

フレイス「さて、ここでお知らせです。」

スバル「お知らせ？」

フレイス「そう、現在ゆりかごのことを考えていて…」

デュエルをしてもいいかなって考えているのだよ。

そこで、ここでアンケートを…」

ティアナ「絶対に無理ね」

フレイス「ちょっと、どどういう意味？」

ティアナ「前回1人しか答えていないから、

また無視されるんじゃないの？」

フレイス「……………アンケートの内容は、

ゆりかごでデュエルをしてもいいのか

聞くだけです。

もし、ゆりかごでデュエルをしてもいいなら1

やめたほうがいいと思うなら2を選択してください。」

ティアナ「感想書いてなかったら、自分で決めるの？」

フレイス「…そのつもりです。」

ティアナ「まあ、こんな作者さんですがどうかアンケートのご協力をしてくださいお願いします」

スバル「後、私たちに遊戯王カードをプレゼントすれば

デュエルディスク無しで発動するかもしれないよ。」

フレイス「まあ、発動するか私が決めますがね…

それに、スバルいたんだ。」

スバル「いたよー!!」

フレイス「とりあえず、感想を書いてくれたら

更新スピードが上がるかもしれない…」

ティアナ「では、また更新する日まで!!」

ユウキ「うーん、さすが、ブルーアイズ…」

フレイス「いつまで飲んでるんじゃない!!」

ユウキ「グハツ!？」 L P O

第？話 出張任務D A - ！ 3 (前書き)

今回の話も短いです……

ではどじろー！

第？話 出張任務DA-！3

待機所

翠屋でお茶を飲んでしばらくたってフェイトさんたちが
車で迎えに来てくれて俺たちは待機所へと戻ってきた

「ふう……運転お疲れ、フェイトちゃん」

「うん、それとユウキ大丈夫？」

「は、はい酔い止めの薬を飲んだので大丈夫です」

「そう、ならいいけど」

「あれ？なんか、ちょっといい匂いが……」

「キョククルー」

「うん……」

「はやてたちがもう晩御飯の用意を始めているのかな？」

フェイトさんがそう呟いた時

「ページの方から俺たちの方に駆け寄ってくる影があった

「おかえりー！」

「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

「すずかちゃん！」

「すずか！」

「にやはは。久しぶり〜」

「すずか、元気だった？」

「うん、写真とメールばかりで声聞けてなかったもんね」

「だよね〜」

「すずか、大学の方は相変わらず？」

「勉強大変」

その後、なのはたちはしばらく話していた

Sideフォワード

「《ティア、ユウキ、やっぱり、隊長さんたちが普通の女の子だよ・
・・・》」

「《ああ、確かな今までのなのはさんとは大違いだよ…》」

「《同感……どうよ、ライトニング的には》」

「《あの、僕的にはなのはさんもフェイトさんも普通の女性ですの
で……》」

「《そつか。エリオくん、私たちの中だと一番昔からなのはさんた
ちのこと知ってるんだもんね》」

そう話していると先ほど自分たちが来た方から1台の車が敷地内へ
入ってきた。

「はあい」

「みんな、お仕事してるかあ？」

「お姉ちゃんズ参上！」

車から降りてきたのはエイミー、アルフ、そして美由紀が出てきた。

3人の登場にフォワード陣は驚く。

「エイミーさん？」

「アルフ！」

「それに……美由紀さん!？」

「さっき別れたばかりなのに？」

「どうしてですか？」

「いやー、エイミィがなのは達と合流するって言うから、あたしもちょうどシフトの合間だったし」

「そうだったんですか・・・」

「エリオ、キャロ、元気だった？」

エイミィがエリオとキャロに近づき、話しかける。

「はい！」

二人は元気よく返事をする。

「二人とも、ちょっと背伸びたか？」

「ははっ、どうだろうっ？」

「えへ、少し伸びたかも？」

「ウンウン！」

のほほんと家族的な会話をする5人を見ている横で

スバルとティアナとユウキは念話である2人の人物について話していた

「《うん・・・誰かの使い魔かな？》」

「《犬耳としつぽ……わんこ素体?》」

「《見た目10歳くらいちっちゃくて可愛い》」

「《確かにそうだな…》」

そう念話で話しているとアリサ達と話を終えたフェイトが走ってきた
もちろんそれはアルフも見ていた

「アルフー!」

「フェイト フェイトフェイト」

「アルフ、元気そうだね」

「元気!」

「いや、アルフにはお世話になりっぱなしでね。うちの子たちのお
世話と遊び相手」

「そうですか」

「ハラオウン家の使い魔だからな、チビ達の世話楽しいし」

「あれ?なのはちゃん、今日はユーノくんと一緒じゃないの?」

「はい、機動六課でのお仕事ですので」

「あっ、エイミィ、カレルとリエラは？」

「母さんが見てくれてる。連れてこようかと思ったんだけど、そろそろおねむの時間だしね」

「そう」

「ん？この音…」

「この匂い…」

「なんだ…？」

エイミィやアルフたちと話している時にその場にいた全員が察知したもの

それはジューっと何が焼ける音ととても食欲を誘う匂いだった

全員で湖の方へと向かっていくと……

コテージの外にテーブルや、バーベキューセットを出し、

その中の鉄板の前で、はやては料理をしていた。

「おっ！みんな、おかえり〜」

「おかえりなさい！」

「……………八神部隊長！？」「……………」

「部隊長自ら鉄板焼きを！？」

「そんなの、私たちがやります！」

「あゝいやまあ、待ち時間あったし……お料理はもともと趣味なんよ」

「はやく隊長の料理はギガウマだぞ！ありがたく頂け」

「……………はい！」「……………」

「あのヴィータ副隊長」

「なんだユウキ？」

「気になっていたんですが……ギガウマってなんですか？」

「ギガウマはギガウマだ」

「……あつ、そうですか（なんだそんな理由で片付けていいのか？）」

「シャマル。お前は手を出していないだろうな？」

シグナムははやての隣にいるシャマルに確認をとった。

「あー！シグナムひどーい！」

「ちょっと手伝ってくれたよな？材料切りとか」

「はい！」

「まあ…切るだけなら…」

「大丈夫だな」

ヴィータ副隊長、シグナム副隊長が同時に安心したと溜息を吐く
それを見たスバルがシャルルへとあることを質問した

「シャルル先生…もしかして…」

「違うもん！シャルル先生、お料理下手なんかじゃないもん！」

「じゃあ料理を作ってくださいよシャルル先生」

ユウキの提案にフォワード陣ではなく、隊長達が驚愕する

「ユウキ！？いきなり何を言い出すんだ？バカな真似はよせ！」

「そうだ、シャルルの料理を食べると死んでしまっただぞ…！」

「でも、おいしいかもしれない可能性があると思うので…」

ユウキは未来のことを知っているのにもかかわらず、

シャマル先生が料理が下手だという記憶が抜けているのだ

そんな中シャマルが1つの料理を持ってきた

それはシャマルが作った焼きそばだ。

「私の料理ここにあるけど…」

「じゃあそれ食べていいですか？」

「もちろん、さあ！召し上がれ！」

「待てっ！？ユウキ食べるな!？」

シグナム副隊長の忠告を無視してユウキはシャマル先生の料理を食
べた直後…

ユウキは、気絶をした

この様子を見ていた隊長達はというと…

「やはりシャマルの料理の餌食になってしまったか…」

「シャマル先生、ユウキに何か恨みがあるんですか!？」

「ち、違います!！」

第？話 出張任務DA-13（後書き）

ユウキ「……………」。

フレイス「気絶しているな…。」

ティアナ「しょうがないわよ、シャマル先生の料理を食べたら気絶するこ
とが十分に分かったわ。」

フレイス「まあ、そうだな…でも出てこなくてよかったな。」

スバル「えっ？どういうこと？」

フレイス「実際の設定では、気絶したとき、暴走するんだが…。」

スバル「暴走!？」

ティアナ「そんなの聞いていないわよ!？」

フレイス「まあ今回は無かったからいいけど、次のオリジナル話に
でてくるかもしれないよ。」

ティアナ「…絶対に、気絶をさせないようにしないと。」

スバル「うん。」

フレイス「とりあえず、アンケートはまだ続いています！

感想どんどん送ってください!!

では、また更新する日まで!!」

第10話 出張任務DA-14（前書き）

今回は、大丈夫なのか、すごく心配です…

では、じじい…！

第10話 出張任務DA-14

『うちそうさまあー!!』

機動六課メンバーと友人、親族は親睦を深めつつ食事を済ませた。

ちなみにユウキは、シャマルの料理を食べ気絶した後

目覚めたのだがほとんど料理が残っていなかった…

だが隊長たちはそれらのことを想定済みだったようで、後で軽食を別に作っていた。

ユウキは”よかった…”と言って軽食を食べた

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

「……はい!」「……」

「まあ監視と言ってもデバイスを身につけてればそのまま反応を確認できるし」

「最近は本当に便利だね」

「技術の進歩です!」

「あ〜でも、ただここお風呂ないし、湖で水浴びって季節でもないし……」

「どじするんですか？」

「そうすると、やっぱり」

「あそこですかね」

「あそこでしょう」

フォワードメンバーは頭を傾げる

あそことは一体何なのか？

「それでは、六課一同、着替えを用意して出発準備！」

「これより、市内のスーパー銭湯へ向かいます」

「スーパー？」

「銭湯？」

海鳴スパラクーア？

「はい、いらつしやいませー。海鳴スパラクーア？へようこそ・・・
・・・団体様ですかあ？」

営業スマイルの受付のお姉さんが、はやて達ご一行にそう尋ねてく

る。

後ろではティアナ達が、未だに何が何だかという表情をしている。

「えっと、大人13人と」

「子供4人です」

「エリオとキャラロと……」

「私とアルフです」

「うん！」

フェイトが大人の数を数え、なのはがちびっこ達の数を伝える。

まあ、普通に人数を伝えて終わればいいだけなのだが、空気が読めないのか、

はたまた天然なのかワカラナイ犬っ子、スバルが余計なひと言を口にしてしまう。

「えっと、ヴィータ副隊長は……」

「あたしは大人だ！」

まあ、怒鳴られて当然だろう。

ヴィータとしては、

ある意味この施設に来るときに言われたくないセリフのナンバーワンを

あっけらかんと口にされたのだから。

「あ……はい！では、こちらへどうぞー！」

「お会計しとくから、さき行つてな」

「はい！」

受付のお姉さんの誘導に従い、会計をするはやて以外のメンバーは、それぞれ男湯と女湯の暖簾のある方へと別れていく。

「よかつた、ちゃんと男女別だ」

いつかの記憶が蘇ったのが、男・女と分けられた暖簾を見てホツとしているエリオ。

が、神は言っている。『このままでは終わらない』と……

「広いお風呂だつて。楽しみだね、エリオくん！」

「あつ、うん、そうだね。スバルさんやティアさんたちと楽しんできて」

弾けるような笑顔を向けてくるキャロに、至極普通の返事を返すエリオ。

だが、この後に降りかかる悪夢（我々の業界ではご褒美です）に、彼は戦慄することになる。

「えっ、エリオくんは？」

「えっ！？ば、僕は一応、男の子だし……／／／」

どうやら、キャロはまたしてもエリオを理想郷へと誘つつもりらし

アウトアロン

い。
彼女からすれば好意以外の何物でもないのだが、
エリオにとっては精神的なダメージが多き拷問のような苦行にも
見えてしまうのだろう。

「んー…でも、ほら、あれ！」

渋るエリオを何とか女湯へ連れて行こうと
キャロはある方向を指差す。それにつられて、エリオはそちらに目
をやる。

そこには注意書きなるものがあつた。

「注意書き？えつと…女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみ
でお願いします」

「フフツ、エリオ君10歳！」

注意書きをそのまま読むエリオ。隣のキャロは、嬉しそうな顔でエ
リオの年齢を口にする。

11歳以下……………

つまりは10歳も含まれるということだ。

「え！？あ…」

「うん、せっかくだし、一緒に入ろうよ」

「フェイトさん！」

退路を断たれたエリオに、悪意ゼロのフェイトの言葉が飛んでくる。彼女の保護者としての溢れんばかりの愛情は、こんな時でも全開である。

「い・・・あ・・・い、いや、あ、あのですね・・・」

それはやっぱり、スバルさんとか、隊長達とかアリサさん達もいますし!」

エリオは最後の武器である、ティアナやアリサ達の存在を盾にこの場をやり過ごそうとするが……

「別に私は構わないけど?」

「てゆうか、前から、頭洗ってあげようかとか言ってるじゃない」

「う・・・」

盾は槍によって貫かれた。

この場にいる女性たちにとって、エリオくらいの子供が同じ風呂に入る事など、

さほど驚くことでもないのだ。

「私等もいいわよ。ね?」

「うん」

「いいんじゃない?仲良く入れば?」

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は久しぶりだし・・・入りたい

なあ……」

「あ、あのその……えと……」

退路、完全に断絶。

エリオは顔を真っ赤にしながら、

二の句を続けようとするが、

まだこの世に生を受けて10年の子供がうまい逃げ口を考え付くはずもない。

「（やれやれ、仕方ないかな……このままじゃちょっと可哀想だし……）」

ユウキは困り切ったエリオの様子を見て、助け舟を出した。

「まあまあ、ここは一つ、俺とエリオの兄弟の仲を深めるために

一緒に風呂に入ることにするよ。俺一人だと寂しいし……いいだろエリオ？」

「は、はい……！」

エリオは助かったといわんばかりに笑顔を見せる。

救世主、この時エリオの目にはユウキの背中に羽が見えた。こう、神々しい感じのやつが。

「多分俺達の方が先に上がると思うので、この辺で待ってます。それじゃあ、失礼します」

ユウキとエリオは男湯に入ってしまった。

呼び止められると厄介なので、エリオが若干早歩きだったのは、まあ仕方ないことだろう。

「・・・行っちゃった」

「人数分、ロッカー確保できたわよー。入りましょ」

「ハイ」

男二人が行ってしまったと、『仕方ないわね』

という感じでアリサが確保したロッカーの方に女性陣を誘導する。キヤロが残念そうな表情で呟くが、こうなっては仕方ないだろう。

アリサの声に続き、フェイト達は女湯へと入っていった。だが・・・

「・・・えーつと・・・」

キヤロは先程の注意書きを見ながら、何かを企んでいた。純粋な好意が生み出す悲劇（私達からすればご褒美）はまだ始まったもいなかった……

* * *

Sideユウキ

「…よし終わったぞエリオ」

「ありがとうございます兄さん」

「今度は俺が洗うから先に浸かってな」

ユウキはエリオの体を洗ったので

タオルと石鹸を用意して自分の体を洗おうとした

「あつ、今度は僕が背中を洗ってあげるよ兄さん」

「えっ、いいのか？」

「もちろんです!!!」

「じゃあ、やってもらおうか、頼んだぜ」

「はい!!!」

そう言っつてエリオはユウキの体をゴシゴシと洗いはじめる

「痛くないですか？」

「大丈夫だ、問題ない今の強さでこのまま頼む」

「はい、分かりました!」

その後、キャロが入ってきてエリオは女湯へと連行されてしまった

許せエリオ…

そんな中ユウキは、露天風呂の案内板が目にとまった

「露天風呂か、懐かしいな…久しぶりに行ってくるか」

ユウキは入り口へドアを開け入っていった

Side ティアナ

「ちょっとスバル、走り回らないで！

他の人に迷惑になるでしょう！」

「でも、ティア周りに人がいないよ」

「……うっさいわね、マナーを守りなさい！！」

「は、はい！！」

ティアナの怒鳴り声でスバルは、どこかへ行ってしまった

「ったく、スバルは常識があるのか分からないわ…ん？」

ティアナは露天風呂の案内板が目にとまった

「露天風呂か……入ってみようかしら」

ティアナは、露天風呂へ行くことになったが

1つだけ見逃している2文字があった

そう…混合と言う文字が…

* * * *

「ふう、やっぱり露天風呂は最高だな」

一方ユウキはというと夜空を見て景色を楽しんでいた

「ここが、露天風呂ね…」

「……えっ、（さっきティアの声が聞こえたんだが…まさか）」

ユウキは後ろを振り向くと…ティアナがタオルを体に巻いている姿を見た

「えっ、ユウキ!？」

「ティア!？」

お互いに驚愕するが、先に口を開いたのはティアナだ

「どうしてあんたがいるのよ!？」

「露天風呂に入りたかったからだ…」

……それにティアがこの露天風呂は混合って知っていた？」

「えっ、そうなの!？」

「案内板の注意書きのところに書いてあったのだが…
その様子では知らなかったようだな」

「うっ／＼／」

「とりあえず、今は風呂にはいったらどうだ？
さすがに、今の格好は…」

「！……！」

ティアナ自分の姿を思いだし、素早く湯船につかるが…

あまりの恥ずかしさにティアナの顔は真っ赤になり、ユウキも同じように顔を赤くしていた

「……見た？」

「……ごめんなさい」

「ユウキ…後で覚えてなさいよ…」

「うっ／＼」

気まずい空気になってしまったが

ユウキはあることを思い出した

「なあ、ティアナ」

「何よ？」

「……最近また悩みを溜めてるな？」

ユウキはティアナのことを見ており最近悩んでいる姿が多くなる」とから

ティアナに話したのだ。

「うっ……。それがなによ。あんたには関係ないでしょう?」

「…一人で解決することは仲間を信じていないということになるんだ
今、ティアは一人で解決しようと考えている違うか?」

「……………」

ユウキの言葉にティアナは黙ってしまった

「ティア、人に聞くことは、決して恥なんかじゃないんだ。
相談することで解決できる手助けができるかもしれない…」

「……………ユウキ……………」

「だから俺は…ティアの本当の気持ちを知りたいんだ」

ユウキがそういうと…ティアナは

「…分かった、じゃあユウキ私の悩み聞いてくれる?」

「ああ」

ユウキはティアナの悩みを聞いた

* * * *

「…つまりティアは劣等感を抱いていたということ？」

「うん」

ティアナから聞かされた内容は、ユウキがアニメで見た、

ホテル・アグスタの回で彼女が独白しているシーンの内容とほぼ同じだった。

つまりは、自分の実力に自信が持てない。この部隊に、

自分みたいな凡人は相応しくないんじゃないか……という悩みだった

そしてユウキはティアナに向けてこう話した

「ティア、確かお前の夢は執務官になりたいんだっただよな……」

ユウキの言葉にティアナは頷いた

「そのきっかけは、お前の兄さんの魔法は役立たずではない事を証明する

ためだったな。」

「……………ユウキ、それと一体何の関係があるのよ」

「正直言つぞ、お前の兄さんは無駄死にじゃねえか」

「なん……………です、って……………？」

「聞こえなかったか、ならもう一度言ってみよう
お前の兄さんは無駄死にだって言ったんだよ」

「…違う、私の兄さんは無駄死になんかじゃない!!
だから、だから!」

「兄さんの夢だった執務官になると。

兄さんの魔法は役立たずではない事を証明すると
決めたからだろ?」

「……………そうよ」

「兄さんの無念を晴らせるのは、ティア、お前しかいない。
そのお前が諦めちまったら、それこそ無駄死にだろうが」

「それは……………」

「だったら、才能がないだの力がないだのと泣き言言ってる場合じゃ
ねえだろ」

それに…………お前の誰にも負けない夢ってのは、
才能がないから凡人だからなんていう理由で諦め切れるもんなのか?
」

ユウキの言葉にティアナは黙って聞くしかなかった…

「後、ティア、お前は勘違いをしている」

「勘、違い……………?」

「お前は、一人で戦ってんのか？」

視線を上げ、上目遣いにユウキを見たティアナは、その言葉に硬直する。

「俺達、仲間がいるだろ？」

「仲、間……？」

「ああ……だから

ティアにも俺達を頼って欲しいんだ！！

お前は一人で戦っているんじゃない！！」

「……………ユウキ」

「…ティアの悩みを聞いてな

1つだけ間違っていることがある」

「…何？」

「ティアは凡人じゃないということだ」

ユウキの言葉にティアナは驚愕する

「どうして……」

「ティアには、冷静な判断力、広い視野、場の流れを引き寄せる諦めない強い意志があるんだ

決してティアは凡人では無いんだ！」

ユウキがそういうと、ティアナの目から涙が流れた

「だから、ティアお前は一人で戦っているんじゃない
仲間と一緒に戦っているんだ…それだけは
忘れないでくれ」

「……ユウキ……」

ティアナは涙を拭き、こう言った

「……ありがとう」

「別にいいさ、ティアのことが心配だったから……」

「ふふっ、そういってほしいわ」

「ったく…俺はもう出るぞ」

ユウキは湯船から出ようと、すると…

ティアナがユウキの腕にしがみついた

「えっ、ティア？」

「……お願いユウキ、もう少しこのままいて」

「（こ、これって、ティアナフラグなのか？）」

まさにそのとおりである

BYフレイス

「ユウキ、お願いちょっと目を閉じてくれる？」

「えっ、どうして？」

「いいから、早くして。」

「…分かった」

ユウキはティアナに言われたとおりに目を閉じろうとした…

その時！！

”ガラガラ”

「わあ、ここが露天風呂か！」

なんと入ってきたのは、スバルであった

「あっ、ティア、ユウキ、どうしているの!？」

「えっ、それは、「スバル!？」」

ティアナはスバルに向けて殺気を放っていた

「…あんただったら、いつも大事なところで…。」

「（……やばい、ここは逃げるしかない……）」

ユウキは急いで男湯へと逃げた

「邪魔しないで……！」

「えええええ！？ティア、私は何も……！」

「問答無用……！」

その後、露天風呂で悲鳴をあげた声があったような……

第10話 出張任務DA-14（後書き）

フレイス「まさか、ティアナフラグを立てるとは…。」

はやて「そうやな。」

フレイス「！？えっ、どうしてもはやてがいるの？」

はやて「今、ティアナとスバルとユウキは今いないんやろ？」

フレイス「…まさか、その代理か？」

はやて「もちろんや！！」

フレイス「まあ、別にいいけど…前の話は準ヒロインだからな。」

はやて「じゃあ、私も準レギュラーにして！！！」

フレイス「…考えておく。」

はやて「さて、次の話で出張任務は終わりや」

フレイス「後、ホテル・アグスタの話はまだできていないのですが…

もうしばらくお待ちください…申し訳ございません」

はやて「では、また更新する日まで！！！」

第11話 出張任務DA-15（前書き）

前書き

これで、出張任務は終わりです

後、誤字、指摘等があればよろしくお願いします

では、ぜひぜひご覧ください！

第11話 出張任務DA-15

風呂から上がると

ユウキは自動販売機で、コーヒー牛乳を買って
飲んでいた

「ふう…やっぱりコーヒー牛乳が一番だな。」

ユウキがそう言っていると、エリオがこっちにやってきた
どうやら風呂から上がってきたようだ

「兄……さん。」

「だ、大丈夫か？」

「ひ、ひどい目に会いました……」

「な、何と言うか、よく耐えたな……エリオ何か飲むか？」

「い、いただきます……」

ユウキは、自動販売機にお金を入れて
オレンジジュースをエリオに渡した

その後、キヤロも来た

「お兄ちゃん！先に出てたんだ」

「ゆっくりできたか？」

「うん、エリオくんと一緒に入って満足しました」

「そうか、隊長達やみんなはどうした？」

「もうすぐ……あっ、来ました！！」

ユウキの視線の先には

八神部隊長を先頭にみんながこっちに向かってきてた

「ふい〜なんだかすっかり堪能してしまいましたあ」

「日ごろの訓練の疲れも少しは取れたでしょ」

「はい」

そうティアナが言った直後……キヤロのケリュケイオンと

シヤマル先生のクラールヴィントがロストロギアの反応をキャッチした

「あ！ケリユケイオンが！」

「クラールヴェイントにも反応！リインちゃん！」

「エリアスキャン！ロストログア、反応キャッチ！」

リインがすぐに魔力反応があつた場所を探す

ロストログアが見つかったということで六課メンバー全員が気を引き締める

「あ、お仕事だね」

「みんな、頑張ってきて」

「フェイト、エリオ、キャラ、行ってこいよ？」

「はいっ！」「」

エイミィさんとアルフさんの言葉に、

エリオとキャラは頷いて返した。

「先にコテージに戻ってるね」

「うん、みんな、しっかりね！」

「」「」「はい！」「」「」

そしてなのはさんがフォワード5人に指示を出していく

「ティアナ。シャマル先生とリイン、はやて隊長にオブティックハイド」

「はい！」

「空に上がって結界内に閉じ込めるわ！中で捕まえて！」

「……………はい！」「……………」

「ほんなら、スターズとライトニング、出動や！」

『了解！！』

* * * * *

なのはさんからの指示で、今回の作戦の詳しい目標が分かった。

なんでも、高価なロストロギアらしく、一切傷をつけるな、とのこと。

今回も隊長たちはサポートに回るらしく、基本的な戦闘はフォワードの仕事らしい。

そんな中、ユウキはため息をついていた。

「はあ、傷をつけるなといってもさ、俺大丈夫かな……………」

「えっ、どっつてですか？」

「俺は、モンスターを召喚したり、魔法、罠を使用することは知っているだろ？」

これで、傷をつけたらやばいっと思っただけ……」

「ああ、そういうことね。」

「でも、みんなで力を合わせれば何とかなれると思うから、頑張っただけ……！」

「はい……！」

『第一戦闘空間、河川敷グラウンドに固定』

『スターズF、ライトニングF、エンゲージっ……！』

目標ロストログアが発見された場所にたどり着く

河川敷のグラウンドと呼ばれた、そこには

ポヨヨーン、ポヨオーン、ポヨヨオーン

かなりの数のスライムがいつぱいいた

「何、これ……？」

「ぶによぶによスライム？」

「ちょっと可愛い……」

「これ、ドラunksで出てくる
スライムなのか!？」

「違うと思いますけど……」

「これ、全部本体ですか？」

『危険を感じると複数に分裂してダミー体を作って増殖する
せやけど、本体は一つや』

八神部隊長の情報にユウキは、

「えっ、スライム8体が合体してキングスライムになるんじゃ……」

「ユウキ、いいかげんにボケるのをやめなさい!！」

「……はい」

今は任務中なので、ユウキは真面目に隊長達の話聞く

「本体を封印すれば、ダミーは全て消えます。」

「放っておけば、本体から離れたダミーが街中に広がる恐れがある。」

「空戦チームは広がったダミーを回収する。そっちはリンのサ
ポートで、お前達がやってみせろ」

「素早く考えて、素早く動く！」

「練習どおりにやればいける筈だよ！」

「くくくくはい！」「くくく」

そしてフォワードたちはロストロギアと対峙する

「うううつりゃ！……ありゃあ！？」

「せえ！だああああ！……ッ！？」

リボルバーナックルとストラダーダで攻撃をするスバルとエリオ

だが、ロストロギアには全くダメージが無く、ロストロギアはぴよんぴよん飛んでいた

「打撃無効！？」

「斬撃も無効です！」

一方ティアナとキャロも魔力弾とフリードの火炎で攻撃しているがダメージが無かった

「こっちの火炎と通常魔力弾も効果なし！」

「だったら、こいつでどうだ、《BF - 鉄鎖のフェーン》を召喚！」

《BF - 鉄鎖のフェーン》

効果モンスター

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻 500 / 守 800

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。

「このカードは相手プレイヤーにダイレクトアタックすることが出来る!!!」

行けフェーン！」

ユウキの指示でフェーンはロストロギアに向けて攻撃を仕掛ける

だが、フェーンの攻撃でもダメージを与えることが出来なかった

「何、ダメージを与えることができないだと!?!」

「さすがロストロギア……見た目は可愛いですが、侮れません!」

そう言っている間にどんどんロストロギアはびよんびよんはねて増

えていく

増えすぎれば本体を見つげにくくなる、

攻撃をしてこないとはいえ、かなり厄介な敵でもある

「エリオ、あれでまとめていけない？ ストラーダを地面に刺して電気バリバリーの奴！」

「やってみますか？」

「電気で止まるかわかんないし、

無傷でつて指示よ？ ダメージコントロールをし辛い攻撃はなし！

ユウキとスバルとエリオはこいつらがこれ以上広がらないように止めてて！

私とキャラロが本体を特定して、封印する！」

「はい！」

「了解した、ティア頼んだぜ」

「まかせなさい！」

* * * *

ティアナが1体ずつに魔力弾を撃ち込んで反応を見ていた

そして…

「反応が違う……これが本体」

「捕まえます。錬鉄召喚！アルケミック・チェーン！」

本体を見つけ、キャラがすぐさま一番最初の訓練の時に使用した
無機物操作魔法を付与した鎖を召喚させる

だが…ロストロギアは危険を感じ

バリアを展開した

「えっ！？バリア展開！？」

「意外と……出力が……」

ロストロギアの展開したバリアにアルケミック・チェーンを阻まれ、
キャラも押され始める

「だったら、そのバリアを破壊してやるぜ！
ブラックフェザの手札より《BF - 黒槍のブラスト》

ブラックフェザースヤリ
《BF - 疾風のゲイル》を特殊召喚だ！

ブラックフェザースヤリ
《BF - 黒槍のブラスト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

自分フィールド上に「BF - 黒槍のブラスト」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ブラックフェザースヤリ
《BF - 疾風のゲイル》

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守 400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にす

る事ができる。

「さらに手札から罫カード、《デルタ・クロウ・アンチ・リバーズ》を発動！」

《デルタ・クロウ・アンチ・リバーズ》
通常罨

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが
表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。

相手フィールド上にセットされた魔法・罨カードを全て破壊する。
また、自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが
3体存在する場合、このカードは手札から発動する事ができる。

「こいつは自分フィールド上に「BF」が

3体存在する場合、手札から発動する事ができる！

相手フィールド上の伏せカード、つまりバリアを破壊するという

ことだ！

ブラックフェザー
行けBF！！」

ユウキのBF3体は

ロストロギアの張ったバリアを粉々に破壊した

「バリアを破壊した、ティアア！」

ユウキの言葉にティアアは頷いた

「クロスミラージュ！バレットF！」

『Lord cartridge』

「我が乞うは捕縛の檻、流星の射手の弾丸に封印の力を！」

『Get Set.』

キャロによる封印補助の魔法が発動し、ティアナの作った弾丸が大きくなる

「シーリング！」

「シューーーット！！」

打ち出された封印用の弾丸がロストロギア本体に命中して周囲のダメージ体が消えていった

「やったな、ティア」

「そ、そうね…／＼／」

「あれ、ティアどうして顔が赤くなっているの？」

「う、うっさい…！」

その後、キャラがロストロギアを封印

被害も無く今回の出張任務は無事終了した。

そして六課メンバーはコテージへと戻っていった

コテージ

「そっか……もう、帰っちゃうんだ」

「一晩くらい泊ってけばいいのに……って、わけにもいかないのか」

「じゅめんね」

「今度は休暇の時に遊びに来るよ」

「うん、待ってるからね」

今度はうちにも遊びにおいで。カレルとリエラも待っているから」

「あたしもな」

「はい」

一方、はやては聖王教会に居るカリムと通信をしていた

「封印したロストログは今夜の内にシグナムがそっちに運んでいくから」

『お疲れ様、はやて。今回の迅速な解決、部隊にとっては順調な実績よ』

『騎士シグナム、私が途中までお迎えに上がりますね』

「はい、ありがとうございます、シスターシャツハ」

『はやても、少しくらい寄り道してきてもいいのよ？ 行きたい場所とか、あるんじゃないの？』

「別に来たくなったらいつでも来れるし、友達にも会えた・・・私の帰る場所は私たちの部隊、機動六課やからな」

『・・・うん』

「ん？ 本局捜査部からメールが来てる・・・」

「わっ、ほんとです」

「スカリエッティに関する調査報告と新しい任務の依頼・・・私とはやてに同報で来てるね」

コテージ内部

コテージ内部の片づけをしているフォワード5人

その中でユウキがご機嫌斜めな顔をしていることに気付いたスバルはユウキに話しかけた

「ユウキ、せっかく任務完了なのになんでご機嫌斜めなの？」

「片付けるのが面倒だからだ」

「えっ、ユウキ片付けるのが好きじゃ……」

「遊戯王カードの整理が好きなだけだ」

「あっそうなんだ……」

「はあ、片付け早く終わらせないと。」

ユウキがため息をした後

なのはさんと、ヴィータ副隊長が現れた

「あっ、みんな。片付け終わったね」

「掃除も……うん、きれいにしてあるな」

「「「「はい」」」」

「今日の連携はいい感じだったよ」

「まだ甘いところも多いがな」

「でも、しっかりやれてた。この調子！」

「「「「ありがとうございます」」」」

「明日も朝から練習だからね、頑張っていこう」

「「「「はい」」」」

そうして機動六課メンバーは

協力者一同に別れを告げて再びミッドチルダへと戻っていった

第11話 出張任務DA-15（後書き）

フレイス「やっと終わったよ…。」

はやて「お疲れ様や。」

ユウキ「……なんで、八神部隊長がいるの!？」

フレイス「ああ、はやては準レギュラーになったから
いるんだが…。」

ユウキ「そ、そんな話聞いていないよ!！」

フレイス「いいんだよ、細かいことは気にするな」

はやて「そうやで、ユウキ。」

ユウキ「……まあいいですけど。」

フレイス「後、次の話はホテル・アグスタ編ですが、まだ調整中です
今週中には更新できるか分かりませんが…
頑張ってみたいと思います!」

ユウキ「後、デュエルはまだ後だからもうしばらく待ってくれ。」

はやて「じゃあ、また更新する日まで!！」

第12話 ホテル・アグスタDAI！（前書き）

皆様、メリークリスマス！！

なんとか、1週間以内に更新する事ができました

では、どうぞ！！

第12話 ホテル・アグスタDAI！

ミッドチルダ 首都南東地区

機動六課はホテルアグスタで行われる、オークションの警備に当たることになった。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。」

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者及びレリックの収集者は現状ではこの男」

モニターに映し出されたのは

広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティ

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者……」

ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

「こつちの捜査は主に私が進めることになるけど、みんなも一応覚えておいてね」

「……はい……」

「（でもどうして最初の人に教えてくれなかったんだ？

説明くらいほしいのにな……）」

ユウキは考えても仕方がないかと思いき今回の事件に集中する。

「で今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出て来てしまう可能性が高い

とのことで私たち警備に呼ばれたわけです」

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし

色々油断は禁物だよ」

「現場には昨夜からシグナム副隊長と

ヴィータ副隊長、他数名の隊員が張ってくれてる。」

「私たちは建物の中の警備に回るから、前線は副隊長たちの指示に従ってね」

「「「「はい！」「」「」」

任務の内容を理解し、フォワード5人は同時に答える

そして先ほどからシャマルの足元にある3つケースが気になっていたキャロとユウキは

シヤマル先生に聞いた

「あの、シヤマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って……」

「何ですか？」

「ん？ああ、これ？ふふっ 隊長たちのお仕事着」

ホテル・アグスタ

普段のホテルの受付とは違い、オークション関係者がIDカードを提示しながら受付を済ませていく

「こんにちはわ、機動六課です」

受付にIDを差し出したのは藍色のドレスを着たフェイト、薄い水色のドレスを着たはやて、ピンクと赤のドレスを着たなのはが受付を済ませます。

「会場内の警備はさすがに厳重、と……」

「一般的なトラブルには十分対処できるだろうね」

「外は六課の子たちが固めてるし、入り口には防災用のシャッター

もある。

ガジェットがここまで入ってくることはなさそうやいな

「うん。油断はできないけど、少し安心」

「まあ、どっちにしても私たちの出番は本間の非常時だけや」

Side フェイト

「オークション開始まで、あとどれくらい？」

『Three hours and twenty-seven minutes. (3時間27分です)』

「うん。」

バッグに取り付けたバルディッシュにオークション開始までの時間を聞くと

バルディッシュもすぐさま開始までの時間を返す

その後、フェイトは見回りを続ける

「あれ？」

「先生、どうかしましたか？」

「ああ、いえ……」

* * * *

Side ユウキ

その頃、それぞれ分かれて別の場所を警備していた

スターズのスバルとティアナとユウキは警戒を解かず、念話で話していた

「《でも今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合か》」

「《確かに、全員集合だな…》」

「《そうね…アンタ達は結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長たちのこと》」

「《うん。父さんや母さん、ギン姉から聞いたことくらいだけど…八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が“夜天の書”っていうこと。

副隊長達と、シヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力だってこと。

《で、それにリイン曹長を合わせて6人揃えば無敵の戦力ってこと》

ちやうど横で魔方陣を展開して警戒しているリインを見ながら

ティアナに自分の知っていることを伝える

「《八神部隊長たちの出自とか能力の詳細は特秘事項だから俺はわ

「からんけどな…」

「《そうなんだ…ありがと、スバル、ユウキ》」

「《えっ、ティアが…お礼!?》」

「《何よ!? お礼して悪いの!?》」

「《だって、ティアがお礼をするの久しぶりだから、まさか、ツンデレのデレがたんじゃ…》」

「《うっさい!!! バカスバル!!!》」

「《じゃあ、また後でね、ツンデレティア》」

「《余計なこといわないで!》」

そう言って、スバル達からの念話を途切れる

「…スバルがティアに向けてツンデレティアってキャラ壊れているのか?

まあいいや、一応ティアはいつもどおりだし大丈夫だな。」

* * * *

一方オークション会場から少し離れた場所……

「……あそこか？」

「……」

「お前の探し物は、ここにはないのだろう……？……何か気になるのか？」

「……うん。」

ちょうどそこに1匹の小さな紫色の光を放つ虫が飛んでくる

ルーテシアが人差し指を差し出すとそこに小さな虫は止まる……

「ドクターのおもちゃが、近づいてきてるって」

Side シャマル

「ッ！クラールヴィントのセンサーに反応……シャーリー！」

『はい！……来た来た……来ましたよ！』

『ガジェットドローン、陸戦？型。機影30……35……』

「陸戦？型……2……3……4……」

シグナム副隊長とザフィーラといっしょに警備をしていたが、

ロングアーチからの連絡を受け、エリオ達はシグナム副隊長の指示

に従うことになった。

「エリオ、キャラお前達は上に上がれ。

ティアナの指揮でホテル前に防衛ラインの設置をする」

「はい……！」

「ザフィーラは私と迎撃にでるぞ」

「心得た」

「ザフィーラって喋れたの……」

「びっくり……犬なのに……」

機動六課が始動して今日までほとんど新人たちの前ではしゃべることがなかった

ザフィーラがしゃべったのでエリオとキャラが驚く

いくらむやみに言葉を発しないのが主義とはいえ、

ほとんどペット扱いを受けているので

ザフィーラは本気で自分の立場を考えているのかもしれない

「……守りの要はお前達だ……頼むぞ……」

「うん……」

「頑張る……」

* * * *

「前線各員へ、状況は広域防御戦です。
ロングアーチ1の総合管制と合わせて私、シャマルが現場指揮を
行います」

「スターズ3、了解!!」

「ライティングF、了解!!」

「スターズ4………了解!!」

「スターズ5………了解!!」

シャマルに了解の意思を送った後、

ティアナはアンカーガンから受け継がれている

魔力版アンカーをホテルの窓の打ちこんで見晴らしのいい場所へ

移動するとシャマル先生のいる場所を見上げた。

「シャマル先生！私とユウキに状況をみたいんです！前線のモニタ
ー、貰えませんか？」

『了解。クロスミラージュとイノセンスに直結するわ。クラールヴ
イント、お願いね』

「Ja.」

「《シグナム、ヴィータちゃん》」

「おう、スターズ2とライトニング2……出るぞ、シャーリー!!」

『デバイス、ロック解除。グラーフアイゼン、レヴァンティン、レ
ベル2起動承認』

デバイス機能にロックを掛けていたシステムをシャーリーが六課隊
舎から遠距離で解除をする

「グラーフアイゼン!!」

「レヴァンティン!!」

『『Anfang.』』

騎士甲冑を纏ったヴィータとシグナムはガジェットの迎撃へと向かう

「新人どもの防衛ラインまでは1機たりとも通さねえ。速攻でぶっ
潰す!!」

「お前も案外過保護だな」

「うるせえよ、特にユウキに戦わさせたくねえ。」

「……なぜだ？」

「また今度教える、もうたくさんガジェットいると強力なモンスターが出現するからもう見たくないぜ……」

「（一体どんなモンスターなのだ？）」

そのモンスターはいつか出てきます

BY作者

その頃、ホテルのオークション会場では……

《「フェイトちゃん、主催者さんはなんだって？」

《外の状況は、伝えただけど、お客の避難やオークション中止は困るから、

開始を少し延ばして様子を見るって》」

「《そう……》」

ホテルの外の森林地帯を縫うように進む大量の？型と木々をなぎ倒して進む？型

それをシグナムとヴィータは、見ていた

「私が大型を潰す。ヴィータ、お前は細かいのを叩いてくれ」

「おうよ！行くぞアイゼンー！」

『Jawohl』

になり、
このターン表示形式を変更する事はできない。
また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければなら
ない。

「さあ、私と戦ってもらおうぞー！」

なぜ、シグナムが《バトルマニア》のカードを

デュエルディスク無しで発動できるのか？

それは、ユウキが、”シグナム副隊長に《バトルマニア》のカード
を渡したらどうなるのかな？”

と考え、実際に渡してみたら……

なぜか、デュエルディスク無しで、《バトルマニア》のカードを発
動することができたのだ

この光景を見てユウキは”……何！？”

驚くしかなかったらしい

別の場所ではザフィーラがガジェットと対峙していた

「ここは……通さん！ておおおおおー！！」

地面を割り、鋼の軛を槍のような形状で使用してガジェットを次々
貫いていく

S i d e ユウキ

「副隊長達とザフィーラ、すごい……」

「これで、能力リミッター付きか、でも……」

「シグナム副隊長、《バトルマニア》を発動しているけど
かなりの数ね……」

「確かにな……。」

ユウキはモニターを見ている中デュエルディスクを展開させる

「さてと、準備でも始めますか……。」

- ホテル前、山道 -

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア……』

ガジェットが次々破壊されていく場面をジッと見ていたゼストとルーテシアの元に入る通信

それは機動六課の搜索対象となった広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティだった。

「……ごきげんよう」

「何の用だ……」

ゼストは、ジェイルを睨んでいた…

『冷たいね……近くで状況を見ているんだろ。あのホテルにレリックはなさそうなんだけど、

実験材料として興味深い骨董が一つあるんだ。少しは協力してはくれないかね……

君たちなら、実に造作もないことのはずなんだが……』

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ……」

『ルーテシアはどうだい。頼まれてくれないかな……』

「……いいよ」

『優しいな……ありがとう、今度ぜひ、お茶とお菓子でも奢らせてくれ。』

君のデバイス『アスクレピオス』に、私が欲しい物のデータを送ったよ『

「……うん、じゃ……ごきげんようドクター……」

「ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ」

そうジェイルが告げると通信画面は閉じられる

ジェイルとの通信を終えたルーテシアは自分が来ていたコート脱ぎ、それをゼストに渡した

「いいのか」

「うん、ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのこ
と、そんなに嫌いじゃないから……」

「……そうか」

ゼストにそれだけ告げるとアスケレピオスから

魔力の線が延び、紫のミッドともベルカとも違う召喚用魔方陣が浮
かぶ

「我は乞う……」

S i d e フォワード

「あッ!?!」

「キャロ、どうしたの?」

「近くで、誰かが召喚を使ってる!」

「クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力反応つ
て……」

「お、大きい……」

ロングアーチのセンサーでも魔力反応をキャッチしていた。

S i d e ルーテシア

「小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が命を果たせ。召喚インゼクトツーク」

ルーテシアはアスクレピオスに魔力を注ぎ、召喚呪文を行いインゼクトツークを召喚した

「ミッション……オブジェクトコントロール……いつてらっしやい……気を付けてね……」

召喚虫達は、ガジェットドローンに取り憑き、ホテルの方へ飛んで進行を再開していた。

「はあああああ!!」

?型と対峙していたシグナムはレヴァンティンを構え、?型へと攻撃するがアームで防がれる

「何!?!」

そしてレーザーサイトがシグナムの額に当てられ、それに気付いた2人は後退してシールドを張る

そのシールドで攻撃を防いだシグナムは上空に上がってヴィータと合流した。

ヴィータの方も動きの変わった?型にシュワルベフリーゲンを避け

られていた

「こいつら急に動きが良くなったぞ」

「自動機械の動きじゃないな」

「有人操作に切り替わった……」

そんなシャマルの呟きを肯定するかのように六課隊舎に居るシャリーは

「それがさつき召喚師の魔法？」

「ヴィータ、ラインまで下がれ。向こうに召喚師がいるなら、新人達のもとに回りこまれるかもしれん」

「わ、わかった……でも、《バトルマニア》をたくさん使用するなよ。」

「分かっているさ」

「《ザファイラ……シグナムと合流して……》」

「《心得た》」

スカリエッティ、基地内

「やはりすばらしい。彼女の能力は……」

「極少の召喚虫による無機物自動操作、シュテーレ・ゲネゲン……」

「それも彼女の能力の一端に過ぎないがね……」

・ホテル前、山道・

「ブンターヴィヒト……オブジェクト11機、転送移動」

・ホテル前・

「遠隔召喚……きます!!」

「あれって、召喚魔方陣。」

「召喚ってこんなこともできるの!?!」

「優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです!」

「なるほどな……」

「ユウキ、スバル、エリオ、キャロ、迎撃行くわよ!!」

「」「」「おっ!!」「」

「了解!!」

「（私は、一人じゃない……仲間がいる）」

ティアナは魔方陣を展開させる

その頃、リインは現れた召喚師の元を目指して飛んでいた

「強力な召喚師……私1人じゃ叩けないまでもせめて姿だけでも！」

少しでも情報を得ようとリインは召喚師の元を目指して飛ぶ

だが…

「ッ!？」

前方からやってきたインゼクトにより行く手を阻まれる

体当たりをしてくるインゼクトを避けるリインだが、最後の1体の攻撃でわき腹に怪我をしてしまう

「……銀色の、虫……」

何とか召喚師の姿を目にしようと親交をするリインだがそこにシャリーとシャマル、

『リイン曹長、召喚師の方向にその虫が多数出てきてます!』

「《1人は無理よ!回避して新人たちと合流して!》」

「はいです…」

リインは諦めて引き返していく

S i d e l l e e
ルーテシア

その頃インゼクトの1匹がジェイルの探しているものを発見し、ルーテシアに伝える。

「ドクターの捜し物も見つけた。ガリユーちょっとお願いしている。邪魔な子はインゼクト達が引きつけてくれる。荷物を確保して…」

ルーテシアはガリユーをホテルに飛ばすが…

飛んでいる途中に、ガリユーは苦しみだし消えた。

「!?!」

「どういうことだ!?!」

「ガリユードウしたの?」

ガリユードウに何が起こったのか話を聞くと、ルーテシアは驚愕した

「嘘、バリアが張っているの?」

「バリアだと?そんな反応がないが…」

ゼストはどういうことか考えているときルーテシアはさらに驚きの表情になった

「!?!?そんな、ホテル内にいるインゼクトが消えた…」

「馬鹿な、本当なのか?」

「…今回のミッション失敗だね。」

「……(いったいどんなバリアが張っているのだ?)」

Sideフォワード

「ふう、このカードを発動しているから…なんとか大丈夫だな…。」

ユウキが発動しているのは、《虫除けバリア》

《虫除けバリア》

永續魔法

相手フィールド上に存在する全ての昆虫族モンスターは攻撃宣言で
きない。

このカード効果により、インゼクトは消えてしまい

残りは普通のガジェットのみだ

「クロスファイヤー、シユート！」

ティアナは、残りのガジェットに誘導弾を撃つ。

だが、ガジェットは全て避けられてしまう。

「（インゼクトが消えても、ガジェットは強化されているのか…
やはり、俺がいるからか？）」

ユウキが考えながら、ガジェットに向けて攻撃を仕掛ける

「くらいな！蒼破……一閃！！」

ユウキが放った衝撃波でも、ガジェットは避けられてしまう

「くそ…ぜんぜん当たらない。」

「キャロ！ガジェットの動きを止めて！」

「はい！」

ティアナの指示で、キャロは、アルケミックチェーンを発動する

「アルケミックチェーン！」

三型の一つがキャロの召喚した鎖に捕まり、フリードの炎が焼き尽くす。

「いいぞ、キャロ、もう一回頼む」

「はい！お兄ちゃん！」

次に一型を数体捕縛しようとするが、一気に散開して避けられた。

「ブラスト、ゲイル！！」

ユウキの指示で、ブラストとゲイルは一型に向けて攻撃を仕掛け破壊した

《ブラックフェザースヤリ
BF - 黒槍のブラスト》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1700 / 守 800

自分フィールド上に「BF - 黒槍のブラスト」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

《BF - 疾風のゲイル》
フリックフェゼウバウ

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分に
する事ができる。

「よし!!」

「ガジェットはこれで全滅したわね…」

「ああ、（よかった、どうやらミスショットは阻止したようだな…）

」

ユウキは、本当に良かったと心の中で呟いた。

* * * * *

* オークション会場 *

「お待たせいたしました。まもなく、オークション開催です」

ようやくオークションが始まると言うことで心待ちにしていたお客の拍手がホール内に響く…

そんな中、はやては、ホールの外に出てシャーリーと通信中だった

『前線のおかげでガジェットはほぼ撃墜したんですが……すみません、召喚師の方は追えませんでした』

「うん……味方に被害は出てへんし、任務自体も順調……ええことにしよう」

『近隣の観測隊に通達を出しましたから、移動ルートぐらいは掴めると思います』

シャーリーとルキノとの通信を終え、少し考えるはやて

そんな中、後ろから歩いてくる人物がいた

その足音に気付いたはやてはそちらの方向を向く

歩いてくるのは、ヴェロツサ・アコース、聖王教会騎士カリムの弟だ。

「そこのお嬢さん、オークションはもう始まっているよ。良いのかい？中に入らなくて…」

「ご親切にどうも。背やけど、これでもお仕事ですんで。」

どこかのお気楽査察官と違って、忙しい身なんです」

「ほ、ほう……」

「……えいっ!」

はやては拳をロツサの腹部に入れる

当然、痛くもないロツサは笑いながらはやての頭を撫でた

「あはは またお仕事ほったらかして遊んでるんとちゃいますか？
アコース査察官？」

「酷いなあ。こっちも工作中だよ、はやて」

「ではここで、品物の鑑定と解説をしてくださいます若き考古学者
を紹介したいと思います」

司会者に促され、壇上に姿を現したのはユーノだった

そのユーノが出てきたことに壇上の傍で外の状況を耳元で話している

なのは、フェイトの2人は一切気付いていない

「ミッドチルダ考古学会の学士であり、かの無限書庫の司書長ユーノ・スクライア先生です！」

「「あ！」「」」

「あと、どうもこんにちわ」

挨拶をするユーノにようやく気が付いたのはとフェイト

だがこんな場所で友達と再会できるとは思えなかった

「ユーノくん！」

S i d e ヴ ィ ー タ

「……おし、全機撃墜」

「こっちもだ…召喚師は追えなかったがな」

ガジェット？型を全て撃墜したヴィータと

？型の相手を終えたシグナムとザフィーラが合流した

「だが、いると分かれば対策も練れる……」

「それにしても…新人達、ガジェットを全て撃墜しているとはな…。」

「

「確かにそうだな。(ユウキのBFブラックフェザーのおかげだと思っが…。」「

今回はおまけは無し!!

第12話 ホテル・アグスタDAI！（後書き）

ユウキ「まさか、クリスマスに更新するとは…。」

フレイス「別にいいだろ!？」

ユウキ「まあ、更新できればいいけど。」

スバル「特に私の出番がない…。」

ユウキ「えっ!？」

フレイス「というわけで、今年は更新することはないでしょう。」

ユウキ「…（いきなりの展開についていけない）」

フレイス「次回の更新は、1月に更新する予定です。」

スバル「では、また更新する日まで!!。」

第13話 アンケートDAー！（前書き）

新年あけましておめでとございますー！！

後遅れてしまって申し訳ありませんー！！

今回はオリジナル話ですー！！

では、ござー！！

第13話 アンケートDAー！

ホテル・アグスタの任務から、1週間…

ユウキのカードのおかげで、デュエルシードを守ることに成功

さらに、なのはさんの魔王フラグを止めることに成功

ここまでは順調だった……が

1つだけ問題があった。

それは、キャラロのことである。

キャラロとデュエルをする時、なぜか海馬の口調になり

さらにデュエルディスク無しで、《ドラゴンを呼ぶ笛》を発動したのだー！！

《ドラゴンを呼ぶ^よ笛^{ふえ}》

通常魔法

フィールド上に「ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者」が表側表示で存在する場合、手札からドラゴン族モンスターを2体まで特殊召喚する。

キャラロが、《ドラゴンを呼ぶ笛》を吹くと

フリードがキャラロの傍に来て雄叫びをしたのだ

それだけかと思ったら、なぜかブルーアイスが3体出現しキャラが
……

「強靱！！無敵！！最強！！粉碎！！玉碎！！大喝采！！
ハハハハハハハハハ！！」

もはや、どうすることも出来なくなったのだ

そのせいで、フェイト隊長が

「キャラが…キャラが…」

と放心状態になってしまったのだ

本当にごめんなさい…。

とまあ、こんな毎日が続いているのだ

部隊長室

「フフフフフ…」

「どうしたんですか？はやてちゃん？」

「これを見てや」

はやてがとりだしたのは、アンケート用紙だった

「アンケートですか？」

「そうや、これがあれば私達の印象がどうなっているのか分かるからな。」

「つまり、私達の評価を見るということですね。」

「そういうこと、アンケートは機動六課全員に答えてもらったから…早速見てみようか。」

「はいです〜!!」

注意、今から注意を3つ書きます

1、今から書くのは、作者が考えた妄想です

” そんな答えじゃない!! 答えは、こうだ!! ”

と思つて、感想に書かないでください

2、作者は、リリカルなのはのことは、あまり知りません

それでも、いいのならどうぞすすんでください

3、アンケートの問題は、スターズしか書いてはいけない

ライトニングしか書いてはいけないという文章がありますので

ご勘弁を…ではどうぞー!!

アンケート

問1　なのは隊長を見てあなたは、どう思いますか？

Aさん、白い管理局の悪魔だ!!

Bさん、悪魔には、逆らえない……。

Cさん、どうか命だけは、助けてください!!

Dさん、死にたくない!!死にたくない!!

Eさん、告白する前に殺されるので、嫌です!!

「……………なんかすごいコメントやな」

はやては、アンケートを見て正直に感想を言う。

「スターズのほうをしてみるです」

スバル、命の恩人です!!私はなのはさんに憧れていますから!!

ティアナ、私達のことを考えてくれるのはさんは、とても信頼できる上司です。

「スターズの2人は、信頼されているですね。」

「やっぱりスバルは、なのはちゃんに憧れているんやね。」

「ユウキはどう思っているんでしょうか？」

ユウキ、とても信頼できる上司です

ですが、気になる点があります。

どうしても、基礎訓練ばかりやるのか
気になります。

ユウキのコメントに、リインは…

「そんなこと考えていたんですね…。」

「後で、なのはちゃんと相談したほうがええな。」

「そうですね。」

「まっ、気をとりなおして…アンケートを見るで…！」

「はいです…！」

問2、フェイト隊長のことをどう思っていますか？

Aさん、親バカである

Bさん、天然ボケもしくは、勘違いをする

Cさん、執務官として教えられないと思う

Dさん、オレオレ詐欺にかかりそう

Eさん、道に迷うイメージがある

「これ、フェイトちゃんに見せたら否定するやろつな。」

は yet は、フェイトのイメージにぴったりだと心の中で思った。

「確かにそうですね…、ライトニングの方をみてください。」

エリオ、フェイトさんはママだと思います。

キャラ、相談をしてくれるので、とても優しいです。

「ほう、フェイトちゃんは、ママだと思っているんやな。」

「スターズは、書いていませんが、ユウキは書いていますよ。」

「えっ？おかしいな、スターズはなのはちゃんのことを書くように

ライトニングのほうは、フェイトちゃんのことを書くようにアンケートの注意書きに書いてあるんやけど…」

「それでも、ユウキは書いていますよ。」

「まあ、読んでみようか。」

ユウキ、正直言っ親バカである。

出張任務の時、フェイトさんが

エリオと一緒に風呂に入りたいと言っているが…

エリオは、もう大人になったんだ!!

だから、これ以上エリオが傷つく姿を見たくないんだ!!

「なんか、必死に訴えているですね…」

「ハハハ…そうやな。」

はやては、苦笑いをした。

「でもどうしますか？これ、見せたら…」

「絶対に見せないほうがええ、シヨックが大きいと思う。」

「そ、そうですね…」

「じゃあ、次のアンケートをしてみるで…!」

問3、スターズに聞きます

ヴィータ副隊長のことをどう思っていますか？

スバル、ティアと同じツンデレだと思う。

ティアナ、本当に副隊長なのか、疑問に思います。

ユウキ、出張任務にて、ヴィータ副隊長は大人だと言っているが…

子供だと言えば、安くなったかもしれない…

むしろ子供だと思う。

「…私達だけ見てよかったなリン。」

「これ見せたら、絶対に怒りますよね…。」

「…次のアンケートを見てみるで。」

問4、ライトニングに聞きます

シグナム副隊長のことをどう思っていますか？

エリオ、《バトルマニア》を使ってくるのがちょっと…

キャラ、働いているの分かりません

「……ひどいコメントやな、特にキャラ。」

「そうですね…。」

はやてもリインは、シグナムは働いているのか分からないが…
後で、聞くことにした。

「まあ、これは見せないほうがええな。」

「《バトルマニア》を使ってくるのかもしれないですね…。」

「さてと、最後の質問はこれや…！」

問5、八神部隊長のことをどう思いますか？

Aさん、動物で言うと狸だ。

Bさん、この部隊にきて良かったのか、心配しています。

Cさん、胸を触りまくるのが嫌です…！

Dさん、セクハラ上司だ…！！

Eさん、書類早く片付けてください…！！

Fさん、本当に部隊長なのか？

Gさん、彼氏が見つからないと思う。

Hさん、出演数が少ない。

Iさん、主人公なのか、気になる…。

「余計なお世話や!!それに狸ってなんや!!
私に喧嘩を売っているんか!？」

「お、落ち着くです!!はやてちゃん。」

「後、胸とか触ってもええやろ？」

「そ、それは駄目だと思っです。」

「はあ…次はスターズとライトニングのほうをしてみるで」

スバル、ノーコメント

ティアナ、ノーコメント

エリオ、ノーコメント

キャロ、ノーコメント

「どうして誰も書いていないんや!!」(泣)

はやては、涙を出して机を叩いていた

「はやてちゃん…ユウキのは書いていますよ。」

「…どうせ私のことを狸やと思っっているんやろっな。」

はやてはユウキのアンケートを目を通した。

ユウキ、八神部隊長は、色々と相談をしてくれます。

新しいネタとボケは色々と役に立っています。

これからも頑張ってほしいです!!

「ユウキ……給料20%増加や。」

「(そんなことしていいんですか?)」

リンはそれでいいのか、心の中で思うのであった

おまけ

もし、このアンケートをなのはさんに見せたらどうなる？

なのは「……………みんな、頭を冷やそうか……」

はやて「(みんな、逃げてや!!)」

第13話 アンケートDA-！（後書き）

ユウキ「ブルーアイズ！！滅びのバーストストリーム！！」

ブルーアイズは作者に向けて攻撃

フレイス「ぎゃああああ！？」

ティアナ「まだよ……」

フレイス「えっ……？」

ティアナ「アイン・ソフ・アウル！！」

作者に向けて攻撃

フレイス「ど、どうして前の設定の技を！？ぎゃあああああ！？」

作者残りライフ……0

ユウキ「ったく、遅すぎなんだよ……」

ティアナ「まったくね。」

スバル「…ティア、ユウキ、やりすぎじゃあ……」

ユウキ、ティアナ「何？文句ある？」「」

スバル「文句ありません！！」

ユウキ「まあとりあえず更新遅れてしまっただけに本当に申し訳ない。」

フレイス「クツ……連絡です……3月まで更新は難しいと思います……」

その理由は、大学の課題があるので……

後、テスト勉強をしないといけないので……」

ユウキ「あっ！？作者まだ生きてる！？」

フレイス「やばっ！？じゃあまた更新する日まで……！」

ぎゃあああああああ！？」

再びブルーアイズの攻撃を受ける作者

はやて「……私の出番は？」

第14話 ティアナが素直だと…DAI！（前書き）

ごめんなさい、今テスト期間ですので…

ではどうぞ…！

第14話 ティアナが素直だと…DAI!

それは、ある日のことであつた…

スバルSide

「ティアく朝だよく時間だよく」

「んく…」

「…ねー、ティアってばー。起きないんなら…モミモミしちゃうよ?」

「……………」

どうやら、スバルはティアナの胸を揉むと言っている

発言をしている様子が見られるが…

やはり部隊長より上の存在なのだろうか…

「ち、沈黙は否定じゃないよね? 肯定と受け取っていいんだよね

…?」

こうしてスバルは某胸揉み魔な部隊長の様な悪戯を閃いた顔をして
そつと、ティアナの胸を触り始めた

「……ん、んっ……」

「んふふー　ティアの声、可愛いー。寝ててもやっぱり気持ちいいのかな？」

スバルはやばい発言をしているがまだティアナの胸を触るスバルだがあることに気付いた

「……あれ、そういえば今日ブラしてないんだ？
いつもは寝るときもしてるのに、
珍しい……」

そう言っつてスバルはティアナの胸を揉んでいると……

「ん……んあっ……、……っ……うわあっ！　スバルっ！？」

「（やばっ！？）」

スバルは考えた……この時なんて言えばいいのか？

1、素直に話をする

2、適当にごまかす

3、再び胸を触る

4、OHANASI TIMEを受ける

「(つて4は絶対に駄目!!やっぱり適当にごまかして…)」

スバルはなんとごまかせばいいのか考えた結果…

「お、おはよう……なんちゃって」

挨拶をするしか方法は無かった

当然スバルはティアナの天罰は確定と思ったのだが…

「……。あんなね…、起こすなら普通に起こしなさいよ」

「……………えっ?」

スバルは耳を疑った、ティアナの胸を触ってごまかすことに成功し

たのдарろうか？

まさか、いままでのツンデレティアナはなくなったのдарろうか？

と、余計なことを考えているが…もう一度ティアナに話をするこ
とに…

「ティア？私ティアの胸を揉んだのに…怒んないの？」

正直にこういえばティアナは怒るだろつと思つた

O H A N A S I T I M Eを受ける覚悟をしたのだ…

そしてティアナの反応はとつと…

「何？ わざわざ怒られたいわけ？」

「……………えっ？そうじゃないけど……………」

「だったらいいでしょ。その…、別に嫌とかじゃなかつたし」

そう言つてティアナは顔が赤くなる

それに対してスバルの反応は驚愕した

「だからつて朝からその気になつても困るけど。どうせなら夜に…

…」

「ティア!? 一体何があったの!？」

「別に? 普段の私だけど…」

「……(いつものティアじゃない?)」

* * * *

Sideユウキ

「リイン曹長、本当にできるんですか？」

「できます!..!」

「…ですが、このままいきますと新デバイスが…」

「だから心配しなくても大丈夫ですよ!!」

「…どうして、俺の新デバイスがまだできていないんだ(泣)」

ユウキは新デバイスのことを思い出しリイン曹長に聞くと

まだと言っていた

ファースト・アラートからかなり時間がたっているが…

本当に新デバイスが完成するのだろうか?

「とりあえず今月中に新デバイスできますか？」

「そ、それは…」

リイン曹長は汗が出てきてユウキはため息を吐いた

「……………まだ時間があるんですか？」

「じ、じめんなさいです」

「はあ…」

ユウキがため息を吐くとリイン曹長はいきなりぽんと手を叩いた。

「あつ、そういえば今日デュエルをするんですか？」

「いえ、明日にしようかなと考えているんですが…」

今ユウキはキャラロと1週間に2回くらいデュエルをしているのだ。

観客は、リイン曹長と八神部隊長だ。

もちろんユウキはデュエルディスクを装着している。

余談だが、リリカルメンバー全員デュエルディスクを出現することができるようになった。

それを可能にしたのはシャーリーだ。

ではどうやってやったのかというと…

ユウキのデュエルディスクのデータを参考にプログラムを作ったのだ

部隊長命令によってだが…

「そうですか…じゃあ次は私とデュエルをしてください!!」

「いいですよ。」

「やったー!!ありがとうございます!!」

「（…正直言ってるイン曹長は子供だよな…?）」

そう思っていたユウキであった。

* * * * *

* 食堂 *

今、ユウキはフォワード達と一緒にご飯を食べていた

ちなみにティアナはもうご飯を食べ終わって

ここにはいないのだ。

そして、今はあの話題に…

「最近ティアさんが変……ですか？」

「…それ本当なのか？」

「うん……。」

そう言っつてスバルはコクリと頷いた

「エリオとキャロはどう？ 何か気づいたことない？」

「あ…僕あります。昨日の夜、自主トレーニングしていたらティアさんが

タオルとドリンク持ってきてくれて、『遅くまで頑張ってるわね』
っつて……。」

「えっ？そんなことがあったのか？」

「は、はい。」

エリオの言葉にユウキは考えた

「（おかしいな…ティアがそんなことをするなんて…
一体何が…）」

ユウキは原作にこんなことがありえるのか…と考えている中
スバルはキャラと話をしていて。

「ふーん。ティアがそんなこと言うなんて、確かに意外かも」

「私にも、最近よく話しかけてくれるようになりました。休憩時間
とか、お風呂のときとか…」

「お風呂…お風呂といえば！ キャロこの頃発育いいよね〜」

どうやら、ティアナの話より別の話題にかわっていた。

「…ふえっ？ そ、そうですか？」

「うん！ 背も伸びてるし、アッチャソッチの肉付きも……
そのうちフェイトさんみたいだな、いいスタイルに…」

「わーっ！ スススバルさんっ…！」

そういう話は僕のいないところでしてくださいよ！

エリオは顔を真っ赤にしながら、スバルに向けてこう言った。

「えー、そんな照れることないじゃない。ねっ、キャロ？」

「はいっ！それに…、私も知りたいな、エリオくんの発育具合……」

とんでもない話になっていくユウキは笑いをこらえるしかなかった
一方エリオはというと…

「僕の発育って…！ とうかいつの間にか僕がいじられるターン
になっちゃってませんか!？」

「エリオ、これは試練だ…耐えれば、」

「兄さん何言っているんですか!?! ティアさんの話はどこへ……」

「あはは…。ごめんごめん、ちょっと脱線」

ようやくスバルは話の本题に戻ったようだ…

「 それにしても今の話が本当なら」

ティアは、態度や言葉にとがった部分がなくなっているというこ

訓練が終了し、フォワード達は、寮へ戻って行く中、ユウキは一人で帰っていた。

「ふう、疲れた、早く戻ってデッキ調整を…ん？」

ユウキは帰っている途中ティアナとスバルを見つけた。

一体何の話をしているのか…盗み聞きをすることに…

どうやら、ティアナとスバルは訓練のことで話をしているようだ。

「……ああつ、悔しい！ あとちょっとでなのはさんに勝てたのに…！」

「ごめん、ティア……。私が最後ドジっちゃったから」

そう…最後、ティアナの作戦で、なのはさんを追い詰めることが出来たのだが…

途中スバルが失敗をして、フォワードは負けてしまったのだ。

そのことからスバルはティアナに向けて謝っているのだが…

ティアナは…

「スバルのせいなんかじゃないわよ。気にしないの」

「え……」

「（何！？）」

スバルとユウキは耳を疑った

普段のティアナはドンマイなどいつも言っているのだが…

今回はどうやら違うようだった。

「それよりも私がフォローできてなかったから…。状況判断だって全然甘々」

「そ、そんなことないよ。ティアの方が私なんかよりちゃんと」

「客観的事実、よ。せつかくスバルがいい動きしてたのに生かせなかつたんだから」

「ちょ…ちょっと待って。私だって今日はダメダメだったよ……？」

そういうスバルにティアナは

「まあそんなこと言っちゃって。毎日着実に力つけてるじゃない」
「どうして……さっきからそんな…」

「次は必ず勝ちましょう。私たちなら出来る。…信じてるわよ、スバル。」

そう言っただけティアナは寮へと帰っていった。

この光景を見ていたユウキはというと…

「（……とりあえずティアと話をしたほうがいいな……）」

* * * *

S i d e
ティアナ

「はあ、これでスバルは元気が出るというけど…」

いつもならドンマイって言うけど…

「ティアア？」

「！？」

気付かなかった…どうしてユウキがいるのよ！？

「さっきから呼んでいるんだけど…」

「い、ごめんなさい。」

「……………」

「な、何よ？」

「いや、ティアアが謝るなんて、なんか久しぶりだな」と思ってな

確かにユウキに向けて謝るのは訓練校以来よね…

「おっと、今はそんな話をする時じゃなかった…

ティアア話があるんだが…いいか？」

「別にいいけど…話って何？」

とりあえずユウキの話聞くことに…

「……一体どうしたんだティア？」

「……なっ。ど、どうしたんだって何よ……。あんたこそ何言ってる」

「どう考えてもおかしいだろ？ 今日の訓練、俺のことかばったりみんなのことも気遣ったり、今までそんなこと絶対なかった……」

ユウキの言葉に私は納得した……なんだそういうことね

「八神部隊長に頼まれたのよ」

「は？」

「だから八神部隊長から頼まれたのよ！！」

今ユウキがポカンとしているけど……大丈夫よね？

「ティア……八神部隊長が頼まれたことって……何？」

「八神部隊長が、一週間、普段とは違う一面をやってくれたらボーナスを渡すとか言ってきたのよ」

「……なんだ、そんなことだったのか（八神部隊長……後でなのはさん

に言っておこう」

ユウキはため息を吐いた。

「ユウキ、普段の私とは違ってどうだった？」

「イライラしてないティアなんか見てたら調子狂う感じだった。」

「あっ、そうなんだ…」

ユウキの言葉に私は、いつもの私でいいんだと実感した。

「まあ、とりあえず明日はいつもどおりのティアに戻っているんだよね？」

「もちろんよ。」

「そうか…じゃあ、いつものつつこみよろしくね。」

「…何？いつものつつこみって？」

「いや、なんでもないよ」

この後私とユウキは一緒に寮に戻った…。

おまけ

ユウキ「あつ、そういえばティアア？」

ティアアナ「何？」

ユウキ「よく八神部隊長から頼みを引き受けたな…

普通引き受けないのに、どうしてだ？」

ティアアナ「ボーナスがもらえるからよ」

ユウキ「ふーん」

ティアアナ「(言えない、ユウキのことを知りたいって八神部隊長に聞いてみたら

こんなことになったなんて、絶対に言えない!!!)」

第14話 ティアナが素直だと…DAI！（後書き）

ユウキ「はあ、竜馬さんとデュエルをしてよかった」

詳しくは、闇を狩る少年 ヘアクセス！！

フレイス「まあそうだな…」

ユウキ「そういえば…作者さん」

フレイス「なんだ？」

ユウキ「できれば…東方キャラクター一人この小説の本編に出してください！！」

フレイス「おい！？この小説はリリカルなのは小説だぞ！！」

gdgdgdになつたらまたリメイクを書かないと…」

ユウキ「いいから、いいから問題ないない」

フレイス「問題あるわ！！」

ユウキ「じゃあさ、聞いてみようよ。」

フレイス「えっ？誰に？」

ユウキ「この小説に東方キャラを出演してもいいなら

1、出演しなくてもいいよ！！という人は2を

感想をいれてください！！」

フレイス「おい！！勝手する……」

ユウキ「では、また更新する日まで……！！」

フレイス「無視するんじゃないねえ……！！」

第15話 新デバイスとキャロ社長DA-！（前書き）

フレイス「今回の話は、東方キャラクターがです。」

ユウキ「アンケートの結果だからな…」

フレイス「話は短いですが…とりあえず見てくださいどうぞ…！」

第15話 新デバイスとキャロ社長DAー！

「ついに…ついに…今日俺のデバイスが手に入るぞー！！」

今日はユウキの新デバイスを手に入れられる日なのだ

嬉しさのあまり叫んでしまう主人公

「よし！！さっそくシャーリーの所へ全速前進DAー！！」

本当に大丈夫なのか？

* * * * *

デバイスルーム

「これが俺の新デバイスですか？」

「そうですよー！！」

リン曹長は、ユウキに新デバイスについて説明していた。

「基本はティアさんのデバイスと同じタイプですね。」

「デバイスの待機状態はティアと同じカードタイプのやつか…」

ユウキは新デバイスを見ています…

「そつえば名前は決まっていますんですか？」

「はい、名前はスターダストミラージュです！！」

「……………えっ？」

ユウキはスターダストミラージュの言葉に反応し

あるモンスターを思い出す…

そう、《シューティング・スター・ドラゴン》だ

《シューティング・スター・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星10 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻3300 / 守2500

シンクロモンスターのチューナー1体＋「スターダスト・ドラゴン」以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、

その効果を無効にし破壊する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「（確か…《シューティング・スター・ドラゴン》の攻撃名は、スターダスト・ミラーージュだよな!?!）」

ということ…これよりユウキは、《スターダスト・ドラゴン》

《スターダスト・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ

魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、

この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

《シューティング・スター・ドラゴン》を使ってはいけないと

ユウキは思った

「…どうしたんですか？ユウキさん？」

「いえ、なんでもありません。」

「そうですか。」

ユウキはとりあえず《シューティング・スター・ドラゴン》や

《スターダスト・ドラゴン》

のカードを使用してもいいのか…今は保留することに

「まあ…とりあえずよろしく頼むぞ…スターダスト」

「あっ、今はしゃべれませんよ…もう少し調整が必要です。」

「…じゃあどうして俺に新デバイスを渡したんだ！！」

「し、ごめんなさいです〜」

* * * *

この後ユウキはフェイト隊長に呼ばれたので…

行ってみると……

キャラが社長になっていた。

「フフフフフフフフフフ…アツハハハハハハハハハハ！」

「キャラ！！お願いだから、元に戻って！！」

「…ということだ、キャラ、フェイト隊長の言うことを聞いてくれないか？」

「ハハハハハ！？は、はい分かりました！！」

「（どうして、ユウキの言う事は聞いて私の言うことは聞かないの！？）」

今、キャラがブルーアイズのカードを取ると今のようにキャラ社長になってしまうのだ。

フェイト隊長はいつもユウキに頼んでキャラ社長を止めているのだが…

ユウキが離れると、

「粉碎 玉碎 大喝采！！A B A B A B D A -！！」

A！全

速前進DA!!」

「ユウキ〜キャロが！（泣）」

再びキャロ社長になってしまつのである…

そこでフェイトは思った……

将来的にこの先は大丈夫なのか？

今のままでは確実にやばいと実感できる。

そこでフェイトはあることに決心した…それは、

* * * *

Sideフェイト

「…えっ！？俺の部屋にエリオとキャロと一緒に泊まるですか!?!」

「うん…どうかな？」

私が決心したことはユウキの部屋にエリオとキャロが泊まらせることを考えた

そうじゃないと、キャラを止めることができないし…睡眠時間が…

「でも…エリオとキャラは俺の部屋に泊まるのが嫌だったら…」

「そんなことはないよ!!だってエリオとキャラはユウキに懐いているんだよ!!」

ここだけは絶対に交渉成立しないと…私の睡眠時間が…

「だからお願いします!!少しの間でもいいから、エリオとキャラをユウキの部屋に泊まらせて!!」

「……分かりました、ですが条件がありますよ。」

「条件?」

何だろう?とりあえず条件をきいてみることにしようかな?

「プライベートの時にフェイト隊長じゃ呼びづらいので…フェイトさんと呼んでもいいですか?」

「えっ?それだけでいいの?」

「は、はい駄目でしょうか?」

「フフフ…分かった。じゃあ私のことはフェイトと呼んでもいいよ
そのかわりエリオとキャロのことよろしくね。」

「はい！お任せください！！」

良かったこれで解決はしたと思うけど…

何か、嫌な予感がするのは気のせいかな？

* * * * *

* ユウキの部屋 *

フェイトさんと別れてユウキはベットで休んでいた

「はあ、エリオとキャロがこれからずっと俺の部屋で泊まることにな
るなんて…」

まあ問題は無いけど…」

ユウキがそう思っているよ…

AB！

AB！

AB！

AB！

「なんだ？誰からの電話だ？」

どつやら携帯電話の着信音らしい…

とりあえずユウキは携帯電話にでることに

「はい、もしもし……えっ？今から俺の部屋に行ってもいいか？」

ユウキはしばらく考えると…

「分かった、じゃあ後何分…えっ？残り10秒！？待っ……切られた。」

ユウキは携帯電話の電源を切り、ベットから起き上がると…

「ユウキ」

「………やっぱりお前か、紫」

出てきたのは、東方キャラクター、スキマの妖怪、八雲紫だ

携帯電話の話し相手は紫、本人である。

えっ？どうしてリリカルなのは世界に東方キャラクターが出てくるんだって？

それは…深い深い理由がありました…

「で、話はなんだ？」

「ユウキに頼まれたカードを持ってきたのよ。」

「おっ、それは助かる…！」

紫がりりカルなのはの世界にいる理由は、ユウキに新しいカードを渡しているからだ。

後どうやって紫と会ったのかは、また後日…

「後、ユウキ、藍、橙が言っていたわよ。早く会いたいです…！！って」

「ハハハ…そうか了解した、また休日貰ったら幻想郷に行くことにするよ。」

あっ、そういえば俺も報告をしたいことがある。」

「珍しいわね…ユウキが報告するなんて、何の報告かしら？」

「今日からエリオとキャラコが俺の部屋で泊まることになったという

報告だが……」

「……ユウキ、エリオとキャロ、スキマに落としていいかしら？」

「！？絶対に駄目！！」

原作がおかしくなるからな……

「もう、冗談よ 私がそんな事する訳無いじゃない」

……本当に、そうだろうか？

先程の目つきは……明らかに本気だったとユウキは思った

「そういえばユウキ、後で重要な話があるから……また来るわ」

「ああ、了解した。」

「じゃあ、またね」

用件が済むと紫は境界の中に入り境界が閉じられた。

「重大な話ってなんだ……まあいいや先にエリオとキャロを迎えに行くか。」

今回はおまけはなし

第15話 新デバイスとキャロ社長DA-！（後書き）

ユウキ「おっ今回は東方キャラクター紫さんかっというか
どうして呼び捨てしているの!？」

フレイス「ふふふふ…それはこの小説が終わればわかるよ（多分）
」

ユウキ「多分って何だ!？多分って!？」

フレイス「まあまあ、とりあえず今日の話はここまでだが…
次の話は幻想卿の話になるぞ。」

ユウキ「えっ?どういうこと!？」

フレイス「しばらくなのはたちが出ないということ。」

ユウキ「はあああああ!？」

フレイス「安心しろ、一応幻想卿の話は…」

ユウキ「短いんだろ？」

フレイス「リメイク編より多いです。」

ユウキ「……東方とクロスしているじゃん。」

フレイス「まあ、大丈夫でしょ後今回もアンケートをとるぞ!！」

ユウキ「アンケートって？」

フレイス「今回のアンケートは禁止カードについてだ!!」

ユウキ「禁止カード？」

フレイス「そう、だからこの小説で禁止カードを1枚だけつかって
もいいのか

意見がほしい。」

ユウキ「へー…で期限は？」

フレイス「2月までだな…」

ユウキ「もし禁止カードを入れてもいいぞ!!

というユーザーさんは1

いやなら2でお願いします。」

フレイス「最後に注意書きだ、感想は1人1回!

さらにアンケートは感想を書いた後…

答えてください。」

ユウキ「アンケートに答えたくない人でも

感想さえ書けば作者はうれしいので…

よろしくお願いします。」

フレイス「では、また更新する日まで!!」

はやて「私の出番が…」

ティアナ「どうして東方…」

スバル「レギュラーの意味が…」

フレイス、ユウキ「あつ…」

第16話 スキマ妖怪と話DAI！（前書き）

フレイス「やった！！連続投稿できたぞ！！」

ユウキ「っていつか、文章短いな…」

フレイス「仕方がないだろ？オリジナル小説だから。」

ユウキ「ちなみにデュエルは長いはずだからそれだけはよろしく

では話をどうぞ！！」

第16話 スキマ妖怪と話DAー！

「はあ…どうしてこうなった？」

「いいでしょう？ユウキ…しばらく一緒にいさせてよ」

「…夜中3時に起こしやがって、エリオとキャロが起きたらどうするんだよ。」

今までユウキはエリオとキャロと一緒にベットの中で寝ているのだが…なぜか紫に起こされて

現在ユウキは紫の家にいることが判明した。

おそらくスキマに落とされたに違いないとユウキは思った。

それより問題なのは、エリオとキャロがもし起きた場合

騒ぐ可能性が十分高いのだが…それに対して紫は…

「大丈夫よ、ユウキが帰ったところには午前5時になっているはずよ。」

「…本当になんでもありだな。」

やはり紫はすごいとユウキは思った瞬間だった…

そしてユウキは普段の表情から、真剣な表情になり本題へ

「で、夜中3時に起こした理由はなんだ？」

今日の昼に話したことについてか？」

「ええ、その件について話があるのだけど…いいかしら？」

* * *

Sideユウキ

なるほど…夜中3時に起こしたのは重大な話があるということか…

とりあえず用件を聞くか

「分かった。」

「ありがと、じゃあ早速本題。」

内容はユウキのいる世界についての話よ。」

「俺の世界？」

俺の世界というと…リリカルなのはの世界ということか…

まあ転生前についての話は、紫に話してはいないからな

「そう、ユウキの世界…フォワードを私達が住んでいる幻想郷へ招待したいのよ。」

「えっ!？」

幻想郷へ招待って…そんなことしたら、原作がむちゃくちゃになる!!

なんとか阻止しないと…

でも、どうして幻想郷へ招待する必要があるんだ？

何か理由があると思うのだが…まず、聞いてみるとしよう。

「幻想郷へ招待する理由はなんだ？」

「気分よ。」

……………ええええええ!？

気分がいいから、幻想郷へ招待って、話がおかしいよ!!

「まあ、フォワードの中に能力を持っている人がいるみたいだけどユウキの世界では問題ないわね。」

「ああ、確かにな。」

リリカルなのはの世界は能力を持っていても、稀少技能の力だ…
と思えば問題ないだろう。

「後、フォワードのことを調べてみたけど…隠された能力があるみたいね。」

「隠された能力？」

「そうよ、よかつたら聞く？」

隠された能力か…

「ちなみに何人隠された能力を持っているんだ？」

「私が調べた中では2人、隠された能力があるわ。」

「それって、俺も含んでいるのか？」

「ユウキは別よ、そもそもユウキは能力持っているでしょ？…2
つ」

「ああ、確かにな。」

デュエルディスクは神に頼んで能力を手に入れたんだが

実は転生の後、なぜか俺は能力がつかえるようになったんだ。

その能力の名前は……

「どんな攻撃をしても反射する程度の能力……だろ？」

この能力はエネルギー弾や物理攻撃をしても相手に向けて反射……

つまり相手の攻撃を無効にしてその数値分のダメージを与える

《魔法の筒》と考えればいいと思う。

《魔法の筒》

通常罠（準制限カード）

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

これってチートじゃないか!?

インチキ効果をいい加減にしろ!!

と思っている読者、残念ながらこの能力を使える場所は幻想郷だけ
なんですよ（泣）

まあ紫がリリカルなのはの世界に来てくれたら能力は使えると思いますけど…

「…なんかずるいわねユウキの能力。」

「…それ、言わないで。」

「まあいいわ、話は戻るけど、隠された能力を持っている人物はこの2人。」

そう言って紫は俺に2枚の写真を見せたその人物は…

キャラとティアだった………

おまけ

ユウキ「そういえば、紫。」

紫「何？」

ユウキ「どうして俺が帰ったら午前5時になるんだ？」

紫「秘密よ。」

ユウキ「(どんな仕組みなんだ!?)」

第16話 スキマ妖怪と話DAI！（後書き）

フレイス「まさかの連続投稿…」

ユウキ「たまたまだろ？」

フレイス「まあ、確かにな…あつそれと注意事項がある。」

ユウキ「なんだ？」

フレイス「頼むから俺に攻撃をしないでくれ！！（泣）」

ユウキ「えっ！？いつも守っているじゃ…。」

フレイス「これ以上俺に攻撃して何の得がある？」

ユウキ「まあ、確かに…」

フレイス「という訳で、もし攻撃を仕掛けたら、ブロックユーザー
逝きだから。」

ユウキ「そこまでするか！？」

フレイス「ということですので、感想書くときは、

攻撃をしないでください…まあユウキならいいけど。」

ユウキ「なんで俺だけ攻撃OKなんだよ！？」

フレイス「まあいいじゃん、ユウキには反射できるんだし。」

ユウキ「能力消されたらどうするんだよ!!」

フレイス「では、また更新する日まで!!」

ユウキ「作者!!」

第17話 隠された能力DAI！（前書き）

フレイス「なんか、すごいな…。」

ユウキ「…テスト勉強じゃないのか!？」

フレイス「というわけで文章どうぞ!！」

ユウキ「ええええええ!？」

第17話 隠された能力DAI!

Sideユウキ

キャロとティアだと!?

俺は2枚の写真を見て驚いた。

「どつやら驚いているみたいね。」

「ああ、確かに驚いたよ。」

まさか2人が隠された能力をもっているとはな…

でもどんな能力をもっているんだろう?

「紫、キャロとティアなんだけど……どんな能力を持っているんだ?」

「……聞きたい?」

「聞きたいです!」

「じゃあ今回は、特別に教えてあげるわ」

特別って…いつも教えてくれるんじゃないの!?

まあいいや、まずどんな能力があるのか聞くか。

「まずは、ティアナ・ランスターね。」

「ティアか、どんな能力を持っているんだ?」

「努力すれば必ず技を覚えられる程度の能力よ。」

努力って…まあ確かにティアは努力すれば必ずできそうな気がするのだが…

つまり努力すれば、俺の技を使うことができるということだよな!?

…まさかティア魔改造フラグの可能性があるのかもしれないな。

でも、どんな技を覚えさせればいいのかな?

まあ後で考えることにしよう。

「なるほど…なんとなく理解した。」

「じゃあ、次はキャロ・ル・ルシエね、能力は、竜を操る程度の能力よ。」

何！？竜を操る程度の能力だと！？

ってそのまんまじゃん！？

まあ確かにキャラは特殊技能「竜使役」を持つ竜召喚士だから

理解するけど…まさか竜を操る能力を…

「ちなみに、どんな竜でも操れるの？

例えば、俺のブルーアイズとか…」

「できるわよ、でもまだ子供だからできないと思うけど…」

いや、できると思うぞ…だって今のキャラはキャラ社長だからブルーアイズ操れると思う。

まあ俺の推測だけどね…

それに《ドラゴンを呼ぶ笛》^よ_{ふえ}をキャラは持っているからな…（汗）

《ドラゴンを呼ぶ笛》^よ_{ふえ}

通常魔法

フィールド上に「ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者」が表側表示で存在する場合、手札からドラゴン族モンスターを2体まで特殊召喚する

「ユウキ、隠された能力を聞いた感想は？」

「まあ…驚くしかない。」

それしか感想は思い出せないよ!!

っていうかりリカルなのはキャラクターに能力があることがすごいと俺は思うけどね。

あつ、そういえば…俺の世界は現在午前3時だよな…

帰ったら必ず午前5時に帰れるって紫は言っていたな

「紫、ちょっといいか？」

「何、ユウキ？」

「…俺が元の世界に戻ったら、午前5時に戻っているんだよな？」

「ええ、そうだけど…」

「じゃあ…しばらくの間、幻想郷も滞在してもいいか？」

「!？」

俺が幻想郷へ滞在してもいいか？と聞いたら紫は真剣な表情から、嬉しい表情になった。

「いいわよ、ユウキ。」

「ありがとう、じゃあ早速だが……紫、ここに泊まってもいいか？」

「歓迎するわユウキ、むしろずっと住んでほしいわ。」

「はははははは……(汗)」

なんだろう……紫はこんなキャラだった？

まあいいや。

というわけで、ユウキはしばらくの間紫の家で泊まることとなった。

第17話 隠された能力DAI！（後書き）

フレイス「いやあ、何か知らないけど…小説かけました。」

ユウキ「そんなんでいいのかよ!?!」

フレイス「あと、今日のあとがきは休ませていただきます

ではまた更新する日まで!！」

第18話 幻想郷滞在1日目前編DA-！（前書き）

ああ、やばいな…来週テスト…

なぜか、テスト期間なのに書いてしまった

ではどござー！！

第18話 幻想郷滞在1日目前編DA-!

「ユウキ様!!ユウキ様!!」

「ハハハ…久しぶりだな橙。」

今ユウキは久しぶりに藍と橙に会い話をしていた。

橙はユウキに抱きついていて……要するに甘えていると考えればいいと思う。

「本当に久しぶりですね、ユウキ様。」

「ああ、藍も元気そうで何よりだ。」

藍はユウキの隣に座って話をしている。

「そういえば…ユウキ様、紫様から聞いたのですが、幻想郷で、どのくらい滞在する予定でしょうか?」

「うーん今のところ1週間滞在しようと考えているが…」

ユウキの言葉に藍は、少し悲しい表情になった。

「そうですか、もう少し滞在してもよろしいのでは？」

「いや、ティア達が心配だから……今回は幻想郷の様子を見るだけだ。」

（まあ、リリカルなのはの世界ではデュエルできなかったが……
幻想郷なら、デュエルする人はたくさんいるはずだ！！）

どうやら本当の目的は、デュエルをしたいということだが……

大丈夫なのだろうか？

「ユウキ！！準備が出来たわよ！！」

「ああ、今行く！！……紫に呼ばれたからもう行くな。」

「分かった……橙、ユウキ様が行かれる、そろそろ離れなさい。」

「はい、藍様……」

* * * *

ユウキは、紫が作った境界の中を移動をして、ある場所へ向かっていた。

もちろん紫も一緒に歩いている。

「ところで、紫どうして俺についていくんだ？」

「みんなの反応を見たいからよ」

紫の言葉にユウキは…本当なのかもう一度聞く事にした。

「……本当は？」

「ユウキが心配だから。」

その言葉にユウキはため息を吐いた。

「…またストーカーかよ。」

「ストーカーって言わないで頂戴！！」

「だったらその理由を言いなさいよ！！」

紫はユウキの言葉に否定をするがユウキはなぜストーカーなのか…

理由を言った。

「…毎日、俺の部屋にいるからだ。」

そう、リリカルなのはの世界に来てから、毎日紫が遊びに来ているから…それが理由だ。

さらに、境界をいじって、パニックを起こしたりしている。

ユウキの言葉を聞いた紫は…

「……………ユウキ、今日一緒に……………」

「断る！！今日は一人で歩かせてもらおう！！
いいや明日もだ！！」

「えー。」

「えー、じゃないってば！！いいから今日と明日は一人で歩かせて
もらおう！！」

「そんな……………ゆかりんショック……………」

紫は悲しい表情になりユウキは再び”はあ”とため息を吐き、紫に
向けてこう話した。

「……………まあ、明後日になったら一緒に来てもいいけど。」

「本当!？」

「ああ、だから今日と明日は……」おとなしくするわ!」「……ならいいが。」

ユウキと紫が話しているとようやく目的地に着いたようだ。

目的地に着いたユウキは境界から出る。

「ありがとう、紫。」

「じゃあ帰りたくなったらゆかりんって呼んでね」

そう言って紫は境界の中に入って消えた

「ゆかりんって……まあいいか。」

ユウキは目的地の場所を見る。

「ここに入るのは久しぶりだな……。」

そしてユウキは目的地に足を踏み入れる。

「博麗神社……。」

Side 霊夢

「はあ……暇だわ……。」

最近、悪いことをする妖怪はいない、事件は何も起こらない。

「……神社の掃除でもしようかな。」

そう思い、私は箒を取ろうと倉庫に向かい、神社の掃除を始めた

「そういえば、あいつ……元気にしているかな？」

2年前、スキマ妖怪と一緒にいたんだけど……

誰だっけ？

「ユウキって名前か？」

そうそう、ユウキだった……って

「えっ？」

「よう、久しぶりだな霊夢。」

私は久しぶりにユウキと会った。

* * * *

「まさかあんたが帰ってくるなんて。」

「ハハハハハ……帰ってきて悪いか？」

「別に……。」

ユウキは霊夢と久しぶりに雑談をしていた。

雑談をしているとユウキは神社をみて一言

「……………あいかわらずボロいな。」

「何？私に対する挑戦として受け取っていいかしら？」

霊夢はスペルカードを取り出しユウキに見せる

それを見たユウキは、霊夢対策として

あるものを取り出した…それは、

「神社の賽銭箱に10000円入れようと思ったんだが…」

そう、お金だ…いくら主人公霊夢でもお金には

勝てないとユウキは判断しあつたため

幻想郷で使えるお金を霊夢に見せると

霊夢はは、スペルカードをしまい

やわらかい表情になりユウキに話しかけた。

「そうなのよ、最近、賽銭箱にお金を入れてくれる人いないのよ。」

あいかわらずお金に弱い博麗霊夢、本当に大丈夫なのか？

いや、主人公としてお金に負けて大丈夫なのか？

ユウキは心の中で思った。

しばらく雑談をしていると霊夢はボンと手を叩いてユウキに聞いた

「ユウキ、今日用事は無い？」

「ああ、今日は霊夢に会うために来たから、今は無いな。」

ユウキの目的はみんなと再会することだから

今日は用事がないのだ。

「じゃあさ、久しぶりに人里行ってみない？」

今日買いたいものがあってね……」

「……つまり俺は荷物を持てばいいのか？」

「そうよ。」

霊夢の言葉にユウキは考えた。

そして考えた結論は……

「分かった、人里まで一緒にいくとしよう。」

「ありがとう、じゃあ私ちよっと準備をするから少し待って!!」

そう言って霊夢はこの場から離れ、人里に行く準備を始めた。

「（人里か、2年ぶりに見るけど……何が変わっているのかな？
まあ久しぶりに霊夢と一緒に歩けるし、OKとするか。）」

とりあえずユウキは、霊夢を待つことに……

おまけ

霊夢「ユウキ質問していい？」

ユウキ「なんだ？」

霊夢「ユウキって、スキマ妖怪と一緒に歩いているけど……

どうして一人出歩いているの？」

ユウキ「そ、それは……（ストーカーだからって言えないよ！！）」

第18話 幻想郷滞在1日目前編DA-！（後書き）

フレイス「更新できたが……」

ユウキ「テストか、まあ頑張ってくれ。」

フレイス「ああ、頑張るよ。」

ティアナ「ところで、東方キャラは何人出る予定なの？」

フレイス「……………次回までに数えてくる。」

ティアナ「数えてなかったの!？」

フレイス「仕方がないだろ!!今はデュエルの内容を考えているんだよ!!！」

ユウキ「何!?!デュエルだと!?!」

フレイス「最初の1戦目は以外な人物だということを教えてあげよ。」

ユウキ「意外な人物？」

フレイス「さて、これ以上言ったらネタバレになるので今日はこゝまで!!！」

ユウキ「はあ、まあいいけどね。」

ティアナ「作者、なにか連絡あるの？」

フレイス「ああ、連絡は……2月から更新する可能性が無いに等しい。」

ティアナ「えっ!？」

ユウキ「それやばくないか!？」

フレイス「まあ、なるべく更新するように頑張ります!!」

感想どんどん書いてくださいね!!」

ユウキ「では、また更新する日まで!!」

フレイス「ちょっと!？これは俺のセリフ!!」

第1?話 幻想郷滞在1日目後編DA-! (前書き)

なんだと……

なぜか2月に更新したというのか!!

いつもどおり文章は少ないですごめんなさい…

ではでは。

第1?話 幻想郷滞在1日目後編DA-!

ユウキと霊夢は人里で色々と物を買って終わり

現在、博麗神社へ帰っていた。

その途中…

「おっ…ユウキじゃないか？」

声をかけられたのは箒に乗っている少女…

「…久しぶりだな…魔理沙。」

ユウキの親友、魔理沙に会った。

「ああ、2年ぶりだな…ってなんだこの荷物？」

魔理沙の視界の中には、ユウキが大量の荷物を担いでいて

霊夢は言つと、口笛を吹いて無視をしていた。

「何も話さないでくれ…今話をするよと力が…」

「ああ…分かった、とりあえず少し荷物をもってやるよ。」

「助かる。」

「　　」　　口笛を吹いて無視をしている霊夢

「……お賽銭箱に10000円入れようと思ったのに…」

「しょうがないわね　　少しくらい手伝ってあげるわ。」

「（あいかかわらずお金によわいなんだな）」

ユウキと魔理沙は心の中でそう思った。

*　　*　　*

博麗神社

「はあ…疲れた。」

「ありがと、ユウキ私の用事に付き合ってくれて。」

「…それより霊夢、どうしてユウキが幻想郷にいるんだ？」

「ああ、それは…」

巫女説明中

「なるほど…だから幻想卿にいるんだな。」

「（それにしても…巫女説明中って何！？）」

ユウキよ…それは気にしたら負けだ…BYフレイス

「そついやあ、ユウキ、外の世界でどんなことを行っているんだ？」

「訓練をしたり、子供の世話とかしているな…。」

訓練は、なのはさんのシミュレーション訓練、

子供の世話は、エリオとキャロの世話のことだ。

「訓練か…何か嫌だな。」

魔理沙は嫌そうな顔をしているが…

それに対してユウキは笑っていた。

「訓練は意外と楽しいぞ。」

魔理沙が訓練を見たら…弾幕に見えるんだけどな…。」

「何！？それは本当なのか！？」

魔理沙は弾幕という言葉に反応してユウキを見る

「ああ、そうだけど（まあ俺が見た中ではな…）」

「よし、決めた！！次私がユウキがいる世界に行くぜ！！」

「ちょっと待って！！ユウキがいる世界は幻想卿の外でしょ？
スキマ妖怪に頼まないでだめだと思っわ。」

「あっ……そうだった。」

霊夢の言葉に魔理沙は顔が赤くなる。

基本なことを忘れたからだと言ウキは思った。

「それよりユウキ、いつまで幻想卿に滞在するんだ？」

「うーん……今のところ1週間にくらい滞在する予定だ。」

「1週間か、じゃあユウキ次の目的地は決まってある？」

「さあ、今は決まっていけないけど…幻想卿を回る予定だ。紫の力を借りてな…。」

「へーっ、スキマ妖怪の力ね…。」

「さてと、そろそろ俺は次のところへ行くとするよ

霊夢、和菓子ご馳走様。」

そう言ってユウキは博麗神社へ出ようとする。

「ユウキ、ちょっといい?」

霊夢に呼び止められた

「何だ、霊夢?」

「5日後ここで宴会やるから……ユウキ出席できる?」

「ああ、出席はできるぞ、魔理沙は出席できるか?」

「もちろん出席するぜ!」

「それを聞いて安心したよ……じゃあまたな……」

霊夢、魔理沙、また宴会に会おう。」

ユウキは博麗神社から出た。

* * * *

ユウキSide

「さてと…そろそろ紫の家に戻らないとな…」

俺は紫の家に戻るため、紫を呼んだのだが…

なぜか紫は出てこなかった。

「どっして出てこない？」

いつもなら出てくるのだが…まさか…

「……ゆかりん？」

「はい」

ゆかりんと呼んだらスキマの中から紫が出てきた

やはり、ゆかりんと呼ばないと出てこないのかな？

って言うか…

「おい、紫、俺の背中に柔らかいものが当たっているのだが…」

「当たっているよ」

「はあ………」

もう何言っても、無駄だと分かった、俺は結局

紫の家に着くまで、ずっと抱きついた状態だった。

おまけ

霊夢「そういえば魔理沙、どうしてユウキがスキマ妖怪と一緒にいるかわかる？」

魔理沙「いや、知らないぜ。

霊夢は知っているのか？」

霊夢「知っているけど…教えてあげないわ。」

魔理沙「えっ！？どうして教えてくれないんだ!？」

霊夢「さあね…」（紫に口止めされているから言えないわよ…）」

第1?話 幻想郷滞在1日目後編DA-! (後書き)

フレイス「ふー、なんとか更新終わった。」

ユウキ「ところで作者。」

フレイス「なんだ?」

ユウキ「今回のヒロインは紫なのか?」

フレイス「いいや、今回の小説は3人だ。」

ユウキ「3人!?!」

フレイス「まあ1人は、ティアナ、もう一人は紫

そして最後は……次回の話だ。」

ユウキ「うーっ、すごく気になる!!!」

フレイス「まあ、楽しみに待っていてくれ。

それではまた更新する日まで!!!」

質問Q&A!!

Q1そういえば、時期はどうなっている?

A、すべての異変が終了した……つまり
平和な世界ですね。

Q2 ヒロイン3人はおかしいだろ！！1人に絞れ！！

A そんな方は帰ってください
私の計画が……

Q3 ユウキの過去は？

A それは……まだ未定です。
ですが、この小説が終わったら過去編を
しようかなと考えています。

追伸

ティアナと一緒に幻想入りにしたほうが面白いかも…
と作者は思った。

Q4 東方キャラクターは何人出るんだ！！

A わかりません、ごめんなさい
まあ10人以上は出演する予定です。

以上Q&Aでした

第20話 幻想郷滞在2日目前編DA・！（前書き）

相変わらず更新が遅れてしまい申し訳ございません

では……どござー！

第20話 幻想郷滞在2日目前編DA-!

ユウキは紫の隙間を使って、あるところに向かっていた…

そこには竹箒を持った女の子がいた。

緑の長い髪をお下げにして、白と青のワンピースのようなゆったりした服をまとっている。

「お久しぶりです。早苗さん。」

ユウキが向かった場所は、守矢神社だ。

ユウキの言葉に反応し早苗はユウキに挨拶をする。

そのあと早苗はユウキに向けてこう話した。

「その前にユウキさん!!」

「私のことは呼び捨てでいいですよ。」

「えっ、でも…。」

「いいですね!!ユウキさん!!」

「は、はい…。」

早苗の迫力にユウキは思わずはいと言ってしまったが

この調子で大丈夫なのか？

「ところで、神奈子さんと諏訪子さんは？」

そう、いつもなら出迎えてくれるのだが

今回はいないのはなぜなのか？

ユウキは疑問に思っていたので

早苗に聞いてみた。

「神奈子様と諏訪子様は、今日用事があると言って
お出かけになりました。」

「珍しいな、神奈子さんと諏訪子さんが用事でいないとはな…。」

確かに神様が留守になっていることは

重要なことがあるとユウキは判断した。

「とりあえずお賽銭箱はどこにある？」

「10000円入れたんだけど。」

ユウキは霊夢と同じ

幻想郷で使うお金を早苗に見せると……

早苗の目から涙が流れていた

「あ……ありがとうございます!!」

「えっ?何で泣いているの!?!」

「最近お賽銭を入れる人がいないんです!!」

「(……確かに妖怪の山に神社へ向かう人は少ないからな……)」

ユウキが心の中で納得していると……

後ろから声をかけられた。

その人物は……

「早苗、何泣いているんだ？」

「す、諏訪子様！？」

なんと出かけていた諏訪子が帰ってきたのだ。

それと同時にユウキは諏訪子に挨拶をする。

「お久しぶりです、諏訪子様。」

相手が神様なのでユウキは諏訪子のことを

様と呼んでいるが諏訪子は、ユウキの言葉に苦笑いした。

「ははっ…ユウキ、様はやめてくれない？」

私のことは普段の呼び方でいいからさ。」

「はいはい、諏訪子さんでいいんですよ？」

「うん！！久しぶりだねユウキ。」

ユウキは諏訪子の手をとりハイタッチをした。

「ところで諏訪子様、神奈子様と一緒に出かけでは…。」

「神奈子が、一人でいいから今日は休めって言われたんだよ。」

「そうなんですか!?!」

早苗は諏訪子の言葉に驚愕した。

「うん、神奈子が今日一人でやるとか言っていたから…
まあ大丈夫かわからないけど。」

「ちなみにお出かけの内容ってなんですか?」

ユウキはお出かけの内容を早苗に聞いてみた。

「確か…川で釣りをするとか言っていましたよね?」

「うん、今日魚を釣りたいからね」

「（……神様が釣りって、にとりに頼めばいいんじゃないのか？）」

ユウキは、神様が釣りをしている様子を思い浮かべ中……

諏訪子はユウキに話しかける。

「しかし、ユウキが帰ってくるなんて
どろろという風の吹き回しなんだ？」

「幻想郷の様子を見たいからが理由かな……
紫に頼んで俺のいる世界の時間を境界をいじってもらって、
今ここにいていいかな。」

「なるほど……。」

諏訪子が納得をするのか早苗はユウキに話しかけた。

「あの、ユウキさんちょっといいでしょっか？」

「なんだ、早苗？」

「これからユウキさんと行動してもいいですか？」

早苗の言葉にユウキは驚いた。

「えっ！？でも、俺の世界は…」

「違いますよ、幻想郷と一緒に回ってもいいかを聞いているんです。」

「なんだ、そういうことか…」

どつちらユウキは自分の世界に早苗が来るのと思い

勘違いをしていたようだ…

「俺は別にかまわないが、神社は大丈夫なのか？」

確かにユウキの言うとおり、早苗は守矢神社の巫女をしている。

さらにご飯を作るときはいつも早苗が作っており

ユウキは心配だった。

だが早苗は笑顔でこう答えた。

「大丈夫ですよ、私はユウキさんと一緒に幻想郷の様子を見たいですから…。」

「…明日俺が回ろうとする場所は白玉楼でお泊りするんだが…
幻想郷を回るのはそれ以降になるけどそれでもいいの？」

以前、紫がいつもユウキに向けて幽々子がユウキに会いたいと
言っていたので明日は白玉楼へお泊りする予定なのだ。

それに対して早苗は…

「それでもいいです…!!」

「ユウキさんと一緒ならどこでもついていきます…!!」

「（早苗がこんな表情になるなんて初めてみたぞ…
でも白玉楼で早苗と一緒に泊りに行ってもいいのか？）」

ユウキはどうすればいいのだろうと考えていると

諏訪子がユウキに向けて話しかけた。

「ユウキ早苗を連れて行ってくれない？」

「でも、幽々子さんが泊まってもらえる許可がないと。」

「大丈夫だよユウキ。」

昨日スキマ妖怪が、ここに来てさ頼まれたんだよ。

明日白玉楼に泊まるから

早苗を借りていいかって…。」

「……………（紫、何を考えているんだ、早苗を借りるって、
何を考えているのかさっぱり分からない。）」

ユウキは紫の行動に頭を抱えた。

「そうですか、でも諏訪子さんが良いと言ってても神奈子さんの許可をもらわないと……。」

「神奈子は別にユウキと一緒になら早苗を借りてもいいって言うっていただけ。」

「……そうですか。」

ユウキは逃げ道を封じれ……

結果

「じゃあ、今日からユウキさんと一緒に幻想郷を回ってもいいんですね……！」

「ああ、紫もついてくるけどそれでもいいというなら……。」

「構いません!!」

早苗の迫力にユウキは”わ、分かった!!”と言っしかなかった。

おまけ

昨日の神社の様子

紫「つとつわけだけど…いいかしら?」

神奈子「ふむ、早苗の借りるのは問題ないが…

諏訪子どうだ?」

諏訪子「だめだよ!!」

早苗がいなくなったらご飯が…。」

紫「明後日、白玉楼に行く予定だけど…。

もし早苗がいたら面白いことになるんじゃないかしら

たとえば…きゃああああって驚く様子が見れると思っけど。」

諏訪子「…早苗を借りてもいいよ。」

神奈子「さっきの威圧はどうしたの!？」

第20話 幻想郷滞在2日目前編DA-！（後書き）

ユウキ「……作者、更新遅い。」

フレイス「すまない、いろいろと忙しいから……」

ティアナ「それにしてもこの小説完結できるの？」

フレイス「頑張るしかない！！」

ティアナ「はあ、とりあえず早苗さんがユウキと一緒に行動って

私の立場は……」

フレイス「……じゃあまた更新する日まで！！」

ティアナ「作者ー！？」

ユウキ「すごい、ティアナが作者につっこみを……」

質問Q&A！！

Q1 作者！！なぜ早く更新しなかった！？

A、ごめんなさい、こっちにもいろいろと問題が……

Q2 デュエルまだー？

A、デュエルなら、竜王さんのところにある闇を狩る少年のところにあります、ぜひ見てください！！
後、本編はまだですね…

すみません

Q3 早苗と行動って……紫に問題が…

A、たぶん大丈夫でしょう…多分

Q4 この小説リリカルなのは中心小説だよね？

東方やつても大丈夫？

A、大丈夫だ、問題ない、

しっかりとリリカルなのは小説をやりますよ。

Q5 そういえば、ユウキのデバイス…イノセンスはどうした？

A、しっかりと持っていますよ、

まあ変身はないとおもいますが…

以上Q&Aでした。

第21話 幻想郷滞在2日目後編DA・！ (前書き)

ようやくデュエルの時間だー！ー！！

でも途中です… (泣)

それでは、どござー！

第21話 幻想郷滞在2日目後編DA-!

「ところでユウキさん」

「なんだ早苗？」

「久しぶりに会ったのでデュエルでもしませんか？
私2つデッキを持っているので
2軍で戦ってみたいです!！」

「……なあ俺のデッキって知っているよな？
いじめになるんじゃない……」

そう、ユウキのデッキはBFブラックフェザー

……つまりガチということだ。

だが早苗は笑顔でこう言い返した。

「大丈夫ですよ、私はユウキさんのBFブラックフェザーと
戦いたいですから。」

「………了解した、じゃあデュエルでもしようか

諏訪子さんは？」

「私は、お昼寝でもするよ…早苗負けるんじゃないよ…！」

「はい！！諏訪子様、私頑張って勝って見せます！！！」

「（つうか、神様が昼寝って大丈夫なの？）」

* * * *

「…………ユウキさん準備はいいですか？」

「ああ、俺は準備OKだ。」

ユウキと早苗はデュエルディスクを構え

デュエルディスクを展開する。

「そういえば、早苗どうしてデュエルディスクがあるんだ？」

「にとりさんが作ってくれたんです！！」

今幻想郷では、デュエルディスクはたくさんありますから」

「なるほど…」

ユウキは早苗の言葉に納得する

さらに早苗は言葉を続けた。

「後、ユウキさん、実はこのデュエルなんですけど弾幕ごっこの代わりになるんですよ。」

「…ということはデュエルに勝てばOKということなの？」

「はい、その通りです…！！」

スペルカードルールでもデュエルで勝負するのもどっちでもいいということになりました。」

早苗の笑顔にユウキは苦笑いをした

まさか早苗が説明をしてくれるとは思っていなかったからだ。

「あつ、後ユウキさん幻想郷では禁止カードを1枚だけ入れられるんですよ。」

「えっ、そうなの!?!」

ユウキは早苗の言葉に驚愕する

それもそうだろう…なぜなら禁止カードを入れたデュエルは

ユウキはこれが初めてだから。

「もちろん、私は禁止カード入っていますよ

ユウキさん、今禁止カードいれますか?」

「……そうだな、じゃあこのカードを入れるか…」

ユウキはイノセンスから禁止カードを取り出しデッキに加えシャッ

フルシ

デュエルディスクにセットする。

「じゃあ早苗、行くぜ!」

「負けませんよ!」

「デュエル!」

ユウキLP4000VS早苗LP4000

互いのプレイヤーがデッキから五枚カードを引く。

一瞬視線を交錯させた後、ユウキは早苗に話しかける。

「早苗、先攻は譲るよ。」

「あ、ありがとうございます。ユウキさん」

「（さあ、どんなデッキなのか見せてもらいましょうか……）」

「私のターン、ドローー!!」

早苗はデッキからカードをドローし手札に加える。

「私は、《D・HERO デステニーヒーロー ダイヤモンドガイ》

攻撃表示で召喚します。」

《D・HERO デステニーヒーロー ダイヤモンドガイ》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1400 / 守1600

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、

自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。

それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、

次の自分のターンのメインフェイズ時に

その通常魔法カードの効果を発動する事ができる。

通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「D・HERO
デステニーヒーロー

運命を操るデッキ…」

「はい、私は一度だけでもいいから

このデッキを使ってみたかったです!!」

「なるほど……」

「私はダイヤモンドガイの効果を発動します!!」

デッキの上のカードを確認して

そのカードが通常魔法カードなら

それを墓地へ送り、次の私のターン

その通常魔法カードの効果が発動する事ができます!!」

早苗はデッキの一番上のカードを確認し

ユウキに見せる。

「私があめくったカードは魔法カード

《デステニー・ドロ》よって次のターン

このカードを発動することは確定しました。」

早苗は《デステニー・ドロ》のカードを墓地に送った。

「さらに私はカードを一枚伏せてターン終了です。」

早苗は1枚のカードを取り出し

デュエルディスクの魔法・罠ゾーンのスリットに差し込む。

そして早苗のフィールド上にリバースカードが出現する。

早苗

LP4000

手札4

リバースカード1

「俺のターンドロロー!!!」

手札より《BF - 蒼炎ブラックフェイズのシュラ》
を攻撃表示で召喚する!!!」

《BF - 蒼炎ブラックフェイズのシュラ》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1800 / 守1200

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力1500以下の「BF」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「バトル!!」

蒼炎そつえんのシュラでダイヤモンドガイを攻撃!!」

蒼炎そつえんのシュラは早苗のダイヤモンドガイに向けて

攻撃を仕掛けるだが…

「畏発動!!!」《D-シールド》デー」

《D-シールド》デー

通常畏

自分フィールド上に攻撃表示で存在する「D-HERO」と名のついたモンスターが

攻撃対象になった時に発動する事ができる。

このカードは装備カードとなり、

攻撃対象になったモンスターを守備表示にしてこのカードを装備する。

装備モンスターは戦闘によっては破壊されない。

「このカードはD・HEROが攻撃対象になった時発動することができるカードです。
発動時このカードは装備カードとなり
攻撃対象になったモンスターを守備表示になります。」

ダイヤモンドガイ

ATK1400 DEF1600

「さらにこのカードを装備している限り
装備モンスターは戦闘によっては破壊されません。」

「（戦闘で破壊できないか……
これじゃあ蒼炎そうえんのシユラの効果が発動できないな……）
俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

ユウキは2枚のカードを取り出し

デュエルディスクの魔法・罨ゾーンのスリットに差し込む。

ユウキLP4000

手札3

リバースカード2

「私のターンドロー!!!」

この瞬間ダイヤモンドガイによって墓地に送られた

《デステニー・ドロ》を発動します。」

《デステニー・ドロ》

通常魔法（制限カード）

手札から「D・HERO」と名のついたカード1枚を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「デッキからカードを2枚ドロウ!!!」

そして私はダイヤモンドガイの効果を発動します。」

早苗は再びデッキの一番上のカードをめくり

ユウキに見せた。

「…………めくったカードは魔法カード

《終わりの始まり》次のターン

発動することが確定しました。」

「…………クツ、次のターン3枚ドロウすることが確定か、

カードアドバンテージは早苗のほうが上だが…

どうする…）」

ユウキは早苗の行動にどうすればいいのか考えている時

早苗は次の行動に移る。

「さらに手札から魔法カード

《融合》を発動します!!」

《融合》

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決め

られた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の《D - HERO デステニーヒーロー ダイハードガイ》と

《D - HERO デステニーヒーロー ディアボリックガイ》を

手札融合！！」

《D - HERO デステニーヒーロー ダイハードガイ》

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守 800

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、

このカードを除く自分フィールド上の「D - HERO」と名のついたモンスターが

戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、

そのモンスター1体を次の自分のスタンバイフェイズ時に

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

《D - HERO デステニーヒーロー ディアボリックガイ》

効果モンスター（準制限カード）

星6 / 闇属性 / 戦士族 / 攻 800 / 守 800

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。自分のデッキから「D - HERO ディアボリックガイ」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

早苗の行動にユウキは…

「(D・HERO同士で融合だと……

何を出す気だ?)」

「いでよ《V・HERO ヴァイジョンヒーロー アドレクション》!!」

《V・HERO ヴァイジョンヒーロー アドレクション》

融合・効果モンスター

星8 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2800 / 守2100

「HERO」と名のついたモンスター×2

1ターンの1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体と、

このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する

「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力・守備力は

エンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。

「V・HERO ヴァイジョンヒーロー だと…!!?」

「ユウキさんこのカードのこと知らないんですか？」

「ああ、初めて見るカードだ。」

「そうですか……ではV・HEROヴィジョンヒーローの力を
見せてあげます！！

アドレイションの効果発動！！

1ターンに1度相手フィールド上に存在するモンスターと
このカード以外のHEROを1体選択し、
相手モンスターの攻撃力・守備力は
エンドフェイズ時まで、選択した私のモンスターの攻撃力分ダウ
ンします。」

456

「何！？攻撃力・守備力を下げると……」

「私はダイヤモンドガイを選択しユウキさんのモンスターは
ダイヤモンドガイの攻撃力……すなわち
1400ポイントダウンです！！」

蒼炎そうえんのシュラ

ATK1800 400

DEF 1200 0

「これでユウキさんのモンスターは攻撃力400…
私は、ダイヤモンドガイを攻撃表示に変更します。」

ダイヤモンドガイ

DEF 1600 ATK 1400

「バトル！！アドレイションで、蒼炎そうえんのシユラを攻撃！！
アンビション・サンクションズ！！」

アドレイションはユウキの蒼炎そうえんのシユラを破壊し

ユウキに戦闘ダメージを与える。

「クッ……………」

ユウキ

LP4000 LP1600

「さらにダイヤモンドガイでユウキさんにダイレクトアタック!!
ハードネス・アイ!!」

ダイヤモンドガイはユウキにダイレクトアタックを仕掛ける

そして、ユウキはダイヤモンドガイの攻撃を受け

苦しい表情になった。

「うわああああ!?!」

ユウキ

LP1600 LP2000

「これでユウキさんのライフは残り2000...
私はカードを2枚伏せてターン終了です。」

早苗は2枚のカードを取り出し

デュエルディスクの魔法・罠ゾーンのスリットに差し込む。

早苗LP4000

手札2

リバーズカード2

《D・シールド》

「ユウキさん次のターンで終わりです!!」

「……まだだ、ライフがある限り俺は負けない!!
俺のターンドロロー!!」

ユウキはカードをドロローし手札に加える。

「相手フィールド上にモンスターが存在し
自分フィールド上にモンスターが存在しないとき
リリース無しでこのカードは通常召喚することができる!!」

来い！！《BF - 暁のシロツコ》
「

ブラックフェザークッキ
《BF - 暁のシロツコ》

効果モンスター

星5 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2000 / 守 900

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードはリリースなしで通常召喚することができる。

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する

「BF」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外の

フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついた

モンスターの攻撃力の合計分アップする。

この効果を発動するターン、選択したモンスター以外の

モンスターは攻撃する事ができない。

「さらに俺のフィールド上にBFが存在する時
手札から疾風のゲイルを特殊召喚するぜ！！」

ブラックフェザークッキ
《BF - 疾風のゲイル》

チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1300 / 守 400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の

「BF」と名のついたモンスターが存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にす
る事ができる。

「いきなりモンスターを2体召喚しましたか……」

「さらに、疾風のゲイルの効果を発動!!」

1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を
半分にする!!

俺は、《V・HERO ウィジョンヒーロー アドレイション》
の攻撃力・守備力を半分にするぜ!!」

疾風のゲイルは早苗のアドレイションに向けて

風を起こしアドレイションの攻撃力・守備力を半分にした。

アドレイション

ATK 2800 ATK 1400

DEF 2100 DEF 1050

「私のアドレイションが…」

「バトル！…あかつきのシロッコでアドレイションを攻撃！
ダークウイングスラッシュ！」

あかつきのシロッコはアドレイションを攻撃し破壊した。

さらに早苗は戦闘ダメージを受ける。

「クッ………」

早苗

LP4000 LP3400

「ですが、ユウキさんの場には疾風うげんのゲイルしかいません！
私のダイヤモンドガイには及びませんよ！！」

「まだだ！！手札より速攻魔法
《速攻召喚そっこうしょうかん》を発動！！」

《速攻召喚》
そっこうしょうかん

速攻魔法 (アニメオリジナル)

手札からモンスターを通常召喚する。

「手札のモンスターを通常召喚する。

俺は《BF - 漆黒のエルフェン》
ブラックフェゼウ

を攻撃表示で召喚!!!」

《BF - 漆黒のエルフェン》
ブラックフェゼウ

効果モンスター

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2200 / 守1200

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、

このカードはリリースなしで召喚する事ができる。

このカードが召喚に成功した時、

相手フィールド上に存在するモンスター1体の表示形式を変更する事ができる。

「レベル6で通常召喚ですか!?!?どうして...」

「このカードは俺のフィールド上にBFブリックフェザーが存在するとき
リリース無しで召喚することができる!」

「そういうことですか…」

「バトル! 漆黒しじくのエルフェンでダイヤモンドガイを攻撃!」

漆黒しじくのエルフェンはダイヤモンドガイに向けて

攻撃を仕掛ける。

早苗の場にある《D-シールド》のおかげで

ダイヤモンドガイは戦闘で破壊されないが、

戦闘ダメージを受ける…

そのことから考えた早苗は

伏せカードを発動する。

「その攻撃は通しませんよ!!」
「畏発動!!」《D・カウンター》^{ディー}」

《D・カウンター》^{ディー}

通常畏

自分フィールド上に表側表示で存在する「D・HERO」と名のついたモンスターが
攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。
攻撃モンスターを破壊する。

「D・HEROに攻撃された時攻撃モンスターを
破壊します!!」
これでユウキさんのモンスターは…」

「そうはさせるか!! 畏発動!!」《トラップ・スタン》!!」

《トラップ・スタン》

通常畏

このターンこのカード以外のフィールド上の畏カードの効果は無効にする。

「このターンこのカード以外の罠カードの効果は無効にする。
つまり、早苗が発動した《D・カウンター^{ディ}》は
無効となる…」

「そんな……」

そして、漆黒^{しっこく}のエルフェンはダイヤモンドガイを攻撃し

戦闘破壊をした。

早苗はダイヤモンドガイが戦闘破壊された光景を見て驚愕した。

なぜダイヤモンドガイが破壊されたのか？

早苗

LP3600 2800

「さらに《トラップ・スタン》の効果で
ダイヤモンドガイに装備されている
《D-シールド》は無効になり
戦闘で破壊される。」

「そういうことですか……」

「まだ俺の攻撃が残っている、疾風のゲイルで
早苗にダイレクトアタックー！
ブラック・スクラッチー！」

疾風のゲイルは早苗に向けて

ダイレクトアタックを仕掛け

早苗は戦闘ダメージを受けた。

「きゃああああー!？」

早苗

LP2800 LP1500

「俺はここでターンを終了する……」

ユウキ

LP200

手札0

リバーズカード1

「早苗、まだこれからだぜ……」

「そうですね……ですが、ユウキさんの残りライフは200
このターンで終わらせて……」

早苗は言葉をつづけようとした……その時……

「早苗ー！ー！ご飯作ってー！ー！
お腹すいたー！ー！」

なんと諏訪子が早苗に向けて食事を作ってほしいと頼まれユウキと早苗は苦笑いした。

「しょうがありませんね」

「ああ、このデュエルはお預けだな……」

ユウキと早苗はデュエルを中断し

夕食を作ることにした……

ちなみにユウキは早苗の手伝いをして夕食をこちそうになった。

おまけ

ユウキ「早苗の料理おいしかった……」

早苗「あ、ありがとございます。

そういえば、ユウキさんさっきのデュエルですが……」

ユウキ「ああ、あの時続けていれば確実に俺は負けたな、

早苗の勝ちだよ。」

早苗「そ、そんなことはないですよ!!」

だってユウキさん、伏せカード1枚ありましたよね!？」

ユウキ「あの時の伏せカードは、ブラフだよ。

罠カード《フェイク・フェザー》だから……

だから俺の負けだ」

早苗「……そうですか」

ユウキ「でも、次は負けないからな早苗」

早苗「そうですね、また勝負しましょう。」

ユウキ「……はあ、最初から負けだったけど、
この調子で大丈夫なのかな？」

おまけ2

早苗「では、諏訪子様行つてきます。」

諏訪子「うん、ユウキと一緒に楽しんできてね」

早苗「はい……」

ユウキ「(さてと、俺はこれから紫を呼ぶのだが…
まさかゆかりんって呼ばないといけないのか!?)」

第21話 幻想郷滞在2日目後編DAー！ (後書き)

ユウキ「久しぶりにデュエルをしたが…どうして諏訪子さんがおなかすいたーっていうだけでデュエル中断するの!？」

フレイス「いやー、どう考えても神様に言葉に

逆らうことができないからな」

ユウキ「ああ、もういいや…次のデュエルで満足させてもらおうか…」

フレイス「とまあこんな感じですが、また更新する日まで!！」

質問Q&A!!

Q1、ヒロインは誰なんだ？

A、現在3人のヒロインは、紫、早苗、ティアナになっています。

Q2、ユウキの過去編ってやるの？

A、もちろんやりますよ!!

でもその前にリリカルなのはのほうを復習を……

Q3 デュエル……途中だよ……

A ごめんなさい、次からは決着をつけます!!

以上Q&Aでした。

また、感想をかいてくれたら嬉しいです。

更新スピードがあがりますから…

第22話 幻想郷滞在3日目前半DA・！（前書き）

宣伝ですが、今現在ユウキの過去編を筆記することになりました！！

ぜひ見てくださいね

後、連日更新はきついですが……

あっ、連日更新はユウキの過去編のことですよ

第22話 幻想郷滞在3日目前半DA-!

Sideユウキ

早苗が俺についていくと決まった。

昨日は紫の家に泊まったが

泊まった感想が…

「懐かしい気持ちでした、たまに泊まりたいです」

とか言っていた。

紫の家になにかあるのか？

とまあ、こんな感じで今俺と早苗はお泊りの準備をしていた。

なんせ今日は白玉楼に泊まるのだから…

いろいろと準備をするなか早苗が俺に話しかけてきた。

「ユウキさん、そつえば弾幕はできます?」

「ああ、一応できるよ」

でも俺はスペルカードは使っていないな…
なぜなら俺の能力はかなりやつかいだから」

早苗は俺の能力を思い出し納得の表情になった。

「確かにそうですね……でも、ユウキさんは
いろいろと弱点がありますよね。」

「ああ、確かにな……」

俺の能力はどんな攻撃をしても反射する程度の能力を持っている。

でも紫が境界をいじったら俺の能力は無効となり

まったく能力が持たない人間になりますけどね…

だが俺にはイノセンスがあるから、デュエルディスクで戦うしかないけどね。

弾幕で負けるのは、紫、映姫さん、アリスの3人に負けるんだ。

紫は境界をいじれば攻略はできる、映姫さんは白黒はつきりさせる程度の能力を持っているので

俺に勝つことは可能……だがなぜアリスに負けるのか？

その理由は……人形を使ってくるからだ。

だって人形を傷つけたらなんか悪い気がして…

だからいつもアリスと弾幕をやるとき降参する。

アリスの反応は、”……人形はまた作ればいいのに、どうして戦わないのよ!!”

といつも言っています。

まあ理由は人形を壊したくないから、俺はアリスだけは降参するよ
うにしている。

そんなことを話をしていると、紫が俺たちの様子を見に来てくれ
たようだ。

477

「ユウキ、早苗、準備はできたかしら？」

「大丈夫だ」

「私も大丈夫です」

「わかったわ、じゃあ早速…白玉楼に行くわよ」

さてと、久しぶりに幽々子さんと妖夢に会つとしますか…

Sideユウキout

* * *

* 白玉楼 *

「ユウキさん、早苗さん、お久しぶりです」

「久しぶりだな、妖夢」

「宴会以来ですね」

白玉楼に着いた紫達は、幽々子と妖夢に挨拶をしていた。

現在ユウキと早苗は妖夢に挨拶を

紫は幽々子と話をしていた

ちなみに藍と橙はというと…

「ちええええええええええん！！」

「藍じゃまああああああああ……！！！！！！！！！！」

マヨヒガでお留守番をしていた…

いや、スキンシップといったほうがいいのだろうか？

「ところで、どうして早苗さんがいるんですか…

もしかして…白玉楼で泊まるのですか？」

妖夢は恐る恐る早苗に質問すると早苗は笑顔で

こう答えた

「はい、私はユウキさんについていくと決めましたから！！」

「そうですか……では今日はゆっくりしてくださいね」

「はー…」

「ところで妖夢、俺とデュエルでもしないか？
最近デュエルをしてくれる人がいなくて…」

「申し訳ありませんユウキさん実は……まだやるべきことがありま
す」

「やるべきこと？」

ユウキは妖夢に聞くと”はい”と答えた
妖夢がやるべきこと……それは

「妖夢、さつそくだけど食材買ってきて〜
今日は紫達がお泊りするんだから〜」

「は、はい！！わかりました！！」

食材を買ってくる仕事が残っているため
現在デュエルができないということだった
これを見ていたユウキと早苗は…

「妖夢、俺も一緒に手伝ってもいいか？」

「で、ですが…」

「荷物を持つの手伝いますから、
人手が多いほうがいいんじゃないでしょうか？」

「……ありがとうございます」

妖夢はユウキと早苗に向けてお辞儀をした。

この様子を見ていた紫と幽々子は…

「本当にユウキが幻想郷に帰っているなんて……
どついう吹き回しなのかしら、紫？」

「私に振らないで頂戴、幽々子」

「つれないわね、ユウキが帰ってきて嬉しくないの？」

「正直に言ったら私は嬉しいわ、なんだってユウキの保護者ですもの」

「そついえば紫はユウキの保護者だということ
すっかり忘れていたわ」

「……幽々子？」

「睨まないでくれないかしら？
ちよっと怖いわよ」

「まあいいわ、でもユウキは……
私たちとは別の世界に住んでいる人間……
幻想郷へ連れてよかったのかしら……」

「いいんじゃない、こうしてユウキは私たちと楽しく話しているの
だから」

過去のことには気にしなくていいんじゃない？」

「……それもそうね」

今回おまけは無し！！

第22話 幻想郷滞在3日目前半DA・！（後書き）

フレイス「いやー更新疲れるぜ」

ユウキ「お疲れ様だ作者」

フレイス「さて、いよいよ次回は…」

ユウキ「ああ、分かっているデュエルだろ？」

フレイス「残念だが…それは違う」

ユウキ「じゃあ…なんだよ？」

フレイス「もう幻想郷でデュエルはもうないよ」

ユウキ「はあああああああ！？」

フレイス「大丈夫だ、リリカルの世界に戻ったら

デュエルがあるぞ」

ユウキ「それにティア…大丈夫かな？

すごく心配だ…」

フレイス「とまあ、こんな感じになりましたが

ユウキの過去編を見ていただけると

だいたいこうなっているんだ〜というのがわかります」

ユウキ「まあ、できれば見てほしいな…」

フェイス「それでは、また更新する日まで!!」

質問Q&A

Q1、ちょっと待て!!紫ってユウキの保護者だったの!?

A 過去編を見ればわかります

Q2、あれ……もうデュエルがないの？

A まあ作者がやる気を起こせばなんとか感想や評価がほしいです… 本音

Q3、文章少ないが、大丈夫か？

A 時間がないのであんまり…

以上Q&Aコーナーでした

お知らせ(前書き)

重要な事です!!

お知らせ

今回は連絡だけですが…

実はこの小説の過去編より、幻想郷編を連載しておりますが、今日からこれより、幻想郷編だけを集中したいと思います。

完結するには時間がかかりますが、リリカルなのはを待っていた人は…申し訳ありません。

できるだけ早くリリカルなのはの原作に戻ろうと思いますので、これからの応援よろしくお願いします!!

最後に一言、

まことに勝手なことをしてしまい

申し訳ありませんでした!!

できれば幻想郷編を見てもらえたら
ありがたいです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4508o/>

魔法少女リリカルなのはStrikers ~ 未来を変えるスターロード ~

2011年9月23日18時17分発行